

洞子子集

160  
198

160-198



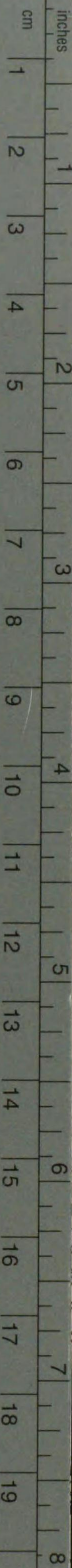
\*1200800009891\*

# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

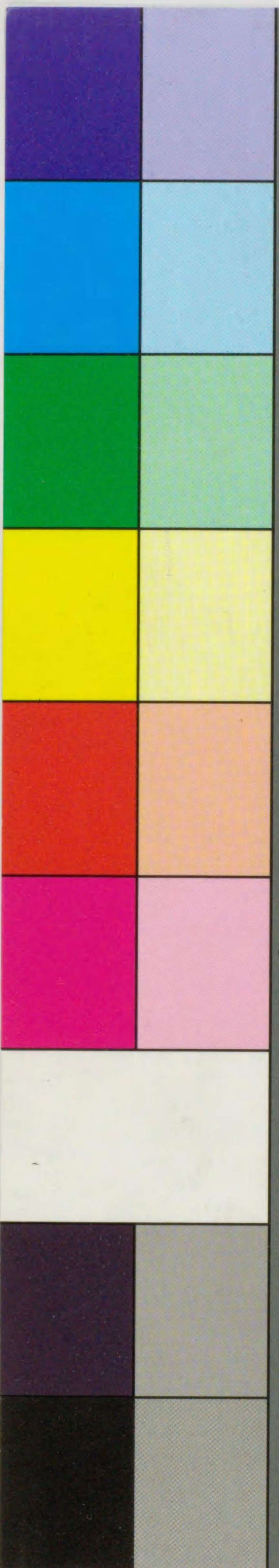
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



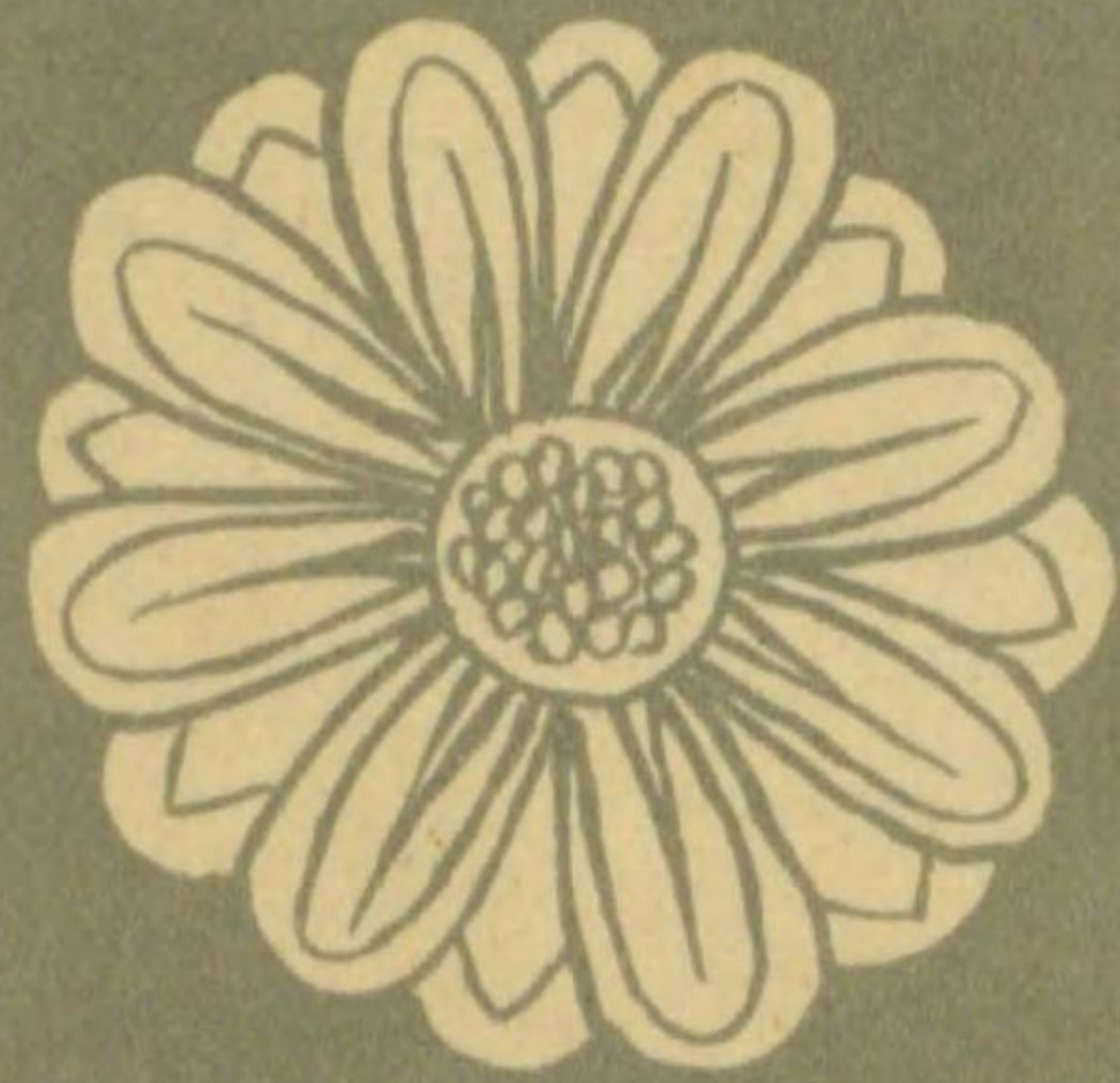
# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak







洞

し  
り  
り



ふ

り











百八十八番

←



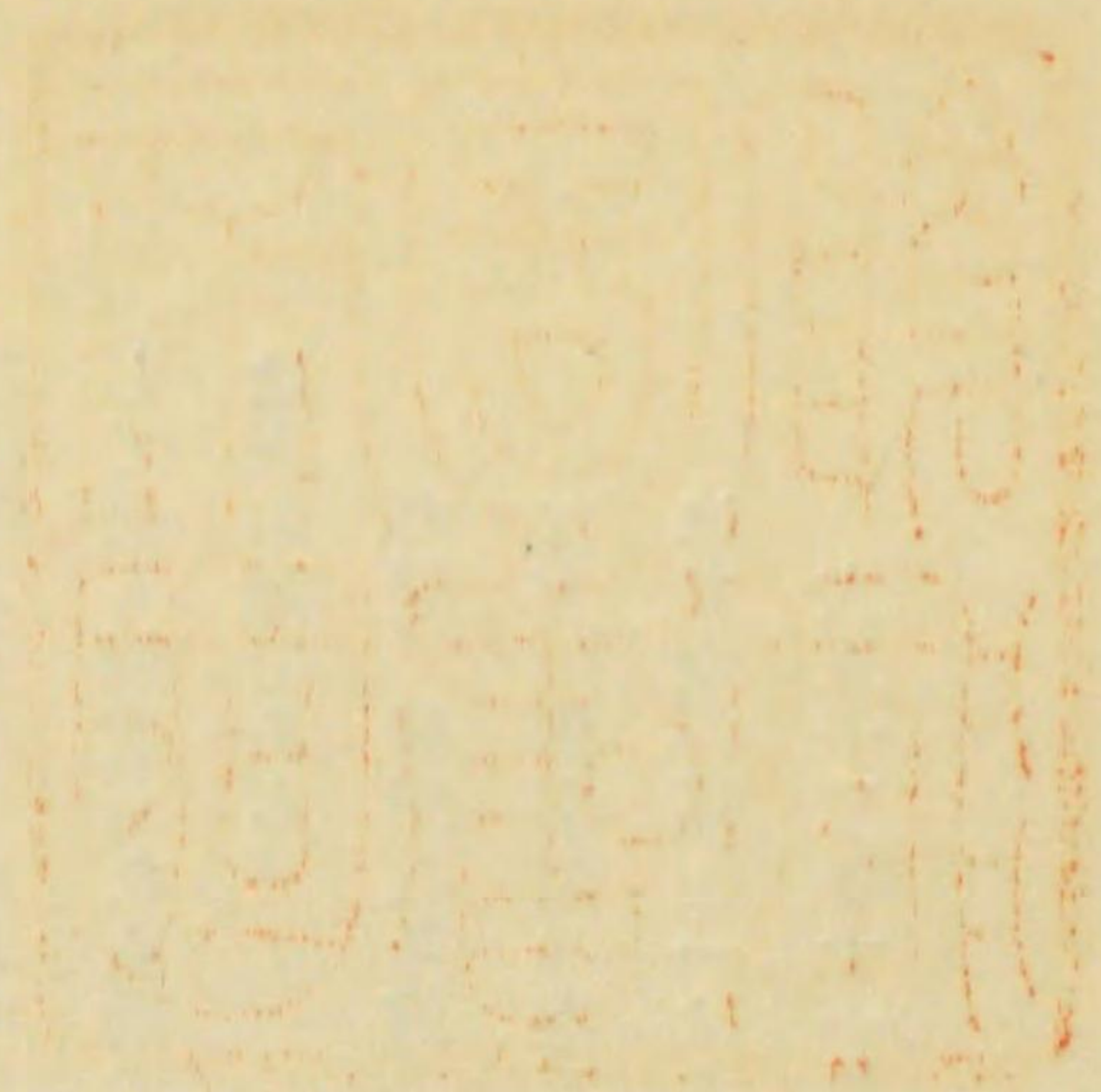
## はしがき

關東の大震災大火災は端なくも吾家に大不幸を齎らし妻貞代を夫の手より母の許より而して愛兒の手元より奪ひ去りたり幾十萬の家庭には吾家に勝るの不幸もありつらむ去れど吾家の悲嘆は何れの家に勝るとも劣らず母を慕ひし兒等、妻を愛せし夫、子を頼みてし母親は如何にして此悲を軽くし嘆を拭はん。拭ふとも去るべくもあらず軽くなるとも悲はうせじ責めて英靈を慰め遣れる吾等の思やりの爲に故人の物せるものを蒐め又は之を弔ひ之を悼む文や詩や歌などを得て印行し置かば兒孫の教ともなり戒ともなり故人の追憶をして常に新たならしむるの便もやと思ひ茲に追悼録を作る事とし舊友知人の方々別して最も親煮したる紳士淑女に願うて此本を成すことを得たるは寄稿諸賢へ深謝する處なり。當時諸方面の方へ出せる手紙は左の通である。

拜呈 突然且吾儘の御願にて誠に恐入ますが亡妻貞代追悼の爲其筆にせる手紙（御持合あれば）や同人を憶ふ文や詩歌などの御寄贈を得て記念の爲に小冊子を作り置たいと思ますから御多忙中なれど本年中に御寄贈を願上ます、之れ一は兒女の爲と一は本人を偲ぶ追善の爲でありますからどうか御聽入の程偏に願上ます。

大正十二年十一月廿三日





目次

編者 寄贈本

故人自筆の寫眞並其肖像及祖先の短冊.....

追悼の短冊寫眞一.....井上通泰先生外.....

はしがき.....一

貞代の家系.....二

祖先の歌數首.....三

貞代年譜及性質.....三

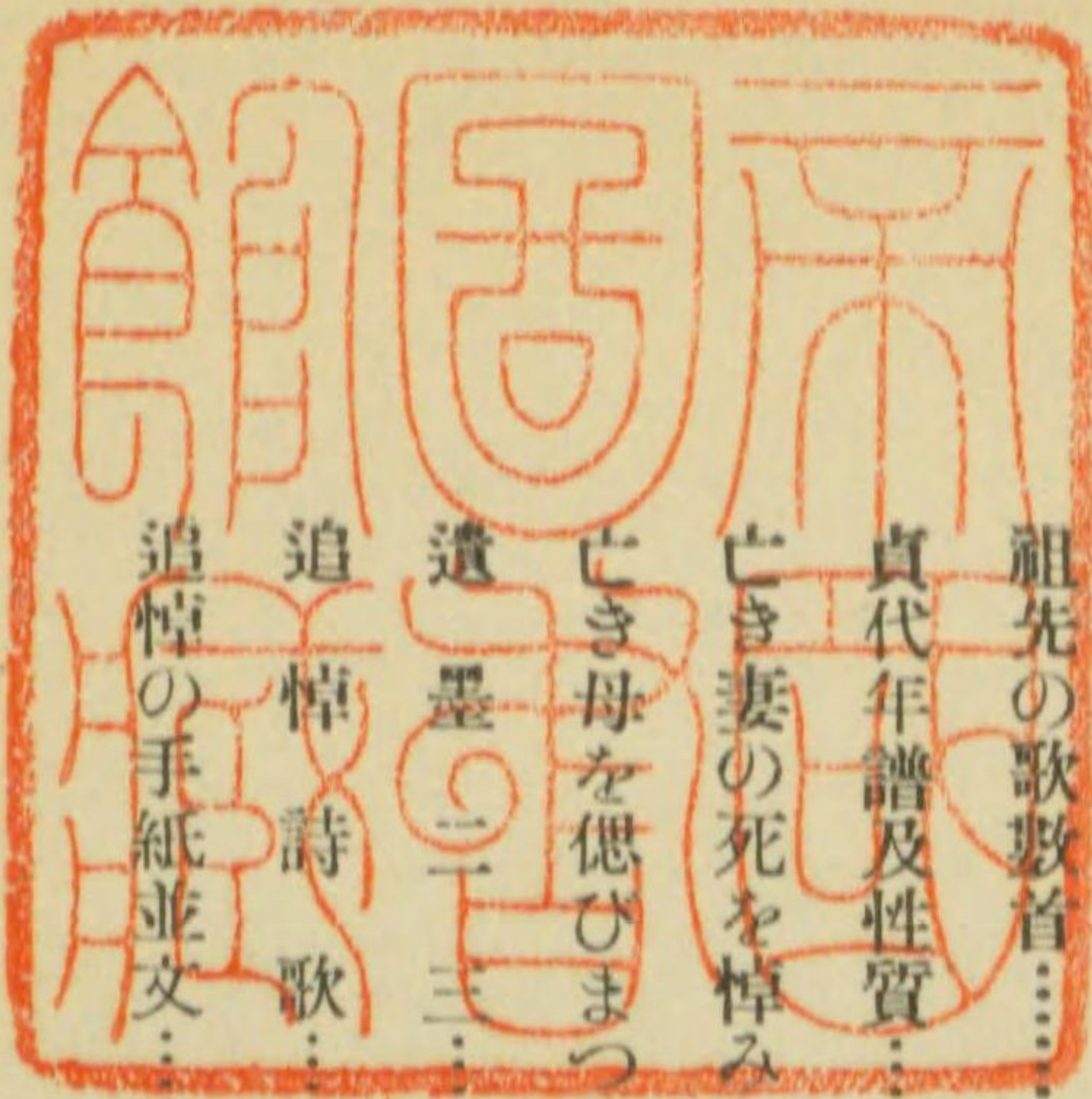
亡き妻の死を悼みて.....六

亡き母を偲びまつりて.....七

遺墨二三.....二〇

追悼詩歌.....二四

追悼の手紙並文.....兎



目次

大正 13. 6. 5 寄贈















秋の月あかく光りて見おほえ此  
ほしはやけたる雲まかくれぬ 由親

田中貞代は

君をよみて

はか

あまのこゝろをよみて

あまのこゝろをよみて

あまのこゝろをよみて

田中貞代の君の

よみて

無常子

あまのこゝろをよみて

あまのこゝろをよみて

あまのこゝろをよみて

あまのこゝろをよみて

あまのこゝろをよみて

あまのこゝろをよみて

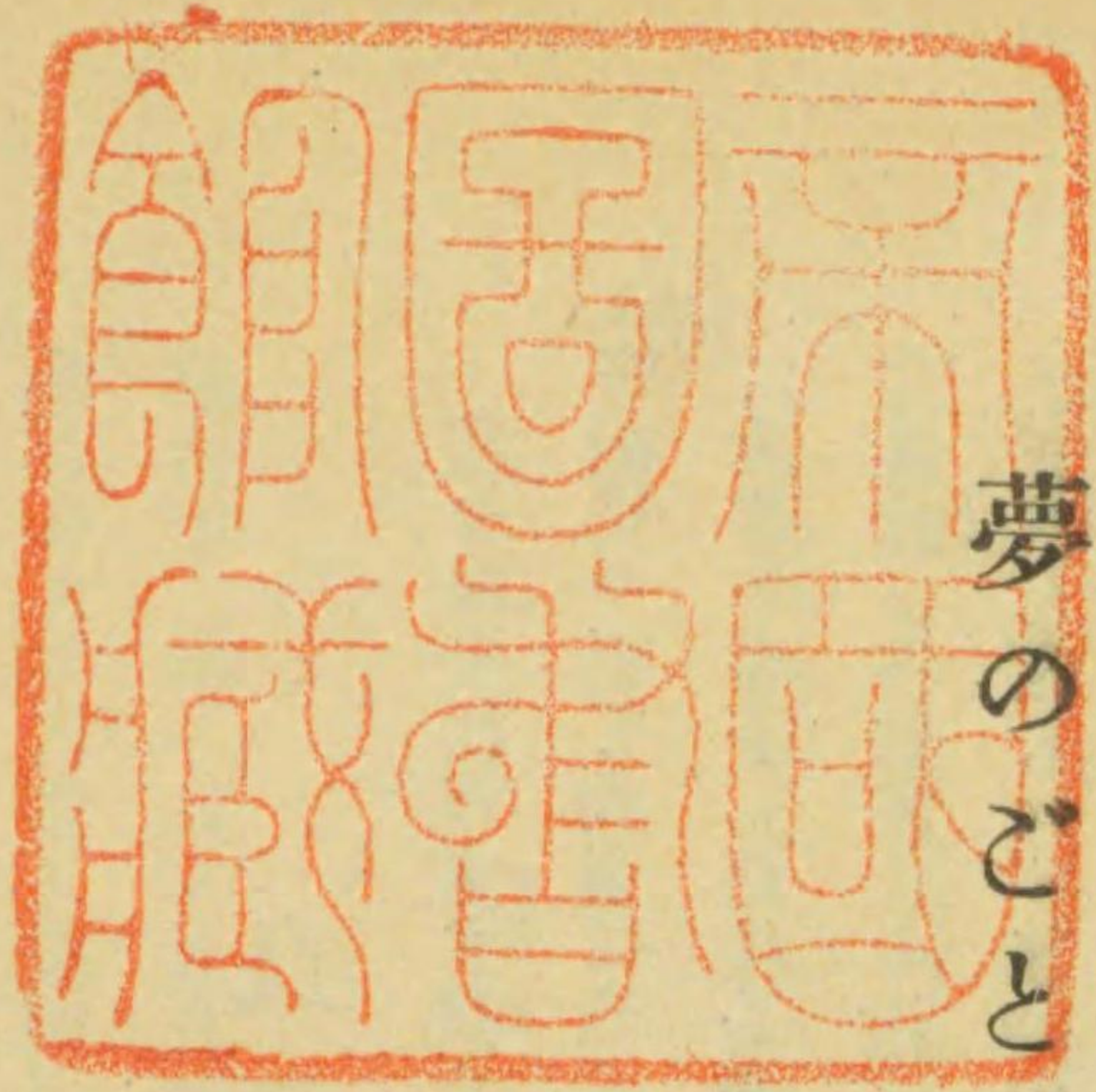
君門衛右清森

子繁部服

子賀佐藤内

君藏孝永清

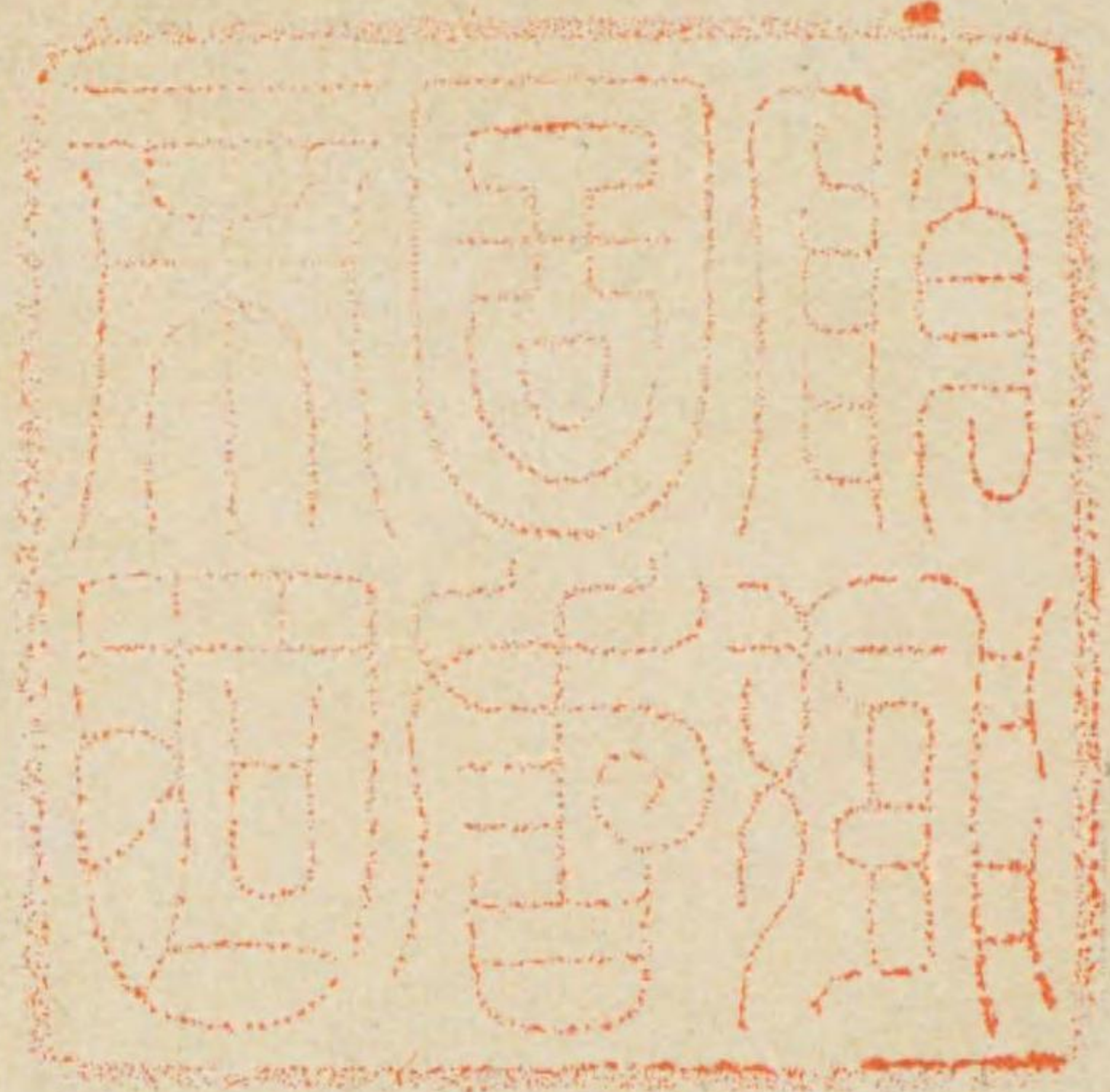




夢のごと

成りにし君を夢にだに  
今は見ることかたくも有かな

貫之





# 凋める白菊

## 貞代の家系

遠き祖先は申すも長き事ながら貞純親王八代の孫田中五郎義清より三代田中太郎基秀の後胤源義一より降り義次義充義方等數代を経て義泰に到り寺崎正作の長女を納れて室となし女子あり之に養子し次で女子くに子に義定を養ひ友子を生み友子に義達を養子し貞代を擧ぐ貞代に副島家二男次郎を養子せり義勝は義泰の子にして別に田中家を立て今の義直の祖父たり。父義達は谷内家より出で谷内氏憲家を嗣ぎ妹林家に嫁し二神くに及柴田義生を生むひさ子は末妹にして嘉代を生む。母友子は天逝し間もなく義勝の長女磯子を娶る磯子の兄は義質判事たりしが曩に歿し義直家を嗣ぐ妹穂並は菊池象作に嫁し龍夫を擧ぐ現に陸軍中尉たり次妹は菊池元一に嫁せり前遞信技師にして藤子と云ひ一女あり大塚秀矩に嫁す。貞代長男義郎は三十五年京城に生れ十五歳明治學院中學三年して天逝す次男義次三十九年大阪に生れ現に學習院高等科に在學す長女已代子大正六年一月長者丸に生れ聖心女學院に在學す。

## 紀念の爲祖先の歌一二を掲げて昔を偲ぶ

田中次郎

父君乃七十の御賀によみて奉る

七そちの後のよはひはなかな濱のまさこの數をよみもつくさし

祝

いろの名の萬代かけて色かへす彌さかえゆけ相生の松

みねの尾も八重たちこめよいく霞老のさかゆくみちまかふため

義泰のみまかりけるを悲みて

あしたゆふへ草のはやしにわけいりてこゝろ盡せし君をしそ思ふ

義泰の身まかりける初盆にて

こそこの冬雪ときえにし其君のなきたままつるけふのかなしさ

祖先の門歌に對へまつりて

大祖乃のぞみしはかり榮えずともせめて正しき子にて繼かなむ

義家

義勝

義泰

登路子

同上

次郎

## 田中貞代年譜及性質

明治十二年一月十五日伊豫宇和島市富澤町に生る

明治廿六年高松小學校を卒へて京都府立第一高等女學校に入り二十九年四月本科卒業秋田なる父の許に到る

明治三十年春父に隨て宇和島に歸り假寓す

同三十一年父に従ひ廣島の官舎に入る同年十二月華燭の典を擧ぐ。三十二年五月上京家を麻布永坂に持つ

田中貞代年譜及性質

三



明治三十二、三年の候本郷西片町に住す次て麻布市兵衛町に移る

同三十四年四月主人に從て京城に赴く當時海路一週日を要し仁川に上陸し京仁鐵道に依り京城に入る此時の公使は林男書

記官萩原守一外交官補植原正直(今の駐米大使)等あり

同三十九年二月長男義郎を擧ぐ

同三十五年二月主人歐洲留學を命ぜられ歸國するに先ち京城を去りしが前後彼地に留まりしもの四年を越ゆ

同年三月次男義次を大阪なる父の官舎に擧ぐ

同四十年末主人歐洲より歸朝するにより東京に移住す

同四十三、四年の候咽喉を害し阪神地方に轉地せしが約半歳にして全治せり爾來病を知らず

大正二年春父官を辭して上京す即ち長者丸の地を相して茲に家を建て隠居す同年十一月父歿す

同三年四月新築の住宅成る爾來今日の住居たり

同四年一子を流産す

同六年二月三日長女己代子を生む

同六年二月主人官を罷めて日本石油會社に入る

同十二年九月一日關東大震災の爲め横濱箕輪下の假寓に於て永眠す

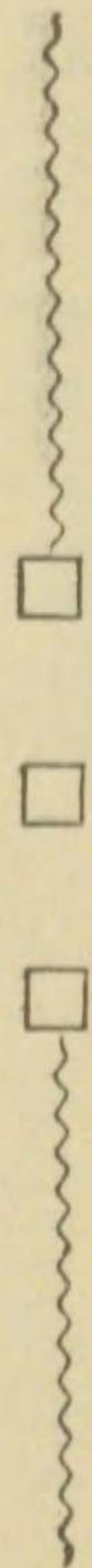
結婚後廿五年の間他の爲に媒酌の勞を執りたるもの尠らず岡田代吉と長谷部家との結婚を手始として江口青木の縁組、

小林川戸の婚縁、渡部と加藤、富永と野々村、三宅と押田、押田と井上、永山と野村、馬場と服部、島田と松本、平田と富

又健康は小學を出でし頃より至極壯健にして身長五尺を出てす體量十三貫餘肉付宜く顔は丸く眼少く凹み重瞳到て溫和の

風貌なり眉濃からず怒り又は叱ることなく獨り自ら隠忍する方なり數字宿所などの記憶は中々強く嘗て人と争はず質素勤儉

交も浮華の氣なく交際場裡に出づるを好まず常に家を修め兒を育てるを其任とせり。



後徳大寺

思へたゞ夢か現かわきかねて

有かなきかに歎く心を

貫之

手に掬ぶ水に宿れる月影の

有るかなきかの世にこそ有りけれ



# 亡き妻の死を悼みて

田中次郎

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを  
命だに心にかなふものならは何か別のかなしからまし

業平  
白女

The treasures of the deep are not so Precious

As are the concealed comfirts of a man

Lock'd up in woman's love. I seent' the air

of blessings, when I came but near the house,

What a delicious breath marriage sends forth---

The violet bed's no sweeter!

Middleton

地震行

田邊松坡

秋暑如燬日將午。

然有響肺腑。

直把大地供掀翻。

碎山河兮覆屋宇。

瀾濤驚走崩地維。

巖石亂飛折天柱。

濱中倒壞火災隨。

十萬人家無所遺。

東京市中三日火。

街衢大半付燒夷。

生靈千萬灰燼底。

到處誼傳無可疑。

親戚友交指難搜。

安否消息何由知。

鐵路已破郵信絕。

幾度仰天空嘆噫。

噩夢忽回秋之夕。

露氣沁肌衣如滌。

陰蟲唧々咽枕邊。

猶驚大地餘怒激。

天も落ち地も崩れん斗りの地震が今日の前不起らむとは満都を灰燼にする大火が今足元に起らむとは何人か之を豫知せん而して此災禍の渦の中に家の者が巻き込れんとは否な最愛の妻が其中に身を殞さんとは夢想だにせざりし所なり。人生は誠にはかなきものにて今日あれども明日を知らず今年あれども明年を測る可らず宛がら水上の泡の如く草葉の露の如しと云ふはけに理なり。理なりといへど餘りに無情なり非道なり如何なれば子の手より母を奪ひ母の膝より子を引離し夫より妻を去らしむる乎、天心あらばよも爲すまじ心なければこそ斯る非道を敢てしたるべし、今更返へらぬ緜言ながら恨の數々を述べなへ心地す。

茲數年の夏は福原男の片瀬の別荘を借りて海濱生活を爲せるが十一年は遂に行く克はざりし爲にや己代子が兎角咽喉を害して風を引き易ければ醫師の勸もあり旁十二年は春頃より海岸の地に行かじめんものと横濱在住となりし宮野法學士に頼んで本牧邊の海岸に家を借る事とせるも學校の爲や兎角の事なき爲空しく借家せる儘なりしかば甥の大學生坂口忠男が轉地する爲に利用せしめしに止まれり其後本牧は餘りに海岸に近く却て咽喉に宜らずとて少く手前の箕輪下に借家し置けり七月末

亡き妻の死を悼みて



漸く貞代は己代子を連れ女中を伴ひて轉住せり其折予は徒歩會員と燕岳アルプス踏破を敢行して歸宅すれば既に彼地に往て在らず爾來時折日曜祭日などを利用して見舞旁一泊せる事あり家は獨立の四間瓦葺門構にて風通も宜く夏季は涼しく日常宜しく近隣亦相當の勤人の住する所にて知人はなければも當座の住居には適せり貞代は當初より横濱行は氣が進まぬ風にて二度までイヤダな一と洩せるも從順なる彼は無碍にも言はず女兒が喜んで居るに任せ安んじて居住せり八月廿六日には予も見舞ひて一泊し共に買物などに出でて市中伊勢崎町を散歩せり廿九日は貞代歸京して母上と己代子女中を残し置き支拂を爲し又引返へしたり之れ實に最後の別なりしなり予と義次とは常に海岸と山間と何れが宜き避暑地なりやとの問題を解決せん爲且は二日續きの休日を利用して輕井澤の眞價を見定め置かんものと三十日夜より上野を出でて永松君と共に輕井澤に赴けり夜半三笠ホテルに到着し翌日は義次と共に地藏川や吾妻方面の輕便鐵道沿道を一巡し歸途山本直亮相馬半治米山梅吉などの知友に會し其翌九月一日はゴルフを遊ばん計畫なりしも雨天なりし爲中西巖君の避暑先を見舞ひ義次は福原永松方を訪ひ廻はりし折柄突然大地震襲來し新築の二階家も倒れん斗なりしが中西と共に屋根上に這上り再三の餘震を避けたるも後には戸外に出で大地や池水の大動搖するに驚けり然れども其震源の何れに在りやは全く判明せず淺間山かと仰けば煙だに立たず何地に起りしやを知らず夕方ホテルに歸へれば警察鐵道方面の情報として頻に電話の來る處によれば秩父山系噴火すと云ひ或は東京大震災と云ふ夜半に及び東京の大被害を耳にす此折ホテルは電燈消滅し蠟燭さへ心細ければ早く横臥せるも時々此餘震と不安と東京横濱の心配の爲安眠する能はざりき。明れば二日相馬君と共に歸京して情況を探究せんと申合はすれば矢部廉君來談其可然を云ひ山本直亮君亦老母を残したればとて之も共に歸京せんと云即山本相馬・室積、岩倉具光、米山梅吉など同車にて十時出發せり沿道の被害は聞きし程甚からざるも風評は中々にて東京全滅横濱甲州全滅と云ひ餘りに大ギョーなるに驚き之を信ぜざりしが高崎にて初て日々新聞の號外を見宮城炎上を始め京橋日本橋神田等の全滅を知れるも尙未だ信ぜず

第二章

同行の内何人かの自動車を電報にて呼寄せ同車して歸宅せんと申合はせし程なりしが益々東京に近づくにつれ炎煙空に漲り震害愈甚しく大宮工場など大被害あるを見て龔の號外の慮ならざるを信ぜり而かも未だ横濱の形勢は卜知す可らず或は一日早目に引揚けしなれば幸なり半日早く去りしなれば助かりしならん夫とも津浪などの虞あれば如何なりしならん己代子は如何母上は如何貞代は如何と刻々胸間に往來して寸時も安んずる能はず其間到的處の驛に乘客詰込二等車の窓外より押入らんとする勢にて中々の混雜を極みたり二日の夕には早く日暮里に着し一氣會社に到り更に自宅にも歸りうべしと考へしが之は全く空望にして川口驛に卸されし頃は日は西に傾き倒潰家屋櫛比し食料缺乏の状態は到底東京市に入る事すら如何ならんと案じ始めたり十餘丁歩し再橋を渡り雜食を求めつゝ赤羽驛に着せしは已に日暮にて人込の混雜名狀す可らず辛うじて日暮里行の車に押入りて山本相馬岩倉等二人は同行するを得たるも室積夫婦は手荷物と婦人の爲に乗る能はず日暮里に着すれば線路上に避難者の殺到せる事名狀す可らず僅に其間を縫ひブラ提灯の光をたよりに丘上に上れば徑路雜踏火炎自ら天に沖して餘震と共に最も危険と感せり遂に又引返して線路傳ひに田端驛の丘に引上たり此時の光景は人間の目あたり見る最愉快たるものにて火炎の遙に延焼しつゝある光景と避難者の生死の間を往復する大混雜汽笛の囂々たる何とも得言はれぬ有様なりき。やがて岩崎氏の別荘を見當り其塀を圍りて遂に庭内に一時收容さるゝを得たるは何よりの仕合なりしなり。廣々たる芝生の庭中に安座してハヤシライスの馳走になり爆音、火焰、鮮人の噂、銃聲、四方燒失の話や聽且見つゝ遂に蚊帳の中に入り蒲團の上に横はるを得たる時は蘇生の心地せり然れども夜中種々に考へて安眠する能はざりき。翌朝々食の馳走になり共に本郷白山に出で大通路を南下し進むにつれ火炎の漸次甚しかりしを知り大學附近より南すれば眞に全滅の光景を目睹し避難民が電車内と云はず通路の只眞中に横臥せるを見て其の悲惨の狀勢に驚けり本郷大通順天堂湯島一帶よりお茶水橋の尙餘燼に煙むれる處を走り通り駿河臺より神田一面只々灰燼となれるには茫然自失せり夫より神田橋の墜落に遮ぎられ常盤橋新



吳服橋を通り日本銀行の無事を語りつゝ、鐵道省の全焼を見て丸ノ内に入れば意外にも茲の無事なるに一驚せるも吾日石社の有樂館が外面痛く損せるに愕然たり四圍を一周し入る處なく正門より辛うじて這入り奥田君の在るを聞き一階の慘狀に自失せり次に鐵道協會の無事を知り又引返して永松其他の來るに會し應急打合を爲せば橋本中野氏も見え津下氏も來る通信連絡ガソリンの取寄隅田川の安否應急手配等の打合を爲すや内藤社長見ゆの恰も此時三井銀行の江藤得三君連呼して予を引立て大變なりと云初て妻は横濱にて壓されしも母上と己代子は先々無事と云ふを耳にせる時は全く感覺を喪失せるなり何物も取敢へず一應早退を斷わりて自動車に給油して自宅に向へり自金局員二人の便乗を爲さしめつゝ、砂塵濛々に入車大混亂の中を疾驅しつゝ、笛を口にして飛ぶが如くに長者丸に向へり廣尾一帯白晝尙兵士青年團等の誰何を受つゝ、吾家に入れり。

石の門柱は其一倒れ石垣は崩れ光景轉々慘愴書生と下男は横濱に到りて在らず自動車小屋を唯一の住居として疊を敷き起臥し隣の窪田氏も茲に在り倉の瓦は落ちたれど本館と離は格別の被害なし先づ心を鎮めて前後の成行を聴き今後の處置振を考一考せり。

『嘆きても嘆き盡せず惜みても

惜み盡きせぬ妹にもあるかな』

聞けば二日の正午過木村勇一と云中學の青年が來りて横濱の悲報を齎せしによりて初て妻は倒潰家の下敷となり母上と己代子とは座敷に横臥せし爲辛く壓死を免がれしを臺所口より放り出されし女中靜子(十八歳の少女)が地震最中に屋根瓦を剥ぎて兩人を救ひ出せし爲め近隣の農家に避難中なる由急報せし爲め事情を詳にし下男松木は飛んで出行き午前に見舞に出行きし田川亨と共に彼地に在る事を知れりなれども尙其儘に爲し置き難ければ一時より副島萬、中島、大工などを自動車に仕立てしめて救援に赴かしめ且先發兩人の歸來を迎へしめんと出行かしむ尙又聞けば昨夕鮮人二三千襲來云々の急報ありて此

方面一帶人家を空しくして林間又は兵營に避難するも一人の鮮人の影だに見えざりしと云聞けば餘りの馬鹿らしさと臍甲斐なきも程こそあれと憤慨に堪へず直に回狀を出して隣人の應援を求め此夕より直に部署を定めて自衛團を作り長者丸の警衛を爲さんと企てたり折も折正門前、ス社石油一罐を置去にせる洋装の二青年ありき之に由て見れば風聲鶴涙も去る事ながら又危険分子の徘徊して危懼の念を懐かしめしも事實なり。此日間々此方面當時の事情光景を詳悉し遂に夜警團を組織し順番部署を定め吾家を本部とし爾來數旬配給と夜警の司令部となりし感あり。次で夜に入り自動車は歸來り亡妻の遺骸を風呂敷包にして田川松木其他共々歸宅せり直ちに佛壇に安置して香をたき禮拜せり遺骸といへども妻がかくれしとは如何にも信する能はざりき。

『冀あらばかくりのゆかまし雲井には

吾に言はまく妻しまつらめ』

四日早朝より救護員を組立て、六郷川まで自動車にて其先は神奈川町郵便局まで人力車にて其先は橋梁墜落交通至難なれば撥荷と云ふ用意して出發し鈴木安助方宮野專太郎方に轉々流離困憊せる母上(六十五歳)と長女己代子(七歳)女中靜子(十八歳)とを救出して自宅に連戻らしめんと苦心せし甲斐ありて同日夜九時過無難に來着さられしを出迎へたる時は悲哀の中に喜悅の情に禁ぜず咽界の音便を聞しが如き心地せり。先きだつものは涙にて物語を聞くよりも早く皆暗涙にむせんで語を發するを得ざりき。日影醫學士の待受により夫々の手當を施し徐ろに慘劇當時の光景を聞くを得て初て箕輪下に於ける不運不幸罹災の狀況を詳しするを得たり。之によりて察すれば妻は恰も翌日引揚の準備の爲早午餐後奥の室にて荷物造を爲しつゝ、あり母上は幼児を寢かさんと座敷に横臥されつゝ、ありしが突然大地震襲來母上は其何たるを覺らざりしが貞代は隣室より『地震』と一言云ひて座敷へ飛込むよと見るより早く全家倒潰忽ちうづ梁の下敷となりけむ『モウ駄目』と一言を發

亡き妻の死を悼みて



るを耳にせるのみで暗黒世界の裡より悲鳴を上げ己代子は『おかちやん』と喚び母上は『助けてくれ』と夢中に連呼しつゝ天井の壓迫に堪へざりしが間もなく屋根裏にコッコ物音するより何人が来り助くるものと知り益連呼して聲の限り叫喚せるも貞代は此時一言一句を發するを聞かざりしと云ふされば此時は既に終焉の時にして最初の一撃にうたれあはれ四十六歳を一期とし廿五年の銀婚式を目の前に扣へつゝ手の届かん斗りの母にも子にも一言だに交はさず夫にも次男にも申残さん數々の事を獨り胸にひめつゝ早敢なくも彼世に永久に旅立ちしなりけり。

『黒髪の白くなるまでと結びてし

契りも今は空しくなりぬ』

母親と己代子とは靜女のかひなにて辛くも救出され九死に一生を得たり兒は何等の傷なく母は打撲傷に痛みり其時正に隣より發火しつゝありしかば一時間も経つかたゝぬに倒家の吾家は灰燼と焼けうせたり其際通行の人に拜むが如くに頼んで救出を求めしが老人一人漸く妻の壓死を檢し呉れ最早や駄目なりと言へる由にて其儘施さん術もなく女手小供手に火の手は近づきつゝあれば何とも爲さん様なく小高き日影ある農家の方に徘徊しつゝ着の身着の儘裸洗足の儘にてたどり行きしと云ふ其後間もなく焼けて妻は自からなる火葬にあひ面を仰向けて生けるが如く何等の苦痛なき體なりしと云ふ。噫何等の無慘ぞや何等の悲劇ぞや廿餘年一日の如く予と苦樂を共にし或は朝鮮の寒風に吹かれ或は日露の戦役に忙殺され或は兒等の爲に轉地し或は兩親の奉養に憊蹶して一日の安なく暑は暑に寒は寒に嘆されて夙に起き宵に寢て更に寧日なかりしは正しく予の同情に堪へざる所なり或は暮向の爲に或は衣服調度の爲に或は交際向の爲に時に或は窮乏の爲に思を惱まし考を碎きし再三なるを知らず而して今や漸く兒女の勞軽く困窮少く醫せんとして溘焉永眠せるは徒らに苦楚を嘗めんが爲に生れ來れるの感なくんばあらず殊に大正十年一月より三月に六月より八月に互り傳研に入院せる際の如きは朝夕通勤看護養護到らざるなかり

しは予の一生を通じて感謝措く能はざる所にして主婦として夫人として寸毫の遺憾なかりしを言はんと欲す。今後幾十年の生命を天に與へられしなば初て從來の苦難に酬い得べく兒女の成人を樂みうべく而して更に社會の爲めに貢献する所ありしならむに惜みても猶ほ餘ありと謂つべし。資性到つて慈仁の念に惇く家居の書生を始め縁邊常に其德恵に感泣せり尙剛健の所ありて苦辛憂鬱を隠忍して色に見はさず獨り自ら虫を殺せるは兩親の遺傳にして又克く修得せるを認む田中章子の吊歌にある如く『我と耐へぬる人をしそ思ふ』とは能く穿たれたるものなり。

『若枝をたらちねの手に残しおきて

獨りうつろふ庭のしらきく』

七歳の女兒は實に手中の玉にして何ものよりも心血を濺ぎし所にして其成育其教養には日夕最も心を碎きしなり然るに之を老親の手に残して遽に先立ちし遺恨は正に之れ千載の恨事ならめ正に其魂魄は現世に磅礴し居宅を幾徘徊して兒女を看まもるべし。

『幼兒をその面影と見つる哉

よき子になれや泰めまつれや』

抑も横濱に行かんとせし折妻は二度までもイヤダなと言を洩せり此の例は從來殆んど見ざりし所なるに矢張兒女の爲なれば致方なし長くもあるまじければなど慰めて往かしたる當時心私かに或は盜難にもや逢んかと思ひ盜難の場合物貫の場合など兼て説示したり、夢にも大地震大火災などは思ひ及ざりしなり又輕井澤に到りし留守中一日も早く引揚方を命じたりせば斯る慘事も生ぜざりしならんなど今更の愚痴を繰返すも是非なし。

『夢にだに此くと知りせば止めましを

亡き妻の死を悼みて



貞代は田中家々付のとも子と義達の間を生れ生母は間もなく天逝したり學問あり婦徳の譽高き方なりしと云ふ其後磯子の手に愛育せられ或は宇和島或は觀音寺に移り主として高松市に生長し十五六の折京都府立第一高女校に入り勉學數年祖母と母親と共に京都鴨沂にりし家に居して明治廿九年其業を卒へたり當時の同窓學友は何れも見事なる婦人にして「さゞれ會」として鴨沂會員に知らるゝ賢婦人のみなり其感化を受けて大に啓發せる所多かりしは明なり越えて三十年は秋田なる嚴父の許に過ごし次に宇和島の舊庭に入り三十一年暮父の廣島なる官舎に於て予と婚儀を舉げ爾來東京に住して遞信省の諸賢令夫人と交はり本郷西片町の寓に於ては添田敬一郎夫人貞子を始め法學博士松本重敏君一家と親交し或は渡邊信之助或は毛戸勝元博士一族と或は因藤成光君の家と或は福田秀五郎君の家と交はり漸次知友の數も殖え朝鮮に於ては内外人と交際頻繁を極め内地に歸りては再び東京に住し予の職務の忙廣汎なるにつれ益々上流各方面の方の知遇を受け感化を蒙むるに到り白金に住しては三品會の小橋、岡、の家と交はり城南會々員となり幸に一人前の妻として親として友人として立ちうるに到りしなり之を思へば轉た腸九回胸腔寸斷するの感なくんばあらず況して子たり兒たるものゝ悲と老先短き母親の力落しは察するだに尙餘あり。

一周は去り二周は來り三四周忌を経て十月七日に自宅に於て告別の式を行へり實は關東幾十萬の生靈未だ其所を安んぜず生死さへ明ならざるの時に式を舉ぐるは心に苦痛なりしも遺兒の爲亡靈の爲には其苦痛を忍んで之を行ふ事とし朝野知友の盛なる參拜を受け死者に取りては誠に餘榮に輝やけりと謂つべし越えて七七日を了はり十一月十一日納骨式を濟し十二月九日百日の祭を行て一段落を告げたり其間の悲は譬ふるものなし毎夜只暗路に沈み行く心地して一家は只管幽界に近づけりと思はれたり埋葬其他の式は日蓮宗の佛式により二本榎承教寺住職之を行ひ戒名は

智月院 妙貞日義大姉

と申し其遺骨を東京府下多摩郡在東京市多摩共同墓地の新塋に埋り遺物を青山なる先塋の傍に收めたり。誠に予が未熟なる漢文もて抄せる墓誌銘といふを記せば左の如し不文蕪辭體を爲さず禮做はずと雖も其精神は之を出でず。

墓誌銘

正四位勳三等法學士田中次郎室貞代以明治十二年一月生於宇和島父義達母友子母早世依後室磯子之手成長學于京都第一高等女學校三十一年結婚焉三十四年從予赴京城翌年舉長子義郎十五歲而天次男義次三十九年生于大坂父之官舎長女己代子大正六年生於長者丸貞代資性溫良嘗不爭克忍克勉體亦健最富慈惠之念內助之功不鮮矣十年予病篤前後二回日夕看護莫不到十二年夏爲子女轉地橫濱箕輪下假寓九月一日偶會關東大震災家屋倒潰爲所其厭遂永眠舉家悲愁無極矣積年辛酸未酬且本年冬將舉銀婚之式而一朝遭此慘事痛恨何堪矣越十月七日行告別式葬遺骨于先塋之傍

貞順慈愛富 闔家常春風  
忽然異幽明 暗淚轉千行

次郎選 竝書

此頃口ずさみける二三の拙詠を記せば

盛岡あたりの紅葉をみて

みちの奥は今し紅葉の盛なり吾が涙にも色そはりつゝ

偶感

亡き妻の死を悼みて



忘れむと遠き旅路に出でしかど思はひはまさる秋の夜半かな  
日をふれば忘れむものと思ひしを過せど過ぎずなほもこびしき  
夜なくのそのよの夢の見え繼げや現になれば悲しきものを

納骨式

旅衣ぬぎもえやらでなきがらを移しまつれば又袖ぬらす

百日祭

百日へぬ今日も昨日の如くにて法師のかけにその聲をきく

最近偶感

百世までと契りし人に別れこし朝影のこと吾はなりぬる

鳥のこと空ゆく人に言傳て、妹に言はまし兒等も安しと

宇宙茫茫幾千載生靈幾億幾輪轉、誠に水の上のうた形の如く朝魚の上の霧の如く人生は只夢の如くに且つ生れ且つ消え昨  
今を知らず今明を圖る可らず此間に在つて夫と不ひ妻と云ひ母と云ひ子と云ふ只天の配劑に従ふのみ觀じ來れば誠にはかな  
きものゝ如きも天の宿命は必しも爾く偶然短期なるものならじ悠遠にして高尚なる神意の此向に寓するものなくて叶ふまじ  
果して然れば亡妻の靈一たび死すとも必ず此世と關聯すべく其魂は髣髴として吾を護り吾と語らう時あるべし英靈永へに吾  
と交はり吾と物語るべし此追悼の文を草するに當り恰も其警咳に接するの感強く宛がら生ける佛を見其物語を聞くに等しき  
は正しく心靈交感の證なすやは。

「遂にゆくみちとは兼て聞しかと昨日今日とは思はざりしを」實に此文をを茲に草せんとは去年の今日思ひも寄らざりし所

なり幾度繰返へしても命の心に任せぬこそ恨なれ。今徐ろに英靈を慰めて吾一族の益安泰にして子孫繁榮し邦家の爲貢獻し  
一に故人の志に背く無らん事を祈るのみ。

『とこしへに心安かれありし世に』

かはることなく家はをさめむ』

大正十三年一月十一日記於長者丸居宅

亡き母を偲びまつりて

男 田 中 義 次

今迄十年以來病氣と言ふ程の病氣をした事の無いあの丈夫であつた母が急に他界の人にならうとはどうして信する事が出  
來よう、又其死を信するにさへ過去の記憶に残つて居る面影は判きりし過ぎて居る。

確か八月の廿八日だつたと思ふが横濱の家から僕の歸へる時に輕井澤は寒いから着物は澤山持つて行かなくてはいけない  
とか、色々細かい注意を與へて下さつた母の姿が妹と列んであの本牧の家の立關の格子の間に見える様だ、今に何處から  
か歸へつて來なさるのではないか知らんと言ふ様な氣持で何日かを過したが、他界に行かれた母の歸へられる日は來なかつ  
た。

今母の追悼文を書かうとして筆を持つて居るが過ぎ去つた日の母の面影ばかり浮んで文の方はすこしも進まない。亡くな  
つた子供の年を數へる様なことかも知れないが小さい頃の僕の頭に残つて居る母に就いて述べることを少時らく許して頂き

亡き母を偲びまつりて



度い。

今でこそ家が建ち列んで昔の面影もないが今から十四五年前僕の四ツ五ツの頃には兵庫の昔屋には家は廿四軒しかなかった。そして今の商家の列んで居る道の片側は一面の水田で遠い所に在る小塚に松が少し許りあつて夕方等よく鳥が其木を指して飛んで行くのを見て居たものだ。随分後迄續いた事だが其頃もよく四ツ違ひの兄と喧嘩をした。其頃の事は断片的でよくは覚えて居ないが或朝床の内随分劇しく喧嘩をした事があつた。やはり四つ違つただけにたうとう布圍でグル／＼まかれて泣き出した。庭先きに居た母が上つて来て兄を叱つて居るのを母の後ろから肩越しに見て自分が勝つた氣になつて喜んだ事もあつた。

又シャボン玉を作つて麥藁で吹かうとて兄と二人で土手の下に積み重ねた麥を取りに行かうとした時母が後から急いで来て兎しい土手を降りて二三本の麥を取つて来て下さつた事は今も判つきりと覚えて居る。

春になると菜種が裏の畑に一パイ咲いて居た。ツクシも澤山生えて居た。ツクシをつむ手を休めて舞ひ昇る雲雀の影を見ては其聲に聞き入つたのも、もう十何年かの昔になつた。其様な時には必らず一緒に居た母も今は亡き人の一人となつて唯記憶の内に残つて居るばかりである。先年蘆屋に行つた時に開けたとは聞いて居たが俗化して昔の面影の少しもなくなつたのに驚いた。

今になつて思ひ出すが頂度母が僕達の爲に麥藁を取りに降りて行かれた邊に、髮床屋と瀬戸物屋が出来て感じの悪い床屋の親父が僕に『何處から来たか?』と大阪辯で聞いたことを覚えて居る。

幾つ位の時がよく覚えて居ないが六つ位の時だつたらう。其頃は御濱離宮の近くの遞信省の官舎に居た。

母は何處が悪かつたのか、冬の寒い雪の降る日に、川に面した二階の室で障子の開け放して籐椅子の上に寝て居た。(母の

寝て居たのを見たのは此時位のものである) 未だ少さかつた故か雪が降つても少しも寒いとも思はなかつたらしい。少しばかり突き出た、窓に積つた雪を兄と顔になすり合つては母に心配を掛けた。

又其官舎に居た時に一度ひどい雷の鳴つたことがあつた。何んでも其時は元の新橋驛に落ちてお婆さんが腰をぬかしたと聞いたのを覚えて居る。

雷の大嫌ひだつた兄は母にしがみ付いてガタ／＼して居た。僕は側で繪本か何かを見て居た。此事は後々迄兄と何か喧嘩をする度に持ち出して母を笑はせたものだ。

其頃は恐しいと言ふ事を知らなかつたのだらうが、雷等は怖はくはないと言つて大得意だつた。

又或る時は女中をロシア人(其頃は悪い者は皆ロシア人位に思つて居た)だと言つて、小さい玩具のサーベルを持つて家中追ひ馳け廻つた事があつた。そして終ひに障子を破いてしまひ、サーベルもくの字形に曲けてしまつた。

大聲で母の所に泣き付いた時に返つて叱られてサーベルも取り上げられた。然し何日か後に返してもらつた時には其サーベルも眞直ぐになつて居た。夫れが新しいのだつたかどうかは覚えて居ない。

五つ六つの頃の事は断片的であるがよく覚えて居る。返つて小學校時代の事は之れと言ふ程の事が無い。唯兄と喧嘩をして母に泣き付いたことは何度あつたかよく覚えて居る。

少し新しい事になるが中學に入つてからは随分母に心配を掛けた。一、二年の頃、殊に二年の時によく悪戯をした。何か事件があると必つと僕が關係して居て、學校に母の呼び出された事も再三あつた。實際あの頃の事を考へると何んと言つて御説してよいかわからぬ。自分ながら手に負へない悪戯つ子だつたと思ふ。

然し三年四年五年となるにつけて幾らか自分でも考へ出したのか少しは勉強もする様になつた。



各學期の終りに學校から渡示する成績の通知をもらつて歸つて來た時には、よくまあ學校に呼び出されないやうになつたねと言はれる度に、自分は顔には出さないうで笑つて過したがどんなにつらかつたらう。

然し夫れにも増して五年の最後の學期に、通知簿をもらつて歸へつた時髪を結つてだつた母に、今度の卒業式には攝政官の前で卒業證書を僕が總代として受けると言ふことを話した時に、口には『それはよかつたね』とだけしか言はれなかつたが、其顔に表はれた嬉しさうな表情は決して決して忘れる事が出来ない。

卒業式の朝手袋を忘れていかうとする僕に綺麗な白手袋を渡して下さつた有様其時は何とも思はずに出掛けたが亡くなられた今考へ出すと涙が浮ぶ。

每學期學校から成績は送つて來る。然し喜ばさうとして差出す母は、唯記憶の中に微笑を以つて残るだけである。

(十三年二月)

遺墨 一一三

最後の手紙と認めらるゝ橋本令夫人宛のものなり其前日横濱市役所勤務宮野法學士宛のものが引揚準備のものにて別記の通りなり尙一二寫して茲に掲ぐ。

一、橋本令夫人宛のもの

承り候へば御實家御令弟様には御病氣御療養の御效なく此程御永眠遊ばし候由皆様の御力落御愁傷のほどいか斗におはしまし候唯々御察申上候お年もいまだ御若く入らせられし御事と存上候にいかゞ遊ばし候や返すゝ御残り多く入らせられ候

御事と推し上まるらせ候老少不定とは申しながら定めなき世が恨めしく存候主人より通知致し參り早速御悔み申上んと存じながら御無禮申上候何とぞ御身御大切に御力落の餘り御障りどもなきやう祈り上候  
まづは右まで あらく

八月卅日

田中貞代

橋本御奥様

御まへに

尙々ペンの走りがき失禮の段平に御許頂き度候

二、根岸竹の丸三三五一宮野專太郎氏宛

拜啓其の後は御無沙汰申上候諸都合により來月二日當地引上度と存候まゝ家主へは可然御傳被下度家賃は本月分も未拂につき敷金の内より引去りくれ候やう尙先月の分と來月の分(二日迄)も共に御話願度尙水道瓦斯電燈も恐入り候へ共手つき御願申上候草々 八月廿九日夕

三、滋賀縣大津市赤十字病院内吉川明子宛

其の後は打絶え御無沙汰申上候先日は御なつかしき御便急ぎ拜見致候貴姉様には長々御入院の由さぞかし御難儀の御事と存上候次第に御快方とは存候へども何とぞ御身大切に祈り上候今は御子様に取りては一番の杖柱となられ候方故私如きが申す迄もなく御自重遊ばされ度念上候當地同級會も昨年森本姉御病氣以來とんと御集なく阿方様御出立の折小松舟津の兩姉に



御目にかゝり候以來誰様にも御目にかゝらず時々電話にて御話申上ぐるのみに御座候來月にも相成候はゞ一度御目にかゝり度ものと存居候當地本年は誠に雪多く昨年十二月中に二度三年は五度もふりつもり宅の近所などは八日降りつもり候雪が未だ消え申さず候御申越の御嫁様の儀早速御返事可申上管の處親類に病人つゝいて不幸など候し爲心ならずも延引致し御申譯御座なく候色々考へよき方も候ひしならばと存じ候も何分御地と離れ居候ては一寸御話も致しにく、夫れに一度も御目にかゝりし事なき方にては貴姉様に責任を以て御世話下さるにしても一寸むづかしく候半と存ぜられ候只今一人他より話御座候ひしも女の方が當地に居らるゝでなくまた御目に懸りし事も之なく候故御断り申上候次第他には一寸心當も御座なく候まづあしからず御承知被下度候をかきな書き方にて御分りにく、候半も御判讀願上候先は御見舞旁御詫までかしこ

二月十八日

#### 四、長崎縣松島炭坑社宅に在る姪池田博行の妻

##### 萬龜代宛の八月廿一日狀

残暑はけしく候折柄皆様御さはりも之なく候や先日は御手紙頂き有がたく存上候早速御返事をと存じながら御無沙汰申上候段幸に御許被下度候さて先達は何より調法のふのり澤山にわざ／＼御送り頂き有がたく御厚志萬々御禮申上候實は御願申上御送り頂かんかと存じ候折柄とて一しほうれしく永く調法致候以前兩三回長崎縣下の矢張島より送り貰ひ候事之あり誠によろしく候ひし故一度御願致度と存居候しにて御志萬謝奉り候博萬様もさぞ成人と存上候己代子の寫眞はあつ子さんはいかが爲され候やら先日手紙差上候も御返事之なく候これも例の方が何とか申され候してはなきやと氣を廻はし居候歸京致候はば寫眞御覽に入れ申すべく候先月末より當地に參り居候幾分涼しく蚊の居らぬ事丈は誠に仕合に存居候内田金五郎様も兩三度御出下され此度は出征軍の郵便部長として昨日出立致され候北樺太などは皆管内のよし新奥様にも御目にかゝり候が若くて先の方よりは美しく候當地に住居致され候が來年十月頃には歸らるゝ事と存候私共も本月中又は來月始迄滞在の積に候萬様の事は自然にほとほりのさめるを待つ事が第一と存候先は御禮までかしこ

六月八日

田中貞代

#### 五、廻文

第四十七回の廻文鶴飼姉より御届け頂き早速拜見致しました、此度は稻葉、村井、川島の三姉をうしなひました事ほんたうに悲しさと淋しさを感じました、ことに川島姉のお子様方には御兩親に御別れになりどんなに御淋しき事かと御察し致します、稻葉姉には少しの事で寫眞帖が間に合ひませす五六日の相違で御在世中にお目にかけれませんでした、後で同姉の御良人よりの御來狀でわかりました、校長先生やら稻葉姉に寫眞帖を作り乍ら私の不行届の爲御目にかけることの出來なかつた事を重々御わび申上ます、お子様や御自身御病氣の方は御大切に、一日も早く御全快のほど祈ります、これから又梅雨期になりいやな時節と相成りますが折角御大切に祈り上げます、

誰もいふ言草ながら此たひそ

げに世は夢と思ひ知りぬる

歌城



追悼詩

悼田中次郎君令閨之慘死

天變奈夫酷 遽然失麗姿 悲離元有約 哀別豈無期  
暗淚飛濕袂 香煙垂守碑 幽魂呼不答 空駐悼傷詞

辻 泰 城

哭田中令夫人

陰雲深銷雨濛々 化鶴何心去入空 血淚染成紅木葉 無窮愁思亂秋風

松華 渡邊 寅治

追悼乃歌

南天莊井上先生歌

通 泰

残れるとうせにし人とふたかたに

比としくかゝるわか涙かな



田中貞代の君をいたみて

(日本石油社長) 久

寛

大方の世をいましむるおほなるに

君いけにへとなりしくやしき

同

(内藤社長令夫人) 佐

賀

多まはりし其水くきのあとみても

かへらぬ君のしのばるゝかな

いつまでもなとて忘れむ多くひなき

その大なるにうせしわかとも

(御歌所参候) 外山 且正

なるの火はきえて百日もたちぬるを

またくもり居り本牧のあたり

からまつの林のひまの秋草を

つとにときみは折りすさびけむ

ひとりあるあるしとしらてしたしけに

門の唐獅子ならひ居るかも



(浅野工学博士令夫人) 春子

震災の爲にみまかり給ひし

田中貞代子刀自をいたみて

はゝをすくひ子をたすけむと身ひとつを

いけにへにせしきみそかなしき

田中貞代子刀自の告別式にさふらひて

同

なつかしくいまなほみゝにのこれるは

なさけこもれるみこゑなりけり

歌一首

(中西電氣局長令夫人) 中西文子

なてしこに吹くやあらしをみにうけて

獨りちりけむ露をしそおもふ

田中令夫人の御逝去を悼みて

(南天莊同人) 森清右衛門

脊をおきてなと逝かれけむ人妻の

かゝみと見てしあはれ君はや

田中貞代の君を忍ひ奉りて

(海軍少將) 山崎鶴之助

験し無き荒振神をうらみつゝ

いまなき人を忍ひけるかな

同上

山崎春子

思ひきや頼みし人もいまはたゝ

涙なからのゆめならんとは

歌一首

(同) 級 北國らく

友にとり呼ひとつとひにし君は今

よへとみこたへなきそかなしき



故田中令夫人の御霊の前

(製鐵次長) 副島 千八

おほなるのせつなも親と子を思ふ

君か心は動かさりけり

故田中令夫人を悼みて

(同令夫人) 副島 すや

いとほしきみ親とみ子のいけにへに

なりてそとはに旅まし君

田中夫人をいたみて

(南天莊同人) 松林 歌子

白金の野邊をかさりし秋はきの

露はこほれぬなるのとよみに

友をいたむ

(同 級) さだ子

亡き友をしのふ心に見る庭の

おち葉かなしき冬は來にけり

田中氏の妻の身まかりしを悼みて

(錦鷄祇候) 草間 時福

夢とのみおもへとあやしいつまでも

面影うかふ庭の白菊

奉追悼田中夫人貞代之君震死歌二首

(南天莊同人) 播磨辰治郎

病ならば千人の醫師もめさましものを

なるの災すへもなくして

あらたまの年はかへれとかへりこん

人なきやとやさひしかるらん

歌一首

(五十嵐博士令夫人) 五十嵐 松子

惜しまる君かおもかけしのはせて

つゝむにあまる涙かなしも



田中次郎氏令夫人の災難を悼みて (南天莊同人) 松林 安熊  
はなれるし脊の君おもうひまもなく

吾子かへりみる間もなかりけむ

田中次郎氏を慰めて

同

なけかすてみ國の爲につくせ君

ほとけも斯くそねかひなるへき

田中刀自の身まかりたまひしをいたみ

(海軍少將) 近藤 基樹

千世までとちきりしものを

あきをたにまたてちりにし菊のひともと

逝かれし夫人をいたみまつりて

納富嘉代子

さためなき世にしあれともつゆよりも

もろくも消えし君そいたはし

とこしへにかへらぬ君もみたまのみ

御子やすかれとかけにそふらん

田中貞代子の君はおのれ京都女學校同年生のちなみによりとしころいと  
親しくむつみ侍りしをこたひ震災の禍にかかりて身うせ給ひぬるはくち  
をしともいはむかたなしまいさゝか思ひつゝけたるをかいつけて

御靈のみまへにそなへ奉るになむ (同級) 鵜飼恒子上

いかなれはみなさけふかき君にして

このわさはひをのかれさりけむ

ことあれはきみにはかりてけふまでは

こゝろやすくもくらしゝものを

なき君もいかにうれしとおもふらむ



あとにつくせるせのみこゝろを

わか涙とまらさりけりのこしたる

きみかをさな子見るにつけても

ありし世にこゝろつくしゝうつし帖

いまはかたみとなるそかなしき

よとせまへともに箱根にあそひしを

おもひいてつゝなかなぬ日そなき

君とわれしなえらひしてもとめこし

家つといまは形見なりけり

震災にてゆきたまひし人をいたみまゐりて

(兵頭中將令夫人) 榮 子

夢つつゝめにそ残れるなるのため

はかなくなりし君かおもかけ

牛場登代子

かなし子の手をもはなちて大なるの

とよみのうちにきえし君はも

ある夜田中氏の門前をすきける時 湯河 元臣

この夜ころいかに君はすこすらむ

かけもさびしき窓のともし火

(山口文學士令夫人) 貴 美 子

ありし世の君か言葉しのはれて

むせふあらしの夜半そ淋しき

玉章にのこれる筆の命毛の

たゝなかなれと祈しものを



添寝するはなき稚子のいかばかり

よことの夢もさびしがるらん

震災のためみまかりし貞代姉君を惜しみて

菊地壽美子

なきあとのその面影も忍はれて

をしき思ひそいやまさりける

たのみみつる君みまかりてかなしけれ

よひかへすへきせんすへもがな

(津下専務令夫人) 實子

はなきのかれにしあとのみちわけて

世のよしあしのしるへにはせよ

さ月はかり橋本ぬしの園生につし見にもものして

うち興したりしことをおもひよみ侍りける

につしの花につとひしうつしるを

けふのかたみと誰かおもはむ

(池田十三郎令夫人) 辰子

惜しめともつきぬ名残をいかにせむ

なるかくつちの恨めしきかな

逝きませと君か情の數々は

永久のかたみとのこりけるかも

(服部博士令夫人) 繁子

田中貞代の君のみまからせ給へるを悲しみて

いつとてもあひみんなものと頼めこし

我おこたりの常ならぬよに

しもにあへす花はかるともしら菊の



かをりはとはにひとわすらめや

九月初旬御不幸の報を聞きて

柴田フデノ

菊月の一日の嵐に誘はれて

散り行かれにし人そ戀しき

百々千人數限りなく逝かれしも

よも姉君の身にかゝるとは

十月二十日五十日祭の夜に

姉君の姿はそれとわかねとも

變らぬ御聲きくぞうれしき

涙のみたまの如くに流れ來て

御顔拜するひまもなかりき

十二月初旬御片身を拜して

御片身を手にして又もならひなる

かへらぬことの忍ばるゝ哉

なげくとてかへらぬことゝ知り乍ら

又あらたなるつゆのこほれて

巳代子さまを思うて

いたいけに東の空に學ぶなる

巳代子の君の幸祈るなり

貞代の君のみまかられしをいたみ參らせて

(同級) 牧瀬 孝子

大なるのありし日のゆめ其君の

ましゝ世のゆめさめてはかなき

時雨ふるまとのもにてものぬへは



心にかよふ君のおもかけ

濱ゆけは月影ふめはありし世の

むねにうかひてたへかたき哉

ありし世は花にとひこし大崎の

やかたきひしくわくらはのちる

らうたくもすかたねひゆくかなし子を

おもひのこして逝きし君はも

納骨式に参列して

その君のこゝにますかと思ひけり

なきたままつる今日にてありしを

立のほる香のけふりの末きえて

君かすかたそおもかけにたつ

百日のみまつりに

友はゆきて百日へにけりあひ見しも

あひわかれしもきのふと思ふに

友とち打よりて君の追悼會をもよほす

思ひきや今はかたみのうつしゑを

けふのつとひの友とみんとは

うつしゑは生けるか如しなき友よ

ものをのたまへものきこしめせ

冬の日箕輪下の御罹災地をとふらひて

友の逝きしあとそと思へは土くれも

木のやけはしもなつかしくして

手向にはたゝ涙のみ心のみ

あまかけりても友よかけませ



日はおちぬ冬の夕日は今おちぬ

やけ野となりし本牧の里に

中西 文子

さいつ年短冊に歌ものせよとの御手紙をたまはり候時未熟なる私のいかでかかと御ことわり申上候ひしに数日の後御奥様に御目にかゝり候時アナタはひどひとてわが脊を打ちて御せめ遊ばされし事候ひき其御元氣なる御奥様不慮の御災のためなきかすに入らせたまひ此度は追悼の歌をとの御手紙いたゞき人生のはかなさ身にしみわたる心地いたし候さりながらこの哀傷のきはみをよみいでむ力なき身はたゝ心の中に御冥福を祈りまゐらす外なく歌の方は御ことわりいたさむと筆とり候へば今更にわが脊をうちたまひしをりの思ひいだされて

たはむれて我をばうちしその音の

心の耳に残るさびしさ

(黒田太久馬令夫人) 琴 子

なき數に入りにし人をおもふことに

身もなほゆるくこゝちこそすれ

さためなきうき世をあとに旅立ちし

人のこゝろのしのはるゝかな

(島根縣女子師範學校長令夫人) 井口喜乃惠

いつくしみ深きみ親のくしみたま

天かけりてやわ子守るらめ

胸せまり落つる涙の玉雫

くたけしまゝを手向とやせむ





故貞代の君を偲ひつゝ

(内務部長) 富永 一二

金銀の雪降る如く星あまた

君のみたまも其の中にてる

われは只はかなく散りしつゆのごと

逝きし人をはあはれとそ思ふ

流れ星淋しくうせてゆく秋の

今宵は逝きし人を思ひて

荒風に散りにし花のしのはれて

残りの香慕ふ今日かも

消え失せて形は更に見えなくも

なほしのはるゝ露のかけかな

現には消えにしものをなほありと

思ふ現は君のおもかけ

田中令夫人のみまかりたまへるをいたみて

渡邊 寅治 清高上

たれもかもつひゆくみちとしりなから

さきたつきみそかなしかりける

田中令夫人のはふりを送りまつりて

野邊送るみちの草木に置く露は

きみをかなしむなみたなりけり

弔 歌

大塚 秀矩

なけきてもつきぬうらみは長月の

大地ゆらきに逝きし君かも

秋風のおとつれまたてつゆおりし



青葉なからの君をしそおもふ

御 靈 前 へ

(法學士) 香山 勇二

御難をは本牧にてと聞きしとき

わが咎なりと唇をかむ

やすらかにいこひ給へる御靈をは

われも歌はむつたなけれども

弔 語

(永松爲治郎君) ○庵居士

去 來 自 由

同

寶 所

田中貞代夫人のみまかれしをいたみて

(馬場知事令夫人) 淑 子

おもひかけしや大正の

治まる御代は十二年

なつのおつきもやうくくに

うすらぎそめし菊月の

一日なりしよあめつちも

くつるゝはかりの地震のわさ

折から君はよこはまの

かりの屋とりに夏さけて

おはせし時よこの時よ

老少不定の人の世は

露のやとりといひなから

いとしの御子やはゝ君や

比翼連理のかたらひも

むつまし夫をあとにして



思はぬ旅にいそかれて  
ゆきにし君そいたはしや  
なき君の上しのぶくさ  
いろくにおく露さへも  
いとしけくして今もなほ  
なつのひと日のすくよかな  
面影のみのしのはれて  
ゆめかとはかりたとらるゝ  
ゆめかとはかりたとはるゝ

うけれどもいけるはさてもあるものを

貫之

死ぬるのみこそ悲しかりけり

### 追悼の手紙並文

弔文

棟居美智子

あの御元氣よき奥様が御死去あそばしたと云ふことはどうしてもほんたうのことゝはをまはれません、それがほんたうであるとは夢ではないかしらん、奥様に初めておちかづきになりましたのは明治三十二年のころのやうに覺えて居ります。麻布永坂に御住居になつて居まして赤い手柄のおまるまけのうひゝしい御様子いまでも目のまへに髻髻として参ります、その後お互に東京を去りましてしばらくおめにかゝりませんでした、十数年後再び一しよに東京に居ることゝなりましたため爾來またお親しくお交りすることが出来ました、誠に遞信省官舎の頃はすぐおむかうで親同士も子同士も毎日のやうに往來して大そうおせはさまになりました、その頃私の妹をお世話頂き御親切に御面倒下さいましたことはいつまでも忘れずことは出来ません、ついこの夏の初めの頃まで毎火曜日に私宅で洋裁のおけいこをこ一しよにいたしましていつも肩をならべておもしろいおはなしをいたしてうちきようじながら學びましたに、いまでもそのころに奥様がタナカとおしたためになつておおきあそばしましたおものさしがおあづかりしてございます、これはどうかかたみとして私にいたゞかせて下さいませ、この一尺のものさし、實に私にはたくさん思ひ出がございませ、なつかしいかなしいのしい何と申てこの心をいひあらはませう、とても拙い筆にはつくせません、あの謙遜な眞實のこもつた御親切な田中奥様もうこの世ではおめにかゝることが出来ないとは何と云ふかなしいことございませう、御遺族様方の御心のうち眞に御察し申上ます、さはれ、死と云ふことは人生の終りではなくて毛蟲が蝶々になりますやうにからだは死しても靈魂はあまかけりて美しい天の國の榮えに



入るものと信じます故、いま奥様の御霊はさきにゆかれし御父君御子息はじめ多くのきよいともがらとともに神のまへにてはへある御生活をあそばしこの世にのこりになっておいでの御母君、御主人御愛子様方の御ために祝福をいのつておいでになりませう、また私等のためにもおいのり下さいませうことと存じます。

あのふくよかな御様子に接しおやさしいお言葉をうかがふことはこの世ではもう出来ませんが私ども世心を去りて思ひを天に馳せましますときに靈の御交りをいたすことが出来ます、奥様を天の國から地上へおよびもどしすることは出来ませんが、いまにやがてきつとこちらから参つておあひする事が出来ます、私のむすめもむすこも父も弟もあの國へ参つて居ます、あゝ死後は天の國へ参るものとならなくては、奥様のゐらつしやるあまつ國をしのびますときにそれからそれとなつかしい追憶がわいて参ります、小松奥様坂野奥様町田さんのおぢさま方のおかほががやいて見え遠いものにおもつて居りました天の國がちかい親しいものになつて参りました。

奥様どうぞ御國へ行きうるものとなります様にさばきの試験に及第してみくにへ参られますやうにどうしてもおめにかゝりに参らなくてはなりません、そのとき私の靈がどうか奥様の御霊に直面してはつかしくない様に地上に於けるそれよりも一層清められ高められた永遠の友がきの結ばるゝ様このおろかなひくい私の靈のために準備しなくてはなりません。

奥様どうぞ御祈りを御たすけ下さいませ。

一、あまつみさかえに

やがていりて

あひみるときこそ

やみもなけれ

世たゝかひの

くもはれわたり。

あさ日とにほふ

みさをあふがん

二、かがやくみもとに

やがてのほり

うけしみめぐみを

おもひいでて

たのしきころを

あはせてともに

こよなき御名を

たゝへまつらん

三、なみだのあめなき

くににすみて

この世にしられぬ

さちをうけなん

主なるみかみの

すべしろしめす

あまつみくには

かぎりあらじ

——讚美歌三四九——



## 田中貞代の君の御靈に

(辻太郎男爵令夫人)

柳

子

世はなべて虚飾の大波に捲き込まれしが如くにもみえし中に唯ひとり波の飛沫にも、とはに、みどりの色かへぬ嶺上の松にさも似たるはわが敬ひ慕ひまゐらする田中次郎氏夫人貞代の君にぞありける、君や徳高うして質實によく家を齎へ、老いまし、母君に孝にして子女の君達を亦人格的に育てたまふ、實に内助の功、いちじるしくおはすと、人たへければ、かゝる君にこそ、あやからせばやとてわが末妹、深川繁治に嫁するにあたり媒介の君と仰ぎまゐらせたりきそれよりは妹のみかはわれも亦屢々訪ね参らせて或はさながら母君のもとにあるが如きなつかしみを以て、或は得がたき益ある物語うけたまはるを此上なき幸と思ひて過しぬ、しかるに去る九月一日は如何なる日にやありけん振古未曾有の震災は横濱本牧に暑をさけ居られしあはれ、この清き君をば失ひ参らせけり、母君や愛兒の君達さてはうからやからあらゆる慕ひまゐらせし人々を殘して恰も其むかし尊き聖が衆人の罪を一身に擔ひて安らかに死の臺にのほらせ給ひしが如くに、

惜しみてもをしみてもなほ余りある此君を偲びまつりて同じ震災に九死に一生を得し我等は日頃、君が示し給ひし意義ある行を學び復興をはけむ帝都に女ながらもいささか盡し参るらすつとめこそ君への追善、將又感謝ならめとは思ふなりけり、夫の君の深き御悲嘆はやがて追憶の詩文を多く求め給ふときくわれ學淺くしてしかもまた病中思ふかたはしだに筆運ばず、唯尊き御靈に感激を供へまつるのみ

かしこ

大正十二年九月八日

巴里來狀二

ルロツ夫人

Paris le 8 Decembre 1923

17 Rue de l'Éstrapade

Cher Mr. Tanaka

Je viens vous offrir tous mes vœux et souhaits pour la nouvelle année.

Hélas! vous avez été bien éprouvé dans Cette horrible catastrophe qui a bouleversé votre beau pays, mais vous êtes un peuple très énergique, vous vous releverez vite-Mr. Kano Kogi nous a appris votre grand malheur! recevez, Cher Monsieur Tanaka toutes nos condoléances! La vie a des moments terribles, mais vos enfants par leurs bons soins et leur grand attachements pour vous, apporteront un adoucissement à votre douleur.

Sans doute cette catastrophe va modifier vos projets et peut être ne viendrez vous pas en Europe comme vous le pensez, mais ne croyez pas si vous avez des commissions pour Paris, de me le dire. Les miens sont en bonne santé pour l'instant..... Adieu, cher Monsieur Tanaka, puisse l'année 1924 être plus élémentaire et meilleure pour vous! et je vous prie de croire à me bien bonne amitié.

Bien Cher Monsieur et ami;

M. G. Leroy.

フェルナンド女史

J'ai appris par monsieur Kanokogi le grand malheur qui vient de vous frapper, croyez bien. Je vous prie, à mes sentiments bien sincères de condoléance. Est-ce que la Nippon Sekiyu? a beaucoup souffert de la catastrophe?

追悼の手紙並文



C'est une grande épreuve pour votre patrie, que est affreux tremblement de terre! J'espère comme vous dans le courage et le patriotisme au Japan pour edevenir à nouveau prospere.

Meilleurs voeux et souhaits pour la nouvelle annee, qu'elle vous apporte un peu de calme!

Nous allons tous bien ici, je suis toujours tres occupée par mon art, je travaille pour des journaux d'illustrations.

Au revoir, cher rami, croyez bien à toute ma sympathie et ma bonne affection.  
Fernande Leroy.

### 桑港總領事大山卯次郎君來信

尊書拜見しました何んと云ふ御氣の毒な事でせう他の不幸に拘はらず貴家御一同の御安全ならん事を心から祈つて居りましたが夫はだめでした誠に誠にお氣毒に堪へません皆様にお氣毒に御同情申し上げます併かし大兄やお子さん達が御無事でそれだけは御不幸の中ながら御仕合はせでした不取敢御悔申上げます

### 鳴沂會弔詞

貞代様の御不幸を蔭ながら伺ひました皆々御同情の涙をしほつて居りましたが御家族様の御上をよく承知いたしませんものですから御悔みを申上げる事もつひ延引いたして居りましたが今日端書拜見いたしました又更に胸ふたがる心地がいたしますあなた様を始め御子様方や御一族様の御悲嘆如何ばかりでござらせられませう深く御察し申上げますまことに今回の地震は稀有の慘状を呈しました幾多同胞の慘話を見聞いたします毎に身を切られる思ひがいたしますもはや此上は帝都の一日

も早く復活して御在京の方々の一刻も早く安らかな生活に入られること斗り願ふのみに御座います申上げるまでも御座いませんが幾重にも御身大切に遊ばされ御疲勞など出ませぬ様にと只管御祈り申上げます先は會員一同に代り右御悔み迄かしこ

大正十二年十月六日

### 弔文

(法學博士) 松本 重敏

嶺子

私達夫妻は田中様御夫妻の御結婚當時よりの御親交を蒙りて眞の同胞の誼柄であり私達の兒女は田中様御夫妻の甥や姪の如くに慈まれて居りました。奥様は御災難の少く前に御自身の御災難を知らるるよしもなく私達の次女の病を案ぜられて御訪問下されました其おやさしき御心の奥様が間もなくあの大地震にお亡くなりになりました眞に同胞と相別るる悲しみの想に堪へませぬ田中様御夫妻は正に田中家中興の太祖であります田中様の今日あるは田中様の御知力に因ることではありますけれども奥様の大なる御内助に依るものであります其御功績は田中家と共に永久に不朽であります。奥様は温厚篤實柔順優雅實に稀なる貞操の御方でありました其御方が今や幽明長へに別れて逝かれ復御逢ひすることの出来ぬは如何に泣きても悲しみの盡きぬことであります其御方を失はれたる夫君の御胸裏を察しては同情に堪へませぬ其御方を母に持たれたる御子様方を思へば涙の湧くを禁ぜられませぬ



追悼

東文大教授  
文學博士

吉田熊次

令夫人の告別式の廣告を新聞紙上で見た時、僕は先づ事の意外なのに驚と共に、直ちに田中君が如何許か落膽せられたであらうと云ふことを感じた。多年喜悲を共にした配偶者と別れるのであるから、残れる人の悲歎を思ふは月並の感じに過ぎぬと言へばそれまでであるが、僕が直ちにかく感じたに就いては特別の理由があつたのである。

思ひ起せば明治四十年の春のことであつた。僕は巴里に於て田中君と旅宿を同じくし、それ以前には面識もなかつたに拘らず非常に御世話になつた。歸朝後には令夫人とも御知り合となり、義妹の結婚に就いては田中君御夫婦に御媒酌をも煩はしたのである。但し僕は小石川に居り、田中君は芝に居られたので、實は頻繁に交際も致さず、令夫人などにも余り度々は御目に懸らなかつた。然るに御令息の家庭教師として、僕の方を卒業せる文學士を御世話申したので、其の男から御家庭のことなども耳にした。此度の御不幸に就いて僕が特に田中君の悲歎を直覺的に思ひ浮べるのも斯る事情もあるからである。

其の文學士の男極めて謹慎者で寧ろ無口とも云ふべき寡言者であつた。併し或時心から感じ入つたやうな態度で田中君の家庭生活を物語つたことがある。田中君は會社の御用などで御歸宅が深夜に及ぶこともあるが、令夫人は必ず御歸を御待になつて居る。田中君もまた随分疲れて歸らるゝ譯ではあるが、四方山の御話を令夫人になされた後に、初めて御休になる。令夫人は眞に良妻賢母で、一意専心家事を治められる。田中君の家庭生活は實に羨ましきものがある由を述べたのである。

僕は巴里以來の御交際に依つて、田中君は世の所謂實業家とか法律家とかと膚合を異にすることを知つて居る。外に出でては人一倍業務に精勵せらるるであらうが、内に入つては父としか夫として人間味のある生活を追求せられることと常に信じて居た。斯る性格の持主たる田中君が、天災の爲めに典型的良妻を喪はれたことを知つては僕は何うしても田中君が可相哀でならぬ。

今は亡き田中次郎氏令夫人に捧ぐ

(勅任式部官)

渡部 信及信子

大正十二年九月一日の災變、如何に有爲轉變の世とは申せ、泰平の聖代に而も我國文化の中樞たる帝都や横濱が、かくも悲惨なる阿鼻叫喚の巷と化し去らうとは誰か能く之を豫見致しませう。松緑に海水清き本牧の地にしばし保養して居られたあなたも、この慘禍の犠とならせられ、多年誠を盡して仕へられたる夫君や慈愛を籠めて擲育された令息令嬢に先立ちて此世を去り給はんとは、常に心竊に御家門の祝福を祈つて居りました私共争でか之を夢にだも想ひ得ませうぞ、その悲しき報知に接しました私共は驚愕哀悼唯呆然たるのみでありました。

夫君次郎氏は私と同學の先輩であります。私が學を卒へて官に就きました時は私を指揮董督して下さるべき上官でありました。同學の先輩としては温情以て私の誘掖敬蒙に努められ、上官としては謹嚴剛直苟くも假借し給はず、私は幾度か秋霜烈日の如き御叱責を蒙つたのであります。其の嚴肅なる董督の半面に於ては常に懇切なる至情を以て推輓を賜り、私をして感奮興起せしめられたのであります。これ私が先輩にして恩人たる夫君に對し敬愛と欽仰の念措く能はざる所以であります。尙ほあなた方御二方の媒酌に依つて家を成しました私共は現に享有する家庭の幸福も亦あなた方の養に外ならずと堅く信じまして、自らの現境を顧みる毎に、公私兩つながら深き御眷寵の有難きに感謝するのであります。私が爾かく感謝を捧



け、祝禱忘ることなき田中家の主婦にてあらせられしあなたが、不慮の殃の爲め倏ちにして幽冥境を異にせられ、逝けるあなたは思ひ残し給ふこといと多かるべく、夫君や令嬢は突然にして而も永劫の別離に悲み憂ひながら、時恰も枯林は朔風に鳴り四隣は蕭殺の氣満つる冬夜、あなたを慕ひあなたを悼み居らるゝ状を想見致しまして、私共は眞に九腸寸斷の感を禁じ得ないのであります。噫々

夫君は實業界に繁忙を極めらるゝ御身を以て今やあなたの追悼に肝膽を碎かれ、あなたの愛息と愛嬢は悲愁の裡にも、在らせられし日の御教訓を嚴守して、身を修め學を研きあなたの御旨に副はんが爲め拮据勉勵して居らるゝのであります。

これを以てせめてもの心慰せとなし給ひ、安らげく永き眠に就き給はんことは私共兩人が自らの心を勵まして御願致し所であります。

大正十二年十二月

弔文

(陸軍大佐)

堤

清

良妻賢母と思はなかつた吾妻も震火に無慘の旅路此方は美點愈々明朗に而して一面己が勤めの足らざりしをのみ感ぜしめせめては病の床の末なりせばあの事も話したらんに此事も諒したらんにあしもわびしものと思ひば切なる夫婦の情、噫此悲哀は獨り吾友の身の上のみにあらざるべきを想へば轉た天災自然の無情を感ぜざるを得ないのである、君が手向けの此一冊は獨り貴き貞代の君に對するのみならず同じ境遇に慘せられし幾多愉絶の精靈に同じ喜びを與ふるものにして誠に偉大な

る供養、慰靈となり一きは光輝ある手向けとなるべきを共鳴します。

君が追悼の書信中……………噫實に生存中は樂もさせずに……………斯くある事とは神ならぬ身の今少し自己の盡し方もあつたのに……………又北海の旅の先より寄せられた左の二首

忘るゝと遠き旅路に出てしかと思そまさる秋の暮哉

日を経れば忘るゝものと思ひしを過せと過ぎす猶も戀しき

清は泣きました梢も泣きました！噫、如何に清らかなる人間の眞情美であらうか、貞代さんも此温情を感得しさぞ快く神となり佛となり玉うた事であらう、然し貞代さんがあの厭苦灰消の切那、其熱き極度の御心中思ひは如何であつたであらうか、親思ひ、夫思ひ、子思ひの賢母君の胸中には鮮かに瞬轉、萬化の畫面は畫かるゝであらう、君の切なる思ひは亦亡き妻君の熱き思ひの反影を見る事が出来よう、

今更のようだが吾身の上を思ひやり悲愴と感慨は量り盡すことが出来ないのである、特に君の健康状態につきあれ程心を勞しておられた愛人、今頃も絶えず君の身邊を護りつゝあらるゝ事であらう、大災後は必ずや君が一段の健度に進む事も疑はないのである、何につけかにつけ思ひ出の種ならざるはなく、繰れば繰る程いや増し出づる涙の程、思ひやるさへ堪へ兼ねる。

然し君よ今は徒に悲哀にのみむせぶの時に非ず、夫人最後の思ひ出たる、御遺子の教育と御老母への孝養とを献身活恕と勉めらるゝ事が貞代さんへの大なる責務で且つは最後の供養慰靈である事と信じます、靈は決して亡するものにあらず、滅するものにあらず、君が捧ぐる衷心の此一冊は神宮僧侶の祈禱、經文に優る事幾百倍でありませうか、

御蔭に梢も君との先般來の貞代さんに關する追悼の文書に依りて信仰心の度を深くする事が出来ました。



書いては又更に落涙、情迫り行文は馬足御有あれ、最後に恭しく靈位の冥福を祈る、

弔文

(同級) 舟津春子

大正十二年九月一日は何といふ天魔の魅いりし日でございませう何といふ恐ろしい日でございませうこの計らぬ大災厄の爲に惜しい玉の緒失はれし数多き人々の中に三十年來の親しきわが友貞代様のこの數の中にいり給ひしとは誰れか思ひ掛けませう實に終生忘れる事の出来ない悲しい日でございませう。背の君の厚き思召にて告別式御靈移しお百ヶ日と一々參列さして頂きましてもどうしても御名残り惜しく忘れる事が出来ませんので十二月十三日といふに親しき友だち打寄りて追悼會を催しました午前十時青山墓地の花茶屋に集まりまして牧瀬様は箒、小松様は水桶、那波様は御線香、鷓鴣様と私はお花をたづさへ御墓地に参りました近づくに従ひ自づと悲しみ胸せまりやるせなき思ひいだきつつあたりを掃き清め香華をたむけてふしおがみすればいひしれぬ悲しさにましゝも涙を新たにいたしました。

在りし日のおもかけ見えてなかくに立ち去りかたきおくつきところ

夫より一同は御靈なむかへて今一度貞代様と御物語いたし度舟津の宅に集まりましたためいゝ御持參の古き新らしき貞代様の御寫眞の御前にお茶にお菓子に御晝飯をと貞代様を正容にしてこしかたの事どもをたどりつゝ半日を語りあひました。

忘れんと思へはなほも偲ばるゝみたまむかへてけふは語らん

貞代様とんだ御災難におあひ遊ばし何とも申様なき悲しき事になりましたいつも變らぬおやさしきお心で永の年月御交際下さいましたことを深く御禮申上また始終世の爲人の爲に御盡しあそばしましたあなた様が斯様な御災難にお逢ひ遊ばすとは餘りになさけなき神様の思召かと怨まれますが當日頃おやさしきあなた様なれば神様のお召のまにゝ幾萬人の犠牲とおなり遊ばして神の御前に参られた事かと存じますなれども現世では再び御温容にも接することが出来ませずおやさしきお聲も承る事が出来なくなりましたのは返すくゝも悲しうございませう契りも深き背の君御いとしの御子様がたをのこして先だたれ給ひしことは定めて御心残りでございませう御一族の御かなしみも申迄もございませぬが御存生中は人も羨む御幸福な月日を送られいまさぬ後は背の君の御心をこめられあらゆる方法にてあなたの御靈をなぐさめて居られますし御子様がたも御氣丈に祖母君、父君の御慈愛のもとに御成長遊ばして居られます故どうぞ御心安く思召され定めなきは浮世の常と御あきらめあそばしてとこしへに皆様の御身の上を御守り下さいませ。

現世の常とはかねて知りながら神去りましゝ君をしそ思ふ

いつもなればたのしかるべきおあつまりなれどもけふは何となく打しめり勝ちでありますのを神様も知ろしめたのでございませうか雨さへ降りいでましたので遠き方々もおはしませばとて盡せぬ名残りを遺して夫々家路にとだられました。お集まりの人々牧瀬、那波、小松、鷓鴣、木部様がたにかはりて拙き筆をもちかへりみす思ふことのはしをしりました。

弔文

(成川學士令夫人) 可壽子

悪魔は荒れ狂うて大厦巨屋も巨萬の珍寶も尊き幾多の生命も只一瞬時に碎き焼き盡したるあの九月一日のこと！ 思ひ出



してもゾット致します、一報は一報より慘禍の大なるを報じ初めの内は災害の及ぶ方面や建物などの報導まで御座いましたのが段々人の消息を傳ふる様になりました某の檢事は壓死した某の博士は行方不明になつたなどと聞くに至りましては多くの親戚や友人やの安否を氣遣はずには居られません。

某は東京の郊外なれば無難ならんも某方は主人が旅行中の筈なり、留守宅は如何であらうなどと心配致しまして郵便も電信も不通ですし只親類を訪ねたり若し何か消息がわかつては居まいかと友人に問合はして見たりして氣を揉む斗りでした、其内新聞に日石事務田中次郎氏夫人横濱にて壓死母堂は負傷との記事あるを見ましてハット思ひましたがあの御氣丈な頼もしい奥様がまさかに、其頃は新聞も昨日行方不明を報ぜし大臣も今日は無事避難せりとある様に一向にあてにならぬ時分ですから此記事も亦此類ではないだらうかと信じて居ませんでした、然るに其翌日郵便と呼び配達されました幾通かの郵書の中東京からの知らせ如何と一々調べて行く内一枚の葉書は噫！今でも劇しき心臓の鼓動を覺えます實にあの新聞の記事は事實で田中夫人の靈はとこしへに歸られなかつたのですもの、私は此お葉書を手にして只ブル／＼ふるへるのみでした娘がかあ様どうなさつたのとあやしみ聞きますので田中奥様の御逝去は本當であつたよと只茫然として涙さへ出ませんでした、夫れにしても何故横濱にお出遊ばしたであらう、御尊母様も御負傷とは誠に御氣の毒様な、どうぞ御輕症ならばおよろしいなどと御噂にみち、それからありし時の思出を偲ぶばかりでございましたが折ふし成田代議士が歸郷されてのお話に御主人はお子様をつれられて輕井澤にお出になり奥様は御母堂と横濱に御避暑中災害に罹られたのだと承りかけ離れの事なり交通杜絶の折柄一層お取込みであつたらうと又々お噂にふけりました、思出は盡きぬことで御座いますが私共一家が始めて秋田市に参りましたのが明治廿八年で御座いまして知己はなし土地には慣れざる言葉さへ通せず日々淋しく暮して居りましたが當地の警部長様は宇和島のお方で兼て自分も御一緒におつとめしたお方だと赴任前主人の從兄が話したことが御座

いましたのでおなつかしく思ひ是非早くお目にかゝりたきものと焦心して居りましたうち或機會にお出入りを始めまして以來こなたよりお訪ね申上ねば先様より御出頂き一日お目にかゝらねば一年も御無沙汰せし様の心地せらるゝまでにお親しくなりました其頃は宅にも母が壯健でゐましたので母と三人でおたづねすれば秋田名物『ハタ／＼』食べてのしくじり話や郷里の自慢やらに日の暮るゝも厭はず偕はこたつかこみでの歌留多遊びに夜の更くるも知らず或時は打連れ立ちて海岸に貝を拾ひ又或時は田舎の御祭禮を見に行きしことも御座いました、お二方様共誠におやさしく取わけ奥様は柔順で萬事に行届いて居られ年寄も子供もなつく御性格のお方で御座いましたので母がいつも私へ奥様を見習ふ様に言ひ聞かしたことでございました、其後明治卅年の頃私宅も東京へ轉任しまして相變らずおやさしき御氣質の感化を受けて居りましたが十數年の後地方へ轉任しましてからは僅に折々お手紙で御消息を聞くに過ぎませんでしたことは今更お恥しく思ひますお奥様より時々面白き御報導を頂いて居りお子様も段々お成人との事を承り喜んで居りましたに惡魔はあの淑徳高き奥様を奪ひ去つたとは私は未だに本統の事と思はれません、お寫眞を祭りて御冥福を祈ればあのはつきりと鈴の様なお聲が耳に残つて轉た御おもかけの髣髴たるを覺えます。

大正十二年十二月四日 涙ながら識す

弔文

京都 黒谷 (同級) 小野やす子

吁々懐しきかな田中様 吁々悼しきかな貞代様 今阿方様を御悼み申屋壽子の述懐を哀れと思召天かけりてもどうぞ聞召して下さいます。



その昔三とせの月日を同じ窓に姉妹の如く御親しくして頂き共に學びましたのはつい昨日の様せられますがそれは明治廿九年の春の事で御座いましたネ、貞代様私がおなたと最後に御目にかゝりましたのは卒業式のすみました間もない日で御座いました岡崎の博覽會中庭で偶然御母上様御同道のおなた様を見出しまして思はず走り寄りましてお互に御機嫌よろしくを交はしながら惜しき御別れを致しました。

其後あなた様は御良縁おはしまし御幸福なる御家庭を御結び遊ばし小野家の人となりました處が筆不精なる私は學校時代の樂園は不絶腦裏に往來致しながら格別の御音信さへ絶えになつて居りましたが同窓の皆様と同じ御心が通ひ合ひましたものかその結晶として現はれましたのが廻文で御座いますその御蔭を以て御近況を御伺ひする事が出来まして私の乾燥無味な生活にも時には御友垣の御なつかしき温か味を感じさせて頂く事が出来ました貞代様さう云ふ風であなた様の御逸事は一つならずしばしば伺つて居りまして不絶私達の羨望の的となつてゐらつしやいました嘗て御通學時代に新門前の御住居へ伺つて御母上様にも御親切にして頂きました事も御座いました、あなた様はいつも屈託無ささうな御面持で普遍的な愛に満々たる御親切な方で御座いましたその御容子は全く忘れられない御なつかしき思出の一つで御座います。

この初夏あなた様の御骨折りで第二回の立派な御寫眞帖を御調製下さいました纏て廻文も後一回で五十回にならうと致します今日あの御寫眞帖をあなた様の御形見として視ませうとは夢にも存じます事では御座いませんでした、先年あなた様は御長子様を御失ひ遊ばし深き御嘆きを遊ばした事に御同情申して居りましたが俄然大正十二年の夏九月一日あの様な恐ろしき關東の大震災火災の大事變が起りましてその當時知己の方々の御様子只管案じて居りましたが程經てあなた様の御凶變を承はりました私もあまりの事で全く度を失つて仕舞ひまして日夜家人にその事計り繰り返し申續けましたいくら私の様な無神経な者でもかうした御遺難に無感覺で居れ様ではないので御座います但し御遺族様方へ何の御悼み申してよろしいのか

殆んど適當な言葉を持ちませんので唯蔭ながら御嘆き申しのみで御座いました私の近親も可なり御地方に散在致して居りますが或る一家などは被服廠で殆んど全滅唯一人娘がそれも他へ遊びに出かけて居りましたのが幸ひで残り残りましたのがございませぬ、

誠に有爲轉變は世の常とは申しながらこれは又餘りに慘らしき出来事でございます。貞代様私はあなた様の御卜報に接しました時唯何かなしに私の机の上にちやんと寫眞帖のあなたのページが開かれて置かれて居りました私が無意識にさうしたのでございまして涙を拭きくそれを見つめて居りましたあなた様には御卒業當時の御若い御寫眞も頂いて大切に仕まつて御座います、私のも貰つて下さいましたわネ、私は京都に生れてそのまゝその地に埋れ木となつて居りますからあなた様の發展振りはいつても敬服致して居りまして命さへあればいつかまた御なつかしい御警咳に觸れる事が出来ます事と存じて居りましたがそれは遂にかへらぬ空だのみと成り終りました折りしも落葉繁き時雨の頃で御座います。

あなた様と南禪寺や若王子へ参つた事も思ひ出して居ります又遠足に高尾や嵯峨や偕は山科の茸狩りに手を引き連れて興がりました事も唯夢の世界のやうな心持が致します、お互に白髪が増しました事を廻文に書きなぞして嘆き合ひましたのは却つてのどかな日常を語ります様でそれは何でもない事で御座いました吁貞代様何故あなた様はあの時御逃れになれなかつたのでせう、私は遙かな處から御想像申すのではあまり漠然たるもので御座いますが御遺族の御皆様方の御嘆きは如何斗りで御座いましたでせう、實に諦め難い千載の恨事で御座います。

此度御良人様はあなた様を御悼みの餘り御筆跡を録して小冊子に遊ばし御子様方といまし、昔をお偲び遊ばしたいとの思召だと承りましたこの一事にてもあなた様の御生前の御幸福に御想像申す事が出来ます。あなた様は御自分の御性格の齋ら



した御幸福をその儘に今は極樂の彼方に私等有情の姿を嚮はして嘸患な者よと哀れみて居て下さいませうどうか安らげ  
く御一門の御昌隆を御守り遊ばしてまた私達があなた様の親友であつた事を、御ゆるし下さいませ到底私など拙い言葉では  
心の内の萬一をも申し現はせる事ではございません、どうか御饗け遊ばして下さいませ。

屋壽子謹んで白す 以上

弔文

鶴清氣

謹白有史以來之大慘害何んとも申様も無之唯驚くの外無之存居候處貴下御文中に御令閨様横濱にて此度の悲劇の中に御逝  
去有之たる由又々驚き措く處を知らず先年は御令息の御不幸あり又々御不幸實に悲痛至極御同情申上候併し貴下にはかねて  
深く御修養も有之候事なれば此度の事も諦きらめられぬ中に御あきらめ有之人世の至悲も至樂も合せて至高の理想上より御  
見下しありて徐に人事を盡さることを確心仕候此上の信仰と至深の理想の下に向上努力の意志を固くせられんことを失禮に  
も萬望仕候也

右不取敢御吊辭申上候 再拜

九月十一日

田中様

コチラよりは書面も又電報も御地に向ては不可能なり此書も延行イタス事と存候

弔文

(同級) 伊藤 絹枝

拜啓今回の大災に御令閨様御不幸の由御報に接し只々驚愕の外無之候、實は御在京諸姉の御身の上御案じ申送りながら近  
來病氣勝ちにて御尋ねの文さへ認めかね候ま、御案じ申て今日に至り候へ共新聞其他により察するに御宅様の方面は幾分安  
全の地と安心致し居候に斗らずも其當時最被害激しき横濱にあらせられしとは、何たる御運のあしかりし事よさりながら御  
同室にあらせられし御二方は御救助も出来候由なるに貞代様のみかなしき御最期とけさせられしとは涙せきあへず候昨年御  
目にかゝりしが永訣ならんとはさても定めがたき無常に候又昨年同級者の寫眞帖に付きても一方ならぬ御骨折下され候結果  
にてそれも御心つくしの片身と其寫眞帖見る毎に涙の種と相成候定めし、あなた様の御なげきいかばかりにや御心中深く  
御察し申上候なほ又御子様方の御愁傷いか斗りにや御慰めの言葉もこれなく私も其の内病氣全快致しかつ又交通の便もよき  
様に相成候へば上京致度と存じ居候間其節は參上致ししみる御悔申上度只々御悔のみ申述べ候就床中亂筆御許願上候早々  
十月十日

樞密顧問官子爵石黒忠恵氏弔狀

拜啓仕候さて非常なる震火災尊宅は御無事之由傳承安心致居候處令夫人御出先にて逝去との事傳承驚入候次第御愁傷拜察  
仕候不取敢右御悼申述度いづれ拜趨可奉悼も不取敢書中申上候 謹具

大正十二年十二月二日

追悼の手紙並文



前略仕候今回の未曾有大震災にて御令閨様には横濱に於て御遭難遂に永眠被成候由驚入候愁傷の至に存上申候貴兄の今日あるは賢夫人内努の力に依るもの多かりしと推察仕候誠に痛惜に堪へず候其他貴宅の損害も多大ならんと遙察仕候然シ貴兄よりも精心的に物質的に損害の大なるもの奉數と相考申候 先は御吊旁々草々拜具

九月十三日

(海軍中佐) 清水 林吾

本月四日付の御葉書十一日夕刻接手拜見仕候御來示之趣にては御夫人様には御避暑先なる横濱御假寓に於て家屋倒壊の爲御長逝遊候由何たる御凶變にて候ひしぞ全く御慰藉之辭も無之兩人とも暫無言の儘御書面を見詰めたる次第に御座候定て御愁傷御當惑被遊候事吳々も御察し申上候當地の新聞紙上官様方を始め幾多の人の凶報を傳へ候得共固より全般を報じ得たるには有之間敷近々詳報を得るに立到り候はゞ如何なる人の凶變を聞くべき乎とは豫而より恐れを懐きたる處に御座候へ共マサカ御夫人様に斯る御凶變あるべしとは思及ばざる處に御座候處意外なる御報導に接し全く夢か幻かと斗り相驚き候事に御座候疾く拜趨御吊慰申上度存候得共此場合衰老には暫上京の自由を不得乍遺憾當分失禮仕候段御斷申上候愚妻よりも山々吊意加章申出候尙御母堂様には御輕傷に止まらせられ尊臺並に御子様方は御無難之段は御不幸中之御幸と奉存候不取敢御吊慰まで如此御座候

九月十一日認

(鴻池銀行重役) 野々村政也

御ハガキに接し有難く御禮申上候其後御一同様御變りもなく御座遊ばされ候哉御伯母様の御怪我はいかがに御座候哉御案じ申上居候 扱て來る七日いよく御姉上様御告別式遊ばさるゝ由さぞかし御取込の御事と存上候就きましては前々より仕度もいたし居りし事とて主人早速上京仕り御手傳ひもいたし御名残りの式にも御姉上様身寄の者として列席いたすべく松山の妹よりも代表として行てくれる様と再三手紙も参りて御座候處折悪しく本月一日より胃腸を害して打ち臥し居り發熱さへいたし居申候もをかして参り度と今朝醫者にも相談いたし候へ共長途の事なれば今しばらく見合せてとの事にて誠に殘念且申譯之無く候へ共此度は参りかね申候いづれ其内御佛詣に参上いたし可申候へば左様御一同様へ御申傳被下度候誠に御粗末乍ら御佛前へ御供へいたし候へばせめて私達の心丈け御供被下度候 早々

四日

柴田フデノ

さき頃よりの思ひがけなき悲報に接し候てはなんと御挨拶の申上様もなき次第にて只々日々涙にかきくれ居申候此度の意外なる大震災に於て皆様御無事をと祈りし甲斐もなく御伯母上様には横濱にて無慘にも御壓死御逝去遊ばされ候由にて夢とのみに驚き入申候あゝなんたる御痛はしき御事にて候や

皆々様の御なげき如何ならんと御察し申上候ては飛んでも参上いたし度心のみあせり候もそれさへ出來ず殘念に存じ居り候いまだ幼な心の己代子様には御母様を御なくし遊ばされ候て如何ばかりやと

御伯父上様にもさそゝ御力落し遊ばされこれと今後御心配の御事と存じ上候 あゝ長年御世話様に相成り實の母親にも

追悼の手紙並文



まさる御伯母上の高恩をば只少々だにも御返し申上ず誠に相すまざる事に御座候

御變事を聞きてはすぐ様に御地に走り度しと思ひても叶はずお手紙をと存じ候てもそれさへ叶はずやつと郵便を受附けたると聞きて取りあへず筆とり申候此度の御不幸は口にも筆にも申上る言の葉は存じ上ず候實は母親主人佐八様と御一所に上京いたさんと吉富まで歸郷いたし用意いたし居り候に丁度御伯父上様よりくはしき御手紙頂き一寸上京を見合せ皆にて今日お寺参り御伯母上様の御寫真にて回向いたし候

實は子供づれにては心のまゝにもならず申上かね候へ共御地に参上いたしても却つて御邪魔に候へ共この地にありては誠に本意なく存じ候まゝ赤坊つれては誠に御迷惑の御事は山々承知いたし候も御さしつかへなくば参上いたししばらく滞在さして頂き出来る丈け御手傳申上度候と山々存じ候が如何に御座候や御さしつかへなく候はゞ御許し下されば交通よくなり次第に参上致度存じ居り候

筆取り候ても涙にかきくれ候て心亂れて先きや後に相成り御許し下され度候

御祖母上様にも御ケガの由其の後如何遊ばされ候や

義次様己代子様にもよろしく御傳へ下され度候

九月二十三日

(姪) 池田萬喜代



此度御地方の震災に付きましては何とも申上様も無之ことになしき御知らせ頂き候折は餘りの御事にて暫しはなみだも出で不申只ばうぜんと致し候のみに御座候如何に御運命とは申ながら何と申すななき御事かと御本人様は申上る迄もこ

れなく後に御残り遊し候皆様の御心中おさつし申上只々なみだにむせび申候其節御負傷遊し候御母君には其後は御經過およろしくゐらせ候哉一時に色々の御出来事にて一増御身に御障り遊し候半かと實に御氣の毒さまにて何ともおなぐさめ申上る言葉もこれなく候されど何事もこれ迄の御運命とおほし召お諦らめ遊し候よりせん方もこれなくと存候萬一皆様横濱に御一ツしよにゐらせ候はゞ此上に御不幸をお重ね遊し候哉も斗り難くなど色々と思ひ廻らし候得ばはてしも無之只々かけながらふかく御同情申上るのみに御座候されど如何にくり返し候ともかへらぬ事に候まゝ此上は御心廣く思しめされ御力落しのあまり御身にお障りなど出で候ては一増大變に候まゝ吳々も御大切に遊し被下度日頃より餘り御丈夫の方にもゐらせられぬやう承り居り候まゝ一しほ御安じ申上候何分にも御地へは交通の道絶え居り候爲め御地の御様子は略日々の新聞にて知るのみ只々御安じ申上る斗りにこれあり候ひしも漸くおはがきと手紙だけは通じ候様相成候まゝ不取敢御悔み旁御見舞申上候御母君様には吳々も御大事に御養生遊し被下度よろしう御傳へ被下候様願上候 草々

九月二十三日夜

野村 勝子

御地在住中之親戚は八軒斗御座候内火災の爲め丸焼と相成候者も一軒だけ御座候得共(芝汐留官舎に住居致候伊藤に御座候)皆々生命は無事に候由此程通知を受け少しく安心致し候



嗚 呼

(朝鮮遞信局長)

蒲原久四郎

田中貞代夫人に接して卽座に感ずるのは、如何にも奥床しく、人懐しく、そして誠に親切な人だと思はしめる事であつた

追悼の手紙並文



らう、段々と慣れ親むに及びて、此特長は益々發揮される、永くなるにつれて、我儘が出たり、アラが見え出したりするのは、人の常であるが、何時會つても嫌な氣を起さしめず、常に春風駘蕩として、對手をして心持をよからしめたのは、貞代夫人を知る者の等しく稱ふる所である。

之を三宅勝三郎氏に聞く、夫人は温良で言葉少く、至つて親切な方であつた、婦人としての修養には充分努められ、内助の功を樹てるといふ事に就ては専念心懸けて居られた様である、夫人が京城に住まされたのは明治三十六七年頃であつて、當時京城に於ける内地人の居住は極めて少く、郵便局員の如きも至て少数であつて、取り分け婦人仲間には於ける當時の思想としては、所謂山河懸隔異域に住むの感があつたのであるが、夫人は職員の家族として寂しき思ひを爲さしめ、延て職員をして御奉公に差支を生ぜしめる様な事共ありては、遺憾な事であるとして、婦人連の氣を引立てしむるに特に努力せられた、自主唱して婦人會など組織せしめ、平和で愉快なる會合が續けられた、斯くして婦人たちの慰安の中心となられたのは、確かに時宜に適した措置であつて職員の家族は何れも喜んで慕ひ集つたものである。

之を梶山周介氏に聞く、貞代夫人は温良で貞淑、人に接するに常に心を傾けられた、嘗て不機嫌の顔を見た事が無い、訪問して歸る時は何時もニコ／＼して歸つたもので、又直ぐと尋ねて見たいといふ氣を起さしめる、蓋蟠り無き眞純の心を以て人に接せられる故であらう、京城在住當時の婦人連は勿論、局員の大なる慰安者であつた、望郷心を起す事無しに何れも職に盡す事を得たのは貞代夫人の御蔭であつたと言はねばならぬ、夫人は一面に於て儉約といふ事に心懸け、周圍の人にもよく話をされたが、當時何かの節に、外交團を初め外國の官民を招待する事が流行つた、時の公使や領事様は公の費用で之を濟した様に思れたが、京城郵便局長たる田中氏は常に私費を以て之を辨ぜられた、之は薄給の中より夫人が經濟を巧にし、夫君をして人に耻をか、せぬ事に注意を怠らなかつた一端と見て善からう。

平石忠次君は言ふ、夫人は親切で質素で、そして同情心が深かつた、官舎に出入りする役所の小者などには特に親切にいたはつた、よく煙草を呉れ、ビールなどを飲ませたので、朝鮮人の小使などは特に喜んで居つた様である、かつて自分が當時流行の絹の白羽織紐を着けて居つたのを見て、若い時は木綿の紐で澤山だとして、親切に奢侈を戒められたる事は今尙忘れられない、からだは丈夫の質であつたが、妊娠中と雖屋内外の掃除は、自手を出されるので、自然官舎は何時往つて見ても、心持よき程清潔が保たれて居た、貞代夫人が夫君の爲めに盡されたことは又格別のものであつた様で公私内外を通じて夫君の顔をよごす事の無い様に少らず努められたものであつた。

石隈信乃雄氏なども貞代夫人に敬服せる一人であるが、夫人に對する氏の話を聞くの機會を得ざるは遺憾であるも、凡そ夫人に一度會つて話した者にして、夫人の清き眞心と、眞心より出る親みとを感得せざるものはあるまい、春秋に富むの身を以て、一朝難に遭はれたるを悲むと共に、夫人の純潔なる眞心が、之迄如何に多くの人を化せしめたるかを考へ、更に麗しき此眞心が遺愛己代子嬢に宿りて、永く田中家の花たるべきを想へば、夫人また瞑すべきであらう。 嗚呼

大正十三年一月二十四日夜

田中貞代さまを偲び參らせて (松本宮中顧問官令夫人) あ い 子

田中貞代さまには昨年九月の大地震の時に御不幸にも横濱本牧の御別邸にて御逝去遊はされたと伺ひました時には誠にはからざりし御事にて御痛はしさの涙止め兼ねましたことで御座います。

回顧いたしますれば貞代さまとは不思議な御縁が御座いましてまだお若くて京都高等女學校に御在學中丁度私も同校に居



りまして日々お親しみ申して居りました誠に温和なお方でらつしやいました御卒業少し前に私は據なく東京へ戻ることに  
なり格別此級の方々とお別のつらく悲しみまして遂に記念の寫真をとつてお別いたしましたので御座います。

御結婚遊ばして逕信省の官舎に御住居の頃永田町の宅へもお出下さいましていろいろ昔話などいたしまして楽しんで  
其後六年許前市外の長者丸へ轉居いたし心細く感じて居りました折圖らずも極御近處に御住居遊ばさるゝこと分り誠に心強  
く嬉しく覺えましてそれよりチョイ々お目に掛り何彼と優しい御指導いたゞき仕合いたして居りましたのに天災とは申な  
がら急に永い々お別をいたすことになり只々夢の様にて何とも申上様の無い淋しさと悲しみとを感じて居ること御座い  
ます。

貞代さまは實に溫良貞淑なお方で良妻賢母としても模範として宜しきお方であつたと存じます又世の風潮におかぶれも  
なくいつも御質素でらつしやいた至極地味なおなりで大きな御買物の包などを提げて歸りの處をよく途中でお目にかゝ  
り感服いたしましたこと御座いますかゝる事は此長者丸では餘りお見受けぬこと一層感心いたしましたこと御座いますかゝる  
賢夫人をお失ひ遊ばされた御遺族方の御心中は本當にお察し申上ます御追慕の餘り拙き筆をも顧みず一ふしを御靈前に捧げ  
奉ります。

拜啓今回京濱地方稀代の大震害加ふるに大火災にて帝都及び横濱は殆ど全滅の有様にて其酸鼻極に達せしことは新紙の報  
ずる度に只々皆々様の御安否をのみ氣遣はれましたけれど通信機關は杜絶し御様子承るすべもなくたゞ々々時期の到来のみ  
御まち申てをりました最も御伯父上様の御宅は田舎の方だし建物とても御新築の丈夫の御家だから地震では別にたいしたこ  
ともあるまいし火災とても安心だらうとは御うはさ申上てをりましたけれど八月十七日付御伯父上様より御葉書いたゞきし

内に御子供様方は横濱に御假寓遊されし様ありましたから横濱に御滞在中にてはなかりしか然し九月一日の事なれば己代子  
様にもはや御登校の筈だから皆様御歸京中であつたかもしれんなど色々御うはさのみ申上ては御安否お安じ申てをりまし  
たら去月九日でしたか深川様わざ々御出で下されまして御伯父上様よりは輕井澤より來狀ありし故大丈夫心配はなからう  
とて御知らせ下さいましたから安心致してをりましたら翌十日でしたか忠彌より御伯母上様御逝去されし旨電報に接しま  
したので皆々大に驚き入りました然かしくはしい御様子もわかりませす御在宅なりせばかゝる事もなかりしならんに正午の  
事とてたしか御外出中どもだつたらうなど色々御うはさ申上てをりましたら丁度九月十六日でしたか御伯父上様よりの御  
葉書落手拜見致しましたらやはり横濱に御避暑中家屋倒潰の爲め御氣の毒様ながらたうとうむなしくなられました御様子何  
と御言葉の申上様も御座いません己代子様にもいまだ幼くあらせられますのに如何遊ばして入らしやる事かと御安じ申上て  
は御いたしましたなりません御祖母上様にも御負傷遊されしとか其後如何渡らせられますか實は御悔の電報でも致したいと  
思つてをりますけれど今に禮儀に關する電報は受附けませんものですか(書留も同様)一週間許り前から證書送達だけは  
受附けます様になりましたけれど書留が受附ける様になつてからと只今迄のばしてをりましたけれどまだ何時になるかわか  
りませんから別途證書送達をもてほんの心許り御香華料として御送り申上りましたから何卒御靈前へ御供へ下さいませ御願ひ  
申上ますいまた御告別式はおすましになりませんか實は上京して御悔みも申上ねばなりませんけれど何も思ひにまかせませ  
んものですから大延引ながら右御悔みまで申上りました

何卒々々御内皆々様御大事に遊さる様祈り上ます

十月 二日

(姪) 江里口しも子



御伯父上様

萬様梅千代様御宅夏秋様御宅は皆様御變りは御座いませつか御尋ね申上ます

梅千代様の御住所がわかりかねましたのでたうとう御見舞状も出ませんでした何卒よろしく御傳へ下さへませ恐入りますすけれど御序の時一寸御知らせいたゞきたう御座います

承りますれば貞代様には御永眠遊され候由誠に御驚きいり私はかなしみにたへませんくく嘸々皆様の御心をおさつし申上ますほんにおもへばく若き時から長い間の御くらう未だ御らくもできずにほんに御心をおさつし申上ます皆様のおいめい子が貞代様の御恩をうけ梅千代事未だ御恩もはうぜぬ内にあんまり御早様御座いましたかかけながら私は拜し申上て居ります萬さんにもよろしく御つたへ願上ます申上度見度は海山なれどぞく御ゆるしたまはり度願上候皆々様御あと御病氣のない様に御身御大事にくかけながら神かけてねんじ上候一同よりもよろしく先は御くやみ申上候

かしこ

九月十三日

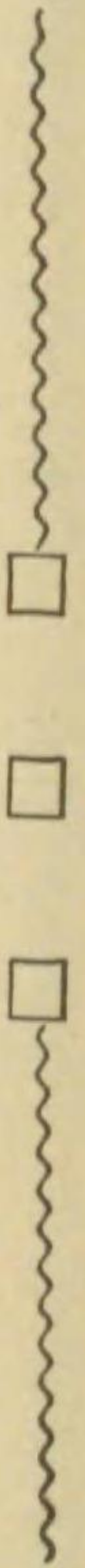
(姉) 山田より

次郎様

御母上様

義次様

己代子様



貴書只今拜讀仕候御來示によれば令夫人横濱に御避暑中之處今回の震害火災に御慘死被遊候趣實にく意外拙妻と顔見合せて唯茫然何と御吊慰可申上辭も無之落涙致居候乍去此大慘事には三殿下まで失ひしことなれば天命とあきらめ御節哀今後の御回向祈上候只今さゞれ會の廻文到達六月八日付令夫人の筆に

此度は稲葉村井川島の三姉を失ひましたこと實に悲さと淋しさを感じました殊に川島姉の御子様方には御兩親に御別れになりどんなに御淋きことかと御察し致します

とあり候 昨は吊する身の今は吊せらるゝ人生朝露の如しとは申ながら悲痛の極に御座候甚略儀ながら一封敬呈仕候間御靈前へ香華御供進被下度願上候先は御吊辭申上度如此に御座候 頓首

十月四日

(元關東遞信局長)

加藤順次郎

同 春子



過日は多謝一度參上したが御留守 近いが此際とて缺禮のみ なんと申上様がない ひどい事だ まあ凡てはあきらめてかゝる外はないだらう上にも切りがなく下にも切りがない 時にはひるの食堂に來給へ

九月二十二日

ホテル 354 にて

下村 宏



拜啓今回の事凡て言語に絶し何とも申さん様無之候早速参上親しく御悔も申上べく筈の處東朝社焼失の爲め引きつゝきす暇を得ずホテルの假事務所にアクセクと只ゴタツキ居り申候七日に参上仕るべき處同日は大阪より社長はじめ幹部上京仕候まゝ何分にも参上致しかね誠に心苦しく存じ候へども不惡御諒承相願申候先は御詫をかね乍延引御悔まで 草々 敬具

十月五日

(朝日新聞専務)

宏

當分妻はキノ身キノマゝにて歸阪不在缺禮仕候

肅啓

振古未曾有之天災とは申ながら慘害其極に達し酸鼻之狀到底筆紙に盡し難く候承り候へば御令聞には御不幸にも横濱に於て震災の犠牲となられ候趣嗚かしく御愁傷の事と奉恐察候御家庭の寂寥御身邊の御不自由拜察するだに涙の種に御座候早速参上御吊み可申述筈之處小生も南鍋町の實業之日本社全焼の爲め大打撃を被り其上印刷所たりし秀英舎工場東洋印刷會社全焼致候故俄に印刷能力の缺乏と相成各雜誌復興の善後策に忙殺され且つ社員十七名火災に罹りて丸裸に相成其救護等の爲めにも苦心致し更に此火災害を機として社内の大改革を爲す等眞に寸暇無之心ならずも缺禮仕候御葬儀には萬障を排して参列可致祈念罷在候處當日至り不得已事故相起り重ねて缺禮致何共御詫びの申上様も無之候右の如く苦心慘愴印刷工場に徹夜せしめて第一着に製本出来せし『少女の友』は六日に發賣禁止の厄に遭ひ『婦人世界』も亦本日其奇禍に罹らんとせしを其部分丈け大騒ぎして斬取り漸く發賣禁止の厄を免れ申候其原因は朝鮮人の襲來云々の風説に關する記事にて夜警中斯る風説の爲め

大に恐怖したるが如き記事が累を爲したる次第政府當局が鮮人騒ぎに關して絶對に筆を打止致居驚入候右様の困難と災厄にて御無禮致居毎日心中苦痛に思ひ居候實業之日本は十一日に發行可致『天災と大教訓』と題したる拙稿幸に御一讀願はれ候はゞ望外の光榮に候多分御共鳴を博する事と自信罷在候右發行等相濟み一段落相付き候はゞ日石の方へ御詫び旁々参上可仕候何卒不惡御海恕被下度奉願候 頓首

十月八日

(實業之日本社長) 増田 義一

昨日主人よりの便にて承知致候が御奥様には横濱にて今度の震災に會れて御不幸にも御逝去遊ばしたるとの御事誠に驚き入り申候同じ處に御出になりし外の方々には幸にも御災難をのがれられしに御奥様には誠に御氣の毒さまと何もとも申上様も御座なく候さぞかし御家族御一同様の御力落しいかばかりかと察上候殊に御年取られた御母上様の御なげきさこそと御心中を御察し申上候てなみだぐましく相成候常の時御病氣にて御手厚き御みとりを遊ばしてさへなほ御心残に思召さるゝにかゝることにて思ひかけず御なくなりになられしことはいつの時にも御忘れがたき御事と存上候私事も勝手申上御目にかゝらずすこし居候に今はいつになりても御姿に接することかなはずと存じ上いと残念に御座候ながき間私様のものにも御親切に御交り下されしこと思出しかなしさに堪へず候一日のことは御話を伺ふほどむねつづれることばかりにてどなた様の御宅にても御親類中になにかこの御災難に御會ひにならぬ方とはなきほど實に天災程恐ろしきことはなく候人間などは天よりみればはかなき運命を持つ者と存候私も八月末親子三人にて上京神田にてあの地震家はつづれ間もなく火事にてなにもかも灰と化し母と共にきのみ着のまゝにて九段にけ助かり申候幸に主人も子供も弟共も別々に居しが皆々ことなきを得候

追悼の手紙並文

七九



へ共父を茅ヶ崎の別荘にて御奥様と同じ運命にて一時に親を失ひ里はやけかなしき思ひ恐ろしき思ひ致して急うに不幸な者となりし心地に御座候主人を残して歸山候てよりはあたりの静けさに東京のことは夢ではなきかと思ふことも御座候ゆめであらば御互にうれしきことに候このうへは皆々様御からだを御大切に遊ばし候ことを願ひ上候  
先は御悔みまでくりごとを申上恐入り候  
かしこ

九月二十九日

(下村宏博士令夫人) 文 子

拜啓先般の大災の爲め奥様御罹災御永眠被遊候由實に驚愕自失何とも御悔の申上様無之候御病氣等なれば御諦め事も可有之も何とも早や御慰問申上候辭も無之只だ御心中奉恐察候のみに御座候  
何れ時機を得て詳しく御様子も御伺ひ可申上候へ共不取敢幸便に托し御悔迄如此に御座候

九月十八日

(元大阪逓信局長) 坂野鐵次郎

追て小生も親戚の者一人横濱に倒壊死去致候が他は先づ無事に御座候

謹啓御令政様今回の大震災に際し横濱にて御遭難遊され候由御報に接し誠に御痛はしく皆々様嘸々御哀傷に渡らせられ候御事と深く御同情申上候貴兄初め御次男様御嬢様は御母上様は輕傷の由に候御事は先づ御仕合と存上候得共肝腎の御奥様御逝去あらせられ候ては皆々様途方に暮れられ候事と御察し申上候御報に接し不取敢御悔み申上候と共に皆々様十分に御

自重遊す様切に御祈り申上候 敬 具

九月十三日

御手紙着即座認む

蒲原久四郎

- 一、八月三十一日輕井澤よりの御はがき拜見仕り候
- 一、數日來引つゞき毎夜三時過臥床三四度宛起されるといふ有様に有之候
- 一、罹災發無料電報を大阪よりは郵送すること頑張り候も幸に機械にかける事を得て朝鮮は内地の山陽九州等よりも早く到來一般では喜び呉れ候
- 一、此手紙は郵便開け次第發送の筈に有之候

肅啓去本月一日大震災に際し令夫人には横濱本牧に於て不慮の慘死を遂けられ候趣先日御訃報に接し詢に驚愕悲痛之至に不堪候早速吊意相表度存候共何分通信不能の爲め只管乍存高堂之御愁傷拜察罷在に御座候茲に出京に托し不取敢衷心より深厚なる哀悼の意を表申候 敬 具

九月十七日

(京都府知事) 池松 時和

拜啓殘暑烈しく候其後は意外の御無沙汰に打過ぎ失禮致居候處今回御地には未曾有之大震災に加へ大火災有之由新聞等に

追悼の手紙並文



て拜承致御見舞旁御安否御伺可仕之處災害地方之通信機關破損の爲め杜絶に付電報始め一般郵便も當局に於て處理せざる様達せられ如何共致方不能徒に新聞等に據り御情況の概要を知るのみにて當御尊宅の事のみ日々相案じ居候本日(九月十二日午前八時)四日付の御葉書を頂戴致候に御奥様斯の震害の爲め御逝去の由拜承致驚愕致候何と御悔を申上て宜敷か言葉も無之御残念く奥様も嘸御苦しみあらせられたること、推測致御同情御哀しみの程御察申上候實に御愁傷御残念に有之流涕に咽び申候御隠居御嬢様には御避難の由御不幸中之幸と申上度存候避難者の中には家族殆ど全滅の御方も有之候哉にも承り候條御不幸にも他の皆様には御微傷位にて御避難被遊たるに付今後奥様の爲めには御佛前を御大切に皆々様には自愛御保養被遊候事祈上候先は乍失禮以書中御哀悼の微意を表し上候

御隠居様初め皆々様に宜敷御傳被下度候

若し當地の産物にて此際御必要之向は御一報被下度候早速御送附申上度と存候 勿々敬具

九月 十二日

(幼時の守女) 増田初より

拜啓 日夕虚報ならん事を祈り居候甲斐もなく奥様には天災にて非業の御最期を遂けられ候由親しく御文通に預り昨日まで若しかと心頼みに致し居候心の綱も切れ哀愁の情迫りて初めの一行を拜讀したるのみにて俯伏痛嘆アトは拜讀する勇氣を失ひ申候へ共昨二十日司令官室にて井上中將閣下に御目に懸り候際三笠ホテルより八月三十一日付にて御投函被下候御葉書中に於ける御傳言を申上たる後實はカクくのお話を耳にして居りますか眞否が疑問でありますから失禮とは存じながら目下東京へ御伺中であり申上ました處ソレは大變な事です御返事が届きましたら直に知らせ下されいと司令官の御依

頼故承知致しましたと御受け申上置たる關係もあり如何に奥様や尊台又はお子様たちがお痛はしいと嘆きましても御尊書全體を拜讀せざれば井上閣下の義理も濟まず進まざる思の中に段々拜見致候處拜讀すれば拜讀する程涙の種盡きす就中二十五年連添うて樂な思ひも得せずの一節に至りては乍失禮一昨年小生も同様の叫びに涙を乾かしたる經驗も有之熱血多恨なる尊台の御心情を忖度御同情を禁じ得ざりし處に有之候右申述候通兎に角雜感交錯せる中に鳳書を讀了せる時天に聲あり軍郵便長の机上を清掃すべし屋側に「ナナカマド」あり(南天の實の如きものがナツテ居る樹の枝)之を瓶に挿せよ位牌替りに御主人の御手紙を机前の壁に掲げよ加給品の氷砂糖を捧げよ而して汝が志あつて横濱より持來れる線香を燻ぜよ線香立が無ければ湯呑に灰を入れて間に合せよ今日は日曜故平服で居るやうだが速に軍帽制服帶劍着けての上の事にすべし一町離れた五十野戦局には佐賀の人谷口が居るのではナイカ共に焼香せよ……コー申す聲……コー申す心のひらめきが私の心に起りましたから早速準備を整へて谷口と兩人で郵便長室のドアを締めて心のあらんかぎり御回向を申上ました御悔の言葉お慰めの言葉夫れは意あつても唯今は出て参りませんイヤ筆がソコへ走り兼ねますドーか私が二十年近く御世話にナツタ御兩人様に對する禮ソノモノに不備十點がありまして御咎め下さらないで心情のお汲取りを願はしう存外御手紙は自分で御届けする勇氣が生まれぬこと、明日團隊長會議があり夜宴會と云ふ順序で御多忙中と考ましたから先剋態と封中して中將閣下方へ御届け致外た明日會場又は夜分御目に懸りたる時は屹度深厚なる御言葉があらうと存外

夫れに付けてもお母様とお嬢様は何と云ふ御仕合せで御座いましたらう其下女の健氣な働き實に感心致し外た唯今では些かの御痛もなく日を過され候御様子千鶴萬龜此點深く御喜申上候何卒々々尊臺には御心を強められ御次男様は男の事故兎に角ナレドお嬢様は未だお幼なき事なれば内外御苦勞の絶えぬ事とは存ますが父と母との御役目を果されん事を祈上申候謹みて御悔申上度如斯に御座候



十月二十一日夜八時認む

(北樺大軍郵便長) 内田金五郎

岡山師團長大野豊四中將弔状

御令聞様不慮之御遭難にて御逝去被遊候趣痛恨哀悼之至りに不堪謹て弔詞申上候就ては哀悼之微意を表する爲め別紙爲封入致置候間靈前へ御供被下度候 敬具

十月十三日

久々御無沙汰申上げ許頂き度候

この度の震災如何ぞ天災とは申しながらあまりのことに只々忙然と致候奥様には御母堂様御嬢様と御一緒に本牧に避暑中の度の震災に災難におかゝり遊ばし御永眠遊ばされ候由驚き入り申候皆様の御愁傷御察し申上げ候永らく御病氣にて手におつくし遊ばされ候ての上でさへあきらめつかぬものに、どんなにか御残念におほしめし候はんかと皆様の御心中御推し申すさへいひ知れぬ涙めぐみ申候本牧より御葉書頂き候はほんの昨今の様な心地致し居候御返事さし上げ様と思ひつゝ一日と相のばしたうとう御返事もさし上げず申譯なきことゝ今更ながら後悔致し候過日頂き候御はがきが最後の御便りであつたかと幾度もくゞ讀みなほし申候まるで夢の様に存ぜられ候數ある友の中にも奥様とは十五六才の頃より四五年も一ツ寄宿の中で起きふしを共に致し候私のためはぬ者を妹の様にいたはり下され何かと御面倒見て頂き候姉様失ひ候事誠に誠

にかなしく存じ候早く御悔み申上げ度と存じ候へ共こちらよりの通信は受け付けぬとの事にてさしひかへ仕候延引ながら御悔み申上げ候

九月二十四日

(森本邦治郎令夫人) つちの

御負傷遊ばし候 御母堂様の御経過は如何に入らせられ候哉一日も御早く御全快の様祈り上げ申候御嬢様御坊ちやまは御機嫌よく入らせられ候や時候の變り目御身御大切に遊ばし度念じ上げ候

思ひのまゝを

船橋ひで

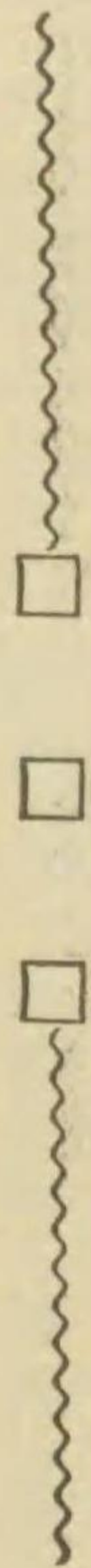
思ひてもぞつとするあの大震災に多くの人と運命をともししてあへなく逝き給ひし貞代様の御最期の痛ましさをなしたまひの事に胸ふさがりて思ひは亂れ思ひのたけを誌るさん様もなし

平和と幸福にみちゝてあけくれおすごし給ひしあのだつしりとした體格と圓満に發達せられたる御心もて天晴れ内助の功をあけられ親戚知友の人々より敬慕せらるゝ徳をそなへ給ひし貞代様つい三日前の二十九日御用にて横濱より御本邸へ御歸りの折久々にて御會ひし卓をかこみてゆるくと食事なしつゝ四方山の御話に時を移して夕刻「二日にはあちらを引拂ひ歸りますから又どうぞ」との御言葉をうけ御見送りなしたるそれが永の御わかれとなつたる事いかに現世は無常とはいひながらあまりになさけなき運命ぞかしさるにても避暑地より御用にてちよと歸り來ませし其忙敷き時をさきてわざと訪ね來給ひしこの會見こそいかにも因縁深くかたき約束の様にも思はるあの水色の半襟明石の着もの墨繪の帯其御姿ありくと目



にうつりて胸もはりさげんばかり涙せきあへず返へらぬ事をくりかへしつゝかなしむばかり今は何とせんすべもなし私のはじめて貞代様を識りしは今より三十五年の其むかし名古屋より讃岐なる観音寺の御住ひへゆきし時なりし御互に十二歳の春にておかむろ姿の御優さしくすぐになれ親しみてまりつきお手玉とたのしく遊びし其折は不幸な私が幼心に年頃日頃慕ひ参らせし其人に逢ひ見し時にてうれしさを交々せまりてしみぐと貞代様の幸多き生ひ立ちをうらやみし幼き胸のなみは今もなほ其儘にて老いゆくこそ是非もなし其後も京都に御修業の頃見物にこよとの御やさしき御手紙にて又久々にて一月ばかり朝夕ともにたのしき語りすごしぬ此頃ははや御互に十八歳なりしが紅白粉の香更になく髪もひきつめのいとも質素なる御様子にて専心御勉強の餘暇あるときは琴をたのしませ又夜などは氣もかるゝと笑ひ興じて更くるも知らず語り合ふ事もありし其後幾年月をすぎて此地に住まひする事となりてよりはゆ來きもしく格別に御心にかけて給ひて何くれとつくし給ひし厚き御情け今更何とも禮の申様もなかつたゞ御佛に額つき申ほかはなくて盡くる事なき思出は皆涙の種なればこれにて筆とめぬ

あゝ貞代様御家は益々榮えます程に御心靜かに眠りませよとこしなへに



### 貞代伯母様の死を悼む

何事も天命だと一口に云つてしまふのはあまりに果敢な過ぎます然し事實は絶対的の力を以て目前にすべてを冷靜に物語つて居ります

伯母様

伯母様は逝されました、思ひ起すさへ恐しい振天動地の九月一日横濱の假寓に於て魔の火の爲にあへない最期を遂げられました。この知らせを受けたとき私の小さい胸は張りさげんばかりでした。どうしておやさしい天使の様なお姿と黒い死の影とを結びつけられませう夢であれよと神に祈りました然し其祈りは無駄でしたまもなくまた龍夫様が伯母様の死を知らせにこられました、この朝母は横濱の事を心配して田中様へ行かれました、二度迄おしらせを受けた私はしばしば茫然として涙さへ出ませんでした。生者必滅は世の習ひとは云ひながらも運命の神のいたづらを呪はずには居られません、伯母様にお別れなされた御祖母様はじめ御一同様の嘆きかなしました事はつたない筆には到底つくせません 常々御丈夫なお身の持主故そのお悲しみは一層深いのです。初七日の御祀りに列してもお伯母様のお聲が耳につきお姿が目の前にちらついて何度思ひなほしても死の魔手で掩ふことは出来せん。けれども遂に上大崎のお宅で最後のお別れをすることになりました時やつと貞代伯母様は現世をお去りになつたことがわかりました。今迄私共あたへられたすべての印象は最早や本體なきまほろしであることを自覺させました。

思ひ出せば八月廿九日でありました、横濱から用達しにお歸りになり己代子様の洋服のことで宅へゐらして下さいました丁度夕立が来たので御飯などさしあけて御ゆつくりと四方山話を承り相變らずやさしい親しい伯母様と思つておわかれしましたこのお別れが永のお別れになるとは神ならぬ身の知るよしもありません

世は無常とは云ひながらもあまりの事です伯母様はほんとにやさしい方親切な方私共がいつお邪魔に上つてもいつもくをだやかなほゝゑみをしてもてなして下さいました。また随分可愛がついてたゞきました。その伯母様と今俄にお別れした私の心の中は？……

伯母様の死は限りなく悲しい、然し伯母様の死は私にある絶大な暗示を與へて下さいました、貞代伯母様と云ふ肉體は今地



上の何處にも求めることは出来ません。けれども魂は永遠のもので、これから先き常に私の思ひ出の中に生きなされるのであります。私はお残しになつた伯母様の立派なお心を心として勉めて行きます、伯母様を偲ぶ數々は私の心の中を往來して居りますが、これで筆を止めます。どうぞ後事をかへりみず安かに靜かに眠りませ。遠い御國に？……

大正十三年一月十三日夜

船橋文子記す

貞代様御他界の報に接し夢かとは驚き入りました何と御慰めの言葉も御挨拶の致し様もなく御痛はしさに胸つぶれました大崎方面は比較的被害も少なく焼失は全然御のがれの様新聞紙上にて見受け御無事とのみ存じ居り一度通信自由になりてより御伺ひ申上度と存じ居りました矢先御悲報にて眞實とは思はれませぬゆかれし方も残りたまひし方々も御心残り御愁傷の程御察し致しますことに先立れ給ひし母御や貴下の御逆境御幼兒の御心中御察し申上げましては涙の外なく一種いふにいへぬ淋しさ悲しさ深く御同情申上げます御生前は御親交を給はりことに白金に在住中は一しほ御世話様に相成われくの同級會鴨沂支部會はた城南會と何れも種々御骨折り下されいともく快活に社交會の花形様と一同敬服仕り居りましたに何といふ悲惨な運命に逢ひたまひしか寫眞帖に御骨折り被下御蔭にて見事に出來上り感謝いたせし幾程もなくこれが形見とならむとは無常の風のうらめしくまゝならぬ浮世のかたれます

別紙誠に輕少なから御靈前へお花にても御供くださらば幸甚右略儀ながら御弔詞迄 合掌

十月六日夜 認

(同級) 吉川 明子

さらぬだにさびしうひやく蟲の音の夜ことにより行く今日この頃家内打よつては過日の御地方の出來事に話および御同情申上奉り候折柄不意の御しらせに接し今更の様におどろかされ何と御悔申上てよろしいかをも存じ申さず主人ともくただ御うはさに過去をかこち申候幸に七日の御告別式の御時間前に御知らせの御はがきを手に致し候まゝ取敢ず御弔電のみさし上置き早速御寫し繪を取り出し手許にてもやるせなき思ひに御回向申上候御文面にて承知致し候へば御母堂様御子様ともに御同室なりし御由幸に御兩人様は御つゝがなく入らせられ候御由御しあはせなりし御事よと御よろこび御うはさ申上居候御近に候はゞ是非々々早速に御伺ひ申上度候へども遠路思ひに任せず残念に存じ候何れ其の中久々上京今回の見舞に各知己の方々を伺ひ度存じ居候まゝ其の節には親しく御面辭御悔申上度先は取敢ず延引ながらあらく

我友は菩薩なりけり人の世の

中島 誠子

はかなさ知れとをしへ逝きしは

十月十五日

大阪師團長村岡長太郎中將悔狀

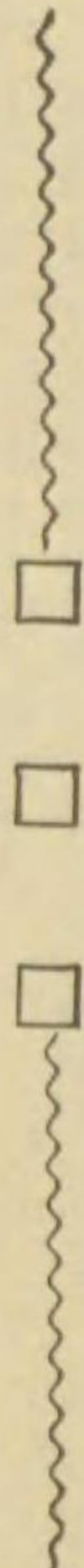
拜啓陳者此度の大地震にも御住宅は勿論御家族御一同皆々無事之由過般來阪したる大兄住宅の近處に居住する佛教感化救濟會相談役河野公明より聞及居候間御見舞も怠り居候處此度之訃音に接し誠に驚愕仕候横濱に於て御死去に候はゞ定めし悲

追悼の手紙並文



憐の御最期と被爲察如何にも御氣之毒千萬殊更御思殘多く嘸々御愁傷の御事と奉存候先は不取敢書面にて御悔申上候 敬具

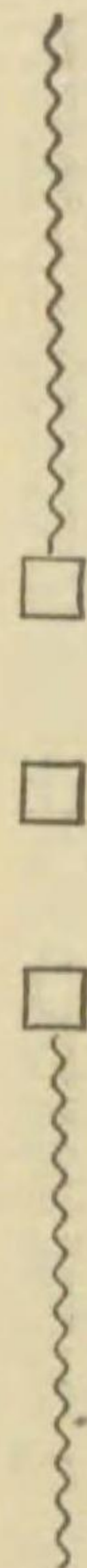
十月四日



拜啓今回の震災は有史以來之一慘事にして詢に爲邦家深愛之至りに不堪候 承れば御令政様には横濱に御避暑中此度の災害に被爲罹御逝去被遊候由痛惜之至り奉存候 貴下の御衷情如何斗りかと我身の不幸に省みて御同情に不堪候茲に謹而哀悼之意を表申候小生も横濱裁判所倒壊の爲め女婿を喪ひ大に落膽罷在候乍延引御悔迄如此に御座候 拜具

十月一日

(司法省局長) 光行次郎



承り候へば先日の御地大震災に付ては貴宅は市外の事とて比較上御安全とのみ推察致居候處意外にも御夫人様始め御家族の方々にも横濱に御滞在中不慮の御遭難の由にて特に御夫人様には遂に不歸の客となられ給ひしは誠に意外の御災難にて御氣の毒の至りに堪へ不申候 尊臺にも定めし萬端御苦心之程御察申上候て御同情の至に奉存候愚妻よりも呉々も御同情申上候様申出候拙宅には御地にて琴曲大家の四人中の一人上原眞佐喜氏大震前より滞在の處御地に留めたる家族の安否を氣遣ひて十二日迄は日々茫然起居せられ候後漸く右家族は本郷區堀田伯邸に避難中との事相分り昨日より當地に召寄せられ當分當地に住居の事に小生は取計らひ致置候右堀田伯夫人は房州北條の別邸にて是亦令夫人と御同様の終焉と相成候由伯爵も同地停車場迄(避暑の爲)到着之處夫人の凶報に接せられたる由若し夫人が停車場に伯爵を迎へられしならば斯る遭難を免れ給ひ

しならんなど相考へ候程に御座候右の悔は上原氏代筆にて過剋小生より相發し置き候次第に御座候上原氏(盲人)は在京なりしとせば十中八九は危険なりしは何人も申居候處出て、拙宅に在りし爲め危険を免れ堀田伯夫人及令夫人は出て、反りて御遭難の事あり人間萬事實に塞翁の馬に御座候 乍失禮雜事に及び候へ共座悔申上度如此に御座候

大正十二年九月二十五日

植村源太郎



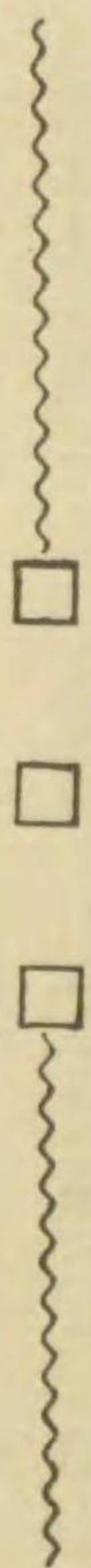
其後は御無沙汰にのみ打過ぎ申居候内には風の音さへも秋の来りしを覺え申候 扱て今回の東京横濱方面の震災は私ども一生の内にも又と聞くこともなかるべき一大慘事にて誠に驚くより外なくそれにつけても存じ上げし皆々様の御安否を御案じ申上げつゝ何をする勇氣もなく號外を見る度にも火災のはげしきにおそれ悲しみ居候處四五日を経ての新聞紙上を見るに御宅様の御近くは多分火災もおのがれ遊し候御様子皆々様もお變りなきやもしれずとよき方へといろくゝと御想像申上げつゝ御見舞狀差し上げ度も震災地へ向けての通信は一切受けられずとやかくと思ひ過し居候處去る十四日思ひかけなくも震災の爲め御奥様には横濱にて御死去遊し候由のおはがき頂き誠に驚き申し悲しみてもくゝ餘ありておはがきを手にしたるまゝ涙にくれ申候天災と申せば何と申してもいたし方なき事ながら皆々様の御愁傷もいかばかりかと御慰め申上ぐるに言葉もなくかけ乍ら御同情申上居候 昨春御目もじいたしたるも此世のおわかれなりしかと思へば今更ながらおなつかしく夢のやうに覺え申候何卒皆々様御悲しみのあまり御老母様をはじめ御一同様に御障りなきよう季節も追々と冷氣にむかひ候へば折角御身御大切に遊され度かけながら祈上候



昨日は當地にて震災地死亡者各靈追悼會舉行され申候間私共末席に加はり御奥様の御靈へとはるかに焼香申上げて思ひ多く過し申候先は御悔み申上げ度右まで かしこ

九月二十三日

富永 紅枝



御奥様おかくれ後はや一月の餘となりました日々嘸御追憶の堪へさせられぬ事といくへにも御察し申上ます私どもといたしましてもまた如何しても本當とは思へず以後ふたゝびお目に懸れぬ事を思ふ時唯悲しさに堪へられませぬ

明日告別式を御舉行被遊ます由是非御詣りさせて戴き度いと存じて居ますなほ此文と共に持たせ上りました盛菓子一對誠に  
お麓末では御座いますがお霊前へ御供へ頂き度よろしく御願ひ申上ます先は右まで草々

十月 六 日

京都府立第一高等女學校  
東京在住同級會員

- 那波 かつ子
- 鵜飼 恒子
- 小川 よし子

- 木部 愛子
- 小松 達子
- 舟津 春子
- 牧瀬 孝子

嗚呼 田中夫人

(醫學士) 日影 董

生れて三十年、今度の震災火災に遭つて、途方に暮れるといふことを初めて體驗しました。九月三日の朝八時頃、私達帝國大學構内の避難所から下谷の宿に歸つて來ました。そして魂は怯えながらも、先輩知己の消息が知りたくて、正午から宿を徨ひ出ましたことです。

有樂館に行つて見れば田中家のことは判ると思つて、神田橋の瓦斯管を這つた様にして渡り、丸の内に參りました。鐵道協會の側の路次をはひつたところに入口の有樂館の地下室に日本石油會社は引越して居ました。何時も七階の受付に居る五十格好の人が居て田中さんは見えて居られた様に思ふと云つて、私の名刺を持つて奥へ行きました。暫時してから、代つて三十七八の立派な風采の人が出て來て、奥さんが横濱で壓死を遂げられました、と語りました。私は何か黄ろい球の様なもの心窩にころけ、喉がカラカラに乾く感として、茫然として突立つて居ました。次の瞬間には臉が熱くなるのを覺えました。其の人に無言で頭を下け急いで私は出て來ました。鐵道協會の前に暫時立つて居ましたが、それから大崎を目差し



て歩るき出し、殆ど如何な種類の秩序も見られぬ街路、照りつける九月の太陽の下に、男も女も有の儘の姿で、荷物を背負つたりなどして、往來して居るなか、蠶々として軍用自動車が馳驅するなかを、電車線路傳ひに、我無者に歩るいて、二時半頃長者丸に着いたのでした。

今夏日本アルプスから歸つた時、永らく御無沙汰して居たから一度奥さんにお目にかゝらうと思つて、八月の六日であつたが、藤村の羊羹を誂へお宅へ電話をかけましたところ、横濱へ避暑にお出になりましたして今月一杯あちらに御滞在の豫定で御座います、と電話に出た女中さんの返當でありました。羊羹はそのまゝ研究室に持ち込み、皆で食べて終つたのでした。

奥さんは物靜かな、しかも極く氣さくな、決して人に分限をなさらぬ方でありました。私が結婚問題で悩み、奥さんに相談に行つた時など、理解のある同情のある奥さんの態度に、私は遠慮も何も忘れ肉親の姉上に對する様な心安さで、洗ひ浚ひをぶちまけ、宿へ歸る途すがら電車のなかで、考へ出しては獨り赤面し苦笑したことでした。

本牧ではお嬢さんを抱いて半身外にお御になつた時、背に家が潰れ落ちたと聞きました。その咄嗟の場合にも、腕を延ばしてお嬢さんを出來る丈外にお出しになつた形であつたと聞きました。涙の出る話であります。

一面の野菊のなかや崩岩

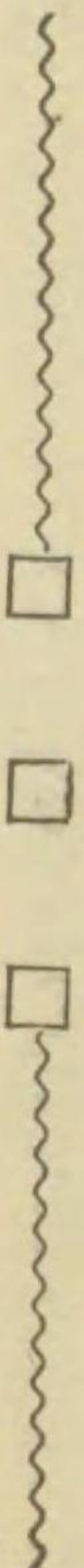
(十二、十二、二)

追悼

(故重備夫人) 町田 武子

さりぬる大正十二年九月一日はいかなる悪日にてぞありつらむ東京横濱附近に起りし災害は實におそろしくいつの世迄も忘られずましてや親しき友の此厄に遇ひ給ひしことよ思ひ出づるだに御いたわしけれ

頃は八月半假の御住居なる本牧より御便あり御歸りの上は訪はせ給ふとの仰うれしく思ひまちはべりしにゆめのことにてもはや此世にましまさずまみえん事も其甲斐なし逝きにし春親しき及ながら打つどひ芝居見せし折年こと催すためして又こむ年もなど申あひ楽しく思ひ居りしも今は空しくなりはてぬ世の常の御わづらひにて御手當の數々盡されたる上とても中々にあきらむべうもなくまして常に御健にておはせし御身のこととていかで眞と思はるべき母上御子達もおはすなれば御心のなやましも多くおはしませしならんと其せつなの御有様おしはかりていとど涙の種となりかへらぬくり言ながらせめて此地にいましなばかかるかなしき事はなかりしならんにかへすがへすも無念にぞありける



(日本銀行) 青木徳一郎

嗚呼貞代さん!

田中君と結婚されて二十有餘年其間田中君が郵便局長として朝鮮京城へ五年間予が日本銀行松江支店へ一年有半在勤せし外は共に東京在住なりしを以て常に相往來して親交を續け予の弟妹兩人は田中君御夫婦の御媒酌に依つて良縁を得殊に妹の如きは丁度田中君が京城局長時代に該地に於て江口工學士と結婚せしが故に田中君が親元となつて萬事お世話を蒙つたなど全く兄弟同然の懇親を得つゝあつた關係上貞代さんの性格は能く之を詳知し居る方である

田中君は頭腦明晰才氣煥發官吏として將又實業家として能く社會の上に活動せらるゝ丈に家庭の主人としても亦活動的で且つ嚴格である而して交際も廣く人の出入も多く家庭は常に繁忙で且つ活氣に充て居る貞代さんは其間に於て子供さん達の教育は勿論家庭萬般の仕事を能く調理して少しも内顧の憂ひなからしめた働きは到底普通婦人の及ばざる所で吾々は常に之



を敬服して居たのである殊に左記の事柄より推して如何に主人の爲めに平素苦慮して居られたか、窺はれる

田中君は先年チブスに罹つて白金の大學分院に入院され予と福田秀五郎君とが其保證人となつたのであるが其時の貞代さんの心配は一と通りでなかつた全く寢食を忘れて看護を盡されたのであるが予も亦暇ある毎に訪問して其病床を見舞ひたるが或る時貞代さんと對座して熱の昇降の工合を話し合つて居ると田中君は病床から之を聞かれて「素人が熱の事など言つたつて何の役にもたぬ……其話は止めて呉れ……」と言はれたので貞代さんと予は其儘苦笑して黙つて止まつた思ふに大將自らも窃かに其熱の事が氣になつて居たので其話は聞くのがイヤであつたらうと思つて別段氣にも止めて居なかつたのであるが貞代さんはそれをヒドク心配された見え翌日態々予の宅に來られ（予は出勤時間中で不在）家内に會つて「昨日は主人がトング失禮な事を申上げてサツ怒つて入らしたでせう、どうぞ能く／＼お詫を申上げてください……、と誠意を込めて主人の失言を詫びられたので家内も不覺落涙し「宅ではソナナ氣振りは少しもありませんでした……唯々御病氣の事を氣にして居りました位だからソナナに御心配なさるに及ばないのでせう……」とお慰め申したので後では長女の縁談のことなどお話しあつて至つて元氣能くお歸りになつたさうである予は歸宅後其事を聞き却つて驚いたのである無論予は氣にも止めて居なかつたのであるが假令それが怒る様な事柄であつたにせよ貞代さんの誠意に對して怒つてなど居られるものでない予は家内は勿論子供等にも能く其事を話して妻たるものは斯くあり度ものである貞代さんの如く主人の爲めに蔭になり日向になつて盡されるので田中君が今日の如く成功せらるゝのも亦知友の方々が親しみを持たるゝのも皆な此の貞代さんの梶の採り様が巧妙で且つ誠實であるからで實に稀に見る賢夫人であると言ひ聞かせたのである

嗚呼此の良妻賢母であつた貞代さんは今は幽明遠く隔て、語るに由もないがドウしてアンな不幸に遭はれたのであるか予は全く天道は是非非乎と絶叫したくなるのである然し是も佛者の所謂前世の因縁では是迄の運命と諦める外はないのである、

然し貞代さんが田中家の爲めに盡されたる功績は不朽であると思ふ

今回田中君が貞代さんの爲めに追悼録を編纂せらるゝに臨み聊か予の感想を録して哀悼の詞に代へる次第である



### ○貞代の君を懐ひやりて

東京 井上 胤文

仰で山を見れば春秋變化し、伏して水を觀れば汪洋として窮りなし、變化は是れ自然の天則にして桑田變海は免がれざる所、況んや人海の變遷に至つては、且に夕を謀らず、榮枯盛衰恰も掌を翻すに似たり。

さても今回の震災は千載一遇の悲惨事にして、到底吾人の想像だも許さず、疾風迅雷電光石火の裡に帝都は全滅し同胞は阿鼻叫喚の境に生死す、親は子を呼ぶに暇あらず、子は親を救ふの間なく、瞬間にして驚天動地の大變化を現出したのである。

九月一日の朝震災當時の數時間前、田中次郎兄並に令息義次君との連名繪葉書が、八月三十日の日附を以て信州輕井澤二笠ホテルより到來した、予は陽春三月帝京を去つて朝鮮を旅行し八月末日歸京、漸く不在中に新築せられた中澁谷の新宅に長途の旅装を解いたばかりであつたので、同兄の通信に依て僅かに其消息を知つたが、同家の安否心許なく翌二日の朝早速田中氏の邸宅を訪問することにした。

地震と火災と鮮人騒ぎで右往左往に馳せ交ふ物騒の間を抜けくぐり押し分けつつ漸く上大崎長者丸の田中邸馳せ付けたのである、歩を門前に停めて田中邸を望めば、さしも嚴めしかりし大間二本の石柱の一本は倒れて無慘に粉碎されてあつた、予は此瞬間に何とも云へぬ不安の念に襲はれ、邸内に入りて一家の安否を問はば立關子は答へて曰く、主人は令息と輕井澤



に夫人は令嬢と横濱本牧に、お宅は皆様お留守で途方に暮れてゐますとの事であつた、それで私は一先づ安心した、そは今度の地震は東京が中心で地方は無事だと思つたからである、然し横濱在の夫人は嘸ぞかし本邸を氣遣はれてゐられるだらうし、自動車の用意出来れば横濱へ迎に往かんとせしも、運轉手も不在とのことで其事は斷念し後事を談じ家屋の周圍を見廻りながら歸宅したのであつた。

越えて九月四日の夕方長子胤義は慌たしく歸り來りて曰く、田中のお伯母様が横濱で壓死されて今日遺骨を持ち歸ると云ふ大騒ぎでした、と、予は此悲報を受けて夢かとはかり飛び上りさま、それは大變に即刻出懸けやう、だが千駄谷の青木徳一郎君の許へは急いで使を出せよと云ひ棄てたまふ、家内と俱に田中邸へと馳せ向つた、

田中家では其朝横濱に迎への自動車を出されたさうだが、六合川の不通其他交通不便のため、漸く晩の十時頃迎への自動車が戻つて來たので、主客一同一室に集まつて、震災當時の慘憺たりし光景や數日間の艱難苦勞を物語れた、語るものも聴くものも皆涙を以て語り涙を以て答へられ聲涙共に降り一涙一句腸爲めに寸斷す。

其夜は終宵親しく懐かしき貞代夫人の靈前に細き香煙を炊き香花を手向けて亡き人の冥福を祈つた。

思へば夢のやうであつた、煙に消えし貞代君の靈前に手向けながらも、眞に失せ給ひし感事は露ほども起らず、襖の彼所に障子の蔭に貞代君のさゝやける聲が聴へ淑やかな姿がありくと見えて幽明の境を辨へざりしこそ不思議なれ。

君の壓死せらるゝや身を以て愛嬢を被い重き梁の下敷となりながらも、老母と幼女を保護し終に犠牲の最期を遂げられしと聴く、死に至るまで君は愛護の手を遺憾なく伸ばされたのであつた。

貞代の君は天資誠にしとやかで、ケバ／＼しき派手やかな質ではなかつたが、何時も温雅なやさしき人であつた、どんな苦境の場合でも悲惨な時でも少しも取亂された風情や態度を見ることはなかつた。

想ひ出せば大正六年の春であつた、最愛の長子義郎君が花の蕾の十五歳で昇天せられた時、私は江州の旅行から馳せ歸つて此最大悲痛の極であつた不幸に向て、兩親の方々に逢はず顔も無く又慰むる言葉も知らなかつたのである、唯心中同情の念に充たされ涙を飲みながら同家を訪づれたのであつたが、一たび夫人の温容に接するや顔に悲哀の曇を認めず聲に哀音の淀みを聴かず、平素のそぶりの淑やかさに少の變りもなく、愛子の臨終の雄々しかりし事や信仰の厚かりしことなど物語られしには、我ながら非常に勵まされて慰むる身の却て慰められたのであつた。

又一昨年良人の重き病の爲めに一度ならず再度まで九死一生の永き入院にも晝夜附添ひ有護せられて、酷暑焼くが如き苦熱にも一度も倦怠の色を見せず一言も疲勞の言葉を發せざりしは誠に稀有の夫人哉と私はしみ／＼敬服したのであつた。

聖書に

誰れか賢き女を見出すことを得ん、その價は眞珠よりも貴とし、その夫の心は彼を恃み、その産業は乏しくならじ、彼が存命ふる間はその夫に善事をなして惡しき事をなさず、……………

その夫も彼を讃めていふ、賢く事をなす女子は多けれども汝は凡ての女子に愈れり。

大地一震して帝都榮華の幕は落ちた、此引幕の内に鎖されたる人々は永久人生の舞臺に現はる、事の出来ない運命に葬り去られたのである、其幾十萬人の中に吾が最も親しかりし貞代の君も浚はれたのである。

噫……無情

天に向て叫ばんか寒鴉空しく長空を飛鳴して去る、地に伏して哭せんか風は習々として野草を吹くのみ、嗚呼空の空空の空なる哉凡て空なり。

聖書に曰く

追悼の手紙並文



それ人のよはひは草の如くその榮は野の花のごとし、風すぐれば失てあたくその生いでし處にとへど尙しらざるなり。

佛書に曰く

最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任ずること勿れ、無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し紅顔いづくへか去りし、尋ねんとするに蹤跡なし、と

實に然り千古萬古同じ歎きを繰返す人生の旅路こそ憂たてき、噫貞代の君は逝けり、吾等其跡を逐はんとすれど道遙にして遠し、いづれの時か又相逢ふの期無からん。

噫……悲……哉

風にみだれて草の葉の、露と消えゆく悲しさよ、玉の臺も如何にせん、寶の山も何にかせん、絶ゆる玉の緒つなぐべき  
跋山蓋世の英雄も茶毘一片の煙のみ、傾城優美のたをやめも、秋の野山の草なれや、なれど信念深き貞代の君には、永遠の國の綠なす花の臺の花園に常世の春を迎へつゝ、天津御國を讚美して、窮りなき代の窮りなき生命をうけつぎ給へかし、

ほのほのと明石の浪の朝風に

島かくれ行く舟をしそ思ふ

島にかくれて帆影すら見えずとも、舟にかはりはなく消えせしにもあらずかし、貞代の君のみすがたも我等の眼には見えずとも、常世の海に漂うて眞帆片帆を揚げ給ふらん、いざさらば貞代の君よ吾此世にあらん限り、君の冥福を絶えず祈りつゝある事を覚え給へ

親しき友 春 風 記 す

### ○故田中令夫人を偲ぶの記

細川達也 謹話

今年八月二十七日社用にて上京した處非常に忙しく用務蝟集して舊知各處を御訪問する事なども亦も不可能であつたが如何いふものか田中奥様丈には是非御目に掛りたい希望が何うしても念頭を離れない、三田の日本電氣に大木氏を訪ひたるに氏は自分も昨今田中様へは頓と御無沙汰致して居るが亦も夏中はお目に掛る事は出来ない多くは別荘の方にお出でだからとの事に小生も亦も一、二日の短時間にては駄目だと諦めたが、せめては夫君田中氏に拜芝して舊恩を謝し併せて陰ながら御様子を伺んと丸の内の日石七階に同氏を訪ひ平素御無沙汰の御詫びをし謝罪の意を表し奥様へよろしくお傳へくたされ度き旨を呉れくも述べてお別れし其建物の「エレベーター」から運び出されたのは八月二十八日であつた、其后僅か五日と隔てぬ九月一日の彼の大地震を境に二十有餘年間御恩誼を蒙つた御令聞と永遠の御別れを告ることとなつたとは思ひ切らうとして思ひ切れぬ深き心残りの極み悲嘆の極點である上京當時何とかして一度お目に掛りたいといふ念が胸中を離れなかつた事、夫君田中氏とお別れするとき何となく後髪を引かるゝ様な氣持ちがした事杯は今にして思ひ廻せば俗に云ふ蟲が知らせたものであつて神祕の靈的サツゼツションを蒙て居つたのだと後になつて種々な事が浮ぶのである

偕て我々共夫妻が田中様お二タ方に初めて拜芝の榮を得たのは明治三十四年四月十五日即ち今より二十三年も前の話であつて其時は我々夫婦も結婚して二年目、田中様お二タ方も花嫁花婿の時代を去る、僅か一、二年内外の處で當時夫君田中氏は潑刺たる新進氣鋭の傑物、婦君貞代子殿はうら若き花の姿の中に嚴として貞淑の氣品人を壓し而も非常にやさしみありて



人皆其徳を慕ふといふ風であつた

當時の自分の當用日記が丁度筐底に見當つたから繰り展けて見ると

日記の一節

『明治三十四年三月二十日（水曜日）』

一、遞信書記官田中次郎氏京城郵便局長に命ぜられたる旨通達あり

一、愈々京城出張所は廢止せられ更に獨立せる京城郵便局設置せらる』

三十三年の北清事變后日韓電信通聯問題は我外交史上實に重大なる案件の一として取扱はれ爾來仁川郵便局の京城出張所と云ふが如き規模の小なるものにては帝國利權の伸張を期し難く先きに公使として正宗の利刀の如き精銳壯年の外交家林權助氏を選任し今又た此處に遞信部内最も敏腕聰明の稱ある青年書記官田中氏を派する事となつたのである  
尙ほ日記を繰り展べて行くと

『四月十五日（月曜日）』

田中局長、夫人と共に二號便列車にて南大門停車場着局員一同出迎へ直ちに一同車を列ね官舎として差し向き借り上げたる富田氏邸に向ふ

局長は明日より各官衛廻り各國使臣訪問等に取り掛る筈其豫定は三日間に亘る筈其前に通聯事務の經過に付き書類集めて巨細供述の要あり大忙して天手古舞』

其頃の京城には彼の豪快故陸奥伯と共に手を取つて進行した大江卓老あり古武士の如き竹内綱氏顔が「ビスマーク」に似て居るとして和製の「ビス」の綽號ある目下義雄氏等英雄豪傑雲の如に京城に集まり隨て種々なる志士、國士の來往集散する

もの多く通信業務の如きも大體の大方策より國家に關聯せる大問題のみ論議畫策せられ執行する所の責任は極めて重大であつた、夫君の立場斯の如くである故令夫人の氣配りも一通りではない一言一行にも周到の注意を要する事多く特に狹き處とて稍もすれば色々の事を針小棒大に吹聴する況んや兎角の批評多きは婦人仲間の常習、此間に處する令夫人の氣苦勞は並大抵では無つた然るに未だうら若き令夫人は斯の間の機微を良く洞察せられ婦人會や其他の社交會等に於ても造次顛沛の間にも用意周到寸分も緩みなかりし故何れも其賢明を讃へ賢夫人の稱一齊に唱導されてあつた加之ならず夫君が着任勿々斯の重大なる任務の爲め家事の如何は一切放擲し一意國事に畫されたるも畢竟夫人の内助の功に依りしは明かな處として皆賞讃を吝まなかつたのである、特に其當時の郵便局員は皆何れも一癖あるものばかりのヤンチャ揃ひ尤も今の若い人の様に「サボル」とか給を上げて呉れいかいふサムしい事を口にする様なものは一人もなかつたが殺伐動もすれば喧嘩口論男子の意氣を徹底的に吐き出す連中ばかり此等の慥好者等も令夫人の温かき恩情には猛獸が猫に變じた如く大人しく皆敬慕して居つたのである我等夫妻も其一であつて長く今に其暖き情熱に感激して居るものである

其の後韓國通信事業が本邦に併合せられ間も無く統監政治となつたので夫君は歐米各國へ視察を兼ね遞信業務研究として出張を命ぜられ次で萬國無線電信會議に本邦委員として參列を命ぜられ二ヶ年の長き間夫君留守中の家事一切を齊整し其間次男義次氏を大阪に居住中擧げられ其後東京白金に居を定めらるゝこととなりて夫君は通信局長の榮職に就かれしが其間子女の教養に勵精せられ其薰育の功空しからず次男義次氏の如き實に聰明勵精秀才の評あるは蓋し斯の母君にして此麒麟兒ある當然の事として更に一段敬慕の念を禁じ得ないのである

今日迄令夫人より頂きたる御手紙は荆妻も澤山保存し居りしが東京より芝罘、芝罘より函館函館より名古屋といふ風に僅かの期間に長途の旅を屢々繰り返した爲に何れに仕舞ひ無くしたか見當らざるが一つ手近の筐底より幸ひ搜し出たるもの



あり左に添付して故令夫人の恩情を感謝する料としたのである夜色蕭然更爛け人靜るの時往時を追懐し來つて實に斷腸の思ひに堪へぬのである

香煙も濕つた態まや夕時雨

弔文

(兵庫縣廳) 兒玉辰二

今年の九月一日に東京横濱地方で稀有の大震災ありて數萬の死傷者を生じたとの報導が日夕諸新聞に發表された。されども數日の間は一向誰が死んだのやら誰が負傷したのやら浮説紛々眞偽まち／＼にして何れを信するにも由なき有様なりき。然るに予が一番初めに東京より受取つた手紙は之れぞ最も悲しむべき報導にして即ち田中令夫人の訃を傳ふる通知の葉書であつた。その葉書は九月四日付の謄寫板摺のものにて如何にも東京に於ける其當時の混雜と不自由とを偲ばしむる種類のものであつた。而して其意味は貞代夫人は避暑中横濱に於て壓死を遂げられ令嬢も負傷されたが幸に逃げのびられた田中君と令息とは輕井澤に入浴中なりしが故に難を逃れられとの事であつた。

予は其葉書を見て急に何とも言はれぬ悲哀の感に打たれ覺えず歎聲を發して「田中君は何たる不幸の人ぞや曩きには長男に逝かれ今又最愛の妻に先んぜらるる田中君の心中を察して實に同情に堪へざるなり」と。而して出來得べくんば直ちに東京に行つて心からの同情と慰安の辭を呈したいと思ひしが如何せん當時公務の都合は一日たりと雖予が神戸の地を離れる事を許さざる事情ありて乍遺憾予は哀悼の辭を書して弔意を表するの止むを得ざる次第なりき。

予の田中君に於けるは三十五六年の中學時代よりの親交にして爾來或は居を東西にし或は業に甲乙の別ありても往年の親交は今尙聊も舊時に變る事なく常に無二の畏友として敬愛する次第である。随つて貞代夫人とも明治三十一年田中君が初めて東京に家庭を持たれし時よりの知合にして爾來二十五六年間の知合なりき夫人は資性極めて温順にして貞淑夫に仕へ眞面目と熱心を以て家庭の整理と兒女の訓育に従事せられたる人なり夫人は敢て現今の社會活動的の婦人にはあらざりしも所謂賢母良妻として一點の不足なき方なりしと信す。田中君が或は官界に雄飛し或は民業に従事して専心銳意其業に活歩し得らるゝ事も之れ亦貞代夫人内助の功多きにあるものと言はざる可からず予は此の慈母を失ひたる兒女の境遇と此の良妻を亡びたる田中君の胸中とを察して實に深き同情の念なきを得ざる次第である。

然るに今茲に貞代夫人の記念出版物を調製されるに際し何か寄稿せよとの事にて聊か前言を書して平素の親交に酬いんとす。然れど二十年來互に居を東西にし貞代夫人の最近に於ける日常の細事を知悉し居らざるを以て夫人の逸事等につき一々具體的に記述する事の出來ざるを遺憾とす。

大正十二年十二月三日夜

故田中令夫人の訃を聞きて

朝鮮京城 梶山周介謹白

大正十二年九月一日!!!何といふ悲むべき日であつたでせう、前古未曾有の大震災は、我帝都並に横濱地方一府四縣に互つて勃發し、十數萬の生靈を喪ひ、幾十億の國富を烏有に歸せしめ、悲慘の限りを盡さんとす。

當日夕方此悲報の傳はるや、我れ人共に愕然として色を失ひ、豫て知遇を辱ふする方々乃至親戚知友の御安否如何やと、憂慮措く能はず、取敢ず直ちに御見舞狀を出したのですが、如何せん通信の途絶して何等御消息を知ること出來ず、願は



くは皆様の御身の上に恙なかれかしと、不安の裡に只管念じて居りましたに、月の十三日（此日が當地に於ける通信の到着した第一の日でありました）に三り、突如「令室様には、横濱の御假寓で、無慘の御最期を遊ばした事を耳にしました時は、一時に胸も塞がり、何といふ御不幸のことだらう。どうして閑静な長者丸の御邸から、雑沓する横濱などに御出かけになつて居られたのだらう。又如何なれば人もあらうに、御人格の高い奥様に、コーした御災難が振り、ゝるとは、神も佛もないものかと、今は歸らぬ繰りことも出て、限りなき憂愁の念に閉されたのでございます。

私は田中様御一家の皆様に御世話になり始めたのは、随分古い時からで、今から考へて見ますと、二昔の明治三十六年からで、當時田中様は、京城郵便局長をして居られ、私は同年の十一月に東京から、同局に赴任したのが、御厄介のなり始めでした。其の當時を追想して見ますと、只今七萬の内地人が居ります京城も、僅かに日本人六千人位、官衙としては、公使館、領事館、守備隊、電信隊位のもので、未だ露國の勢力強く、親露黨の跋扈した時代で、自然日本人の間は極めて親密で、夜分になると、今の京城ホテルの前身たる日本人俱樂部に、林松使を始め、皆様御集りになつて、玉突や碁を圍むといふ有様だつたのです。郵便局の如きも吏員僅かに二十人足らずで、家族持ちは七八人よりなかつたのです。随つて同じ郵便局に勤めの私、同じ家族持ちの私等一家は、家庭向に常に御厄介になつて居つたのでございます。當時奥様は未だ二十臺の御若い時でありましたが、極めて御温良な御貞淑の方で、何にも知らぬ私共の妻などは、一方ならぬ御世話に預かつたのでございます。其の頃は恰も日露の風雲極めて險惡で、何時戦火を交へんも計られぬので、家族の者は引揚げたらとの説が盛んであつたのですが、奥様の御主張は、死なば諸共、との御覺悟で之に反對せられて、終に全部留まることになつたのでした。其の内に明くれば明治三十七年二月八日仁川の海戦に火蓋を切つて、日露の戦争が勃發したのでした。當時日本側の通信機關は、京城以南のみであつたのですが、外國電報は總て此線路を経由する外途がないので、此仁川海戦間に於ける

局長様の御苦心と御措置宜しきを得られた事は、此戦争に大捷を得たことに依つて裏書されたといふも、敢て誇大でない、私共通信従事者は心竊かに欣快とした所でした、それからといふものは、戦争の運命を左右するとも云ひ得べき通信機關の施設計畫に付て、日夜御苦心御奔走遊ばしたことは一通りではなかつたのです、斯の如く局長様の御活動の背後には、奥様の御内助の功大に預つて力ありと申すべきであります。

其の後戦争の大捷に依つて、朝鮮の状況は一變して、親日派の勢力を占むるに至りましたので、機を見るに敏なる局長様は他の何れの機關よりも早く、而かも他の機關は顧問政治を敷かれたに拘らず、事實上の占有たる朝鮮の通信機關合同の畫策を建てられて、戦争の終局に先づ、即ち明治三十八年四月一日に、韓國通信機關委託に關する取極書が兩國政府の間に締結せられ、同年五月十八日から、韓國全部の郵便司電報司の引繼を始めることとなり、池田引繼委員長に引繼がれ、外遊の途に上らるべく、茲に明治三十四年から足掛け五年間に朝鮮の通信事業に偉大の效績を残され、御一家皆様は内地に御引揚のこととなり、御別れすることとなりました。

其の後春風秋雨茲に二十年、絶えず當時を追想し皆様の御高德を御慕ひして居るのですが、私は依然として朝鮮の生活を餘義なくされて居るので、山海遠く親しく御目にかゝる機會を得ず、況んや何等犬馬の勞を執ることも出来ないに拘らず、此永い年月、少しも變ることなく御眷顧を賜ひ、随分無理な筋違ひの御願までも御厭ひなく、御面倒を見て戴き、御鞭撻を受けつゝ、今日に至つて居るので、此御鴻恩に對し、何時かは親しく御目にかゝり、せめて一言の御禮をも申上げたいと思ひ續けて居りました處、計らずも昨年三月上京の命令を受けましたので、飛び立つ思ひで出京し、三月二十三日の朝、長者丸の御邸に伺ひ、絶へて久しき奥様の御温顔に接し、以前に變らぬ御親切の御言葉を頂き、過ぎし昔の物語りに、思はずも長座をし、限りなき感謝の念を以て、御暇乞を申上げたのでしたが、之れが御別れにならうとは、今尙夢の様で、ドーして



も事實と言へないのでございます。生者必滅の世の習ひとは申しながら、せめて普通の御病氣で充分の御手當の上藥石の効なく、御永眠遊ばしたらんには、尙幾分の御諦めもあらんにと、皆様の御悲歎を御察し申し、斷腸の思ひに堪へないのでございます。實に人間の運命ほど果敢ないものはないと返すくも世の中の無情を痛感いたします。

此度の大地震に就いて或宗教側の人はコーいふ見方をして居ります。

震災前の日本人は、政治家も黨人も、實業家も宗教家も、教育家も、餘りに驕慢であつた、無反省であつた、信仰を無視し、神佛を蔑如し、巧利主義の一點張りであつた、賣名にあらずんば利祿のために尊念狂奔してゐた、さうして得た財を以て、奢侈淫蕩の資に供して居た、茲に天譴が下されずんば、何の處にか正法正道の存立と權威とがあらう、震災の突發は當然の歸結であつた、同時に、震災前の政治も社會も思想も、有らゆる方面に行き詰つてゐた、爆發は避け難い運命であつたけれど、人爲的のメスを振ふべく、その腫物は餘りに大であつた、これを完全に、安全に切開し治療すべく、人力は餘りに微小であつた、果然、天の力、自然の力を以て、この行き詰まれる局面を打開した、それは大震火災であつた、東京人も、遠隔の同胞も、全人類は一齊に目覺めたことであらう、生死——信仰——少くとも何等かの強い衝動を受けたであらう。その天譴が、關東の人々の頭上にのみ下されたと云ふことは、それ等の人々にのみ罪ありと斷すべきでは固よりない、一家和樂を缺けば家長に責あるが如く、日本人全體の受くべき天譴を、帝都の人々が蒙つたのであり、同時にそれ等一局部の犠牲者が、すべての罪を購うたことは、やがてその罪を殺して全同胞を救済し得た事となる、如何となれば、今次の災害を免れ、死を免れた他の多くの人々は、少くとも罹災者の慘状を目睹し又は聞知して、身の幸福を神佛に感謝し、過去の罪障と驕慢を反省すべき機會を與へられたであらうが故に、さうして、自覺し、復活し、若くは救済せらるべき信仰の一路が開かれたあらうが故に——キリストの十字架も、釋迦の苦行林も、日蓮の龍の口も、親鸞の流瀆も、畢竟同一意義——自ら獨りそ

の身を責めて得たるその結果の幸福を、未だ自責せざる他の一切衆生に恵まんといふのである、茲に至つて十幾萬人の犠牲に、嚴肅なる宗教的意義が發生し、之れによつて、他のすべての同胞は救済されねばならぬ、再生しなければならぬ、それは、他の不幸によりて、自己の幸福を感謝することによりて——感謝の生活は、やがて、信仰と、眞實と、純生とに生き得るであらうことによりて。

此人の言にも一面の眞理がないでもない様に思はれます。流水行きて歸らず、澆季の世の中、人心を新たにす、貴い犠牲者になられたと思ふことも、又追善供養の一ではありますまいか。

聊か蕪言を呈して追悼の微意を表します。

## 年餘の賜

(工學士) 山内 二郎

あの九月一日の恐怖と混亂とからもう三月も経ちました、今かうして靜かに秋の日を受けながら瓦斯ストーブの音に聞き入つて居ますと、あの五六年前のさまざまのこと、それから後の折々のことなど次がら次へと繪巻物のやうに想ひ起こされて參ります。

正月の末初めて御目にかゝりました時、義郎さんの御病氣それから引續いての御悲しみの時、或は弱かつた私のわづらひの時など私が一年餘り御世話になつて居りました時の嬉しかつたこと、悲しかつたこと、口惜しかつたこと、或は憤りしかつたこと、或は可笑つたこと、其他さまざまの出來事、これ等の出來事も今はみんな悲しい思ひ出となつて了ひました。

一年餘りと申しますと私の生涯に比べますと決して永い間とは申されませんが、しかしその一年餘が私の一番大切な修



養期のあの高等學校の一年二年の時でございますただ、それだけ此等の思ひ出は私にとりまして決して忘れることの出来ません思ひ出ではございますし、大きな大きな賜であると考へますと、私は何度書き直しましても、何と書きましても、意を盡すことが出来ません、むしろ唯一人黙つて大切に藏つて置きたいやうに思はれます。

口に述べ筆にするばかりが教育ではなく、むしろ無爲にして化する人格の溢れこそはまたなく難有く尊いものと思はれます。そしてこの無爲にして化せられました私、これが私のこの數年來の大きな基調となつて居りますことは私の常に深く深く感謝して居る所でございます。また大勢の同じやうに化せられた他の若い人達の等しく經驗せられて居る所であらうと思つて居ります。

私のあの青年時代の狂暴、傲慢、稚氣と禮になれない野性とを常に恕るされ、蔭に日向に盡されました寛仁に私は恥と悔と大きな喜びとを感じないでは居られません。たとへば今はもう何日頃であつたのか、また何故であつたのかも忘れて了ひましたが、確か冬の一日のことでございます。その日私が歡樂の後長者丸の御家に歸つて参りましたのはもう十二時を廻つて居りました。綺麗に晴れた空には美しい星が一面に散つて居りました。重い貨物列車がゴト／＼と通つて了ひましたあとには寒い風がガサ／＼と枝を渡り、時々犬が遠吠する他は全く靜かに靜まつて居りました。ある角をグルツと廻つて門の戸に手を掛け、何時もの調子で何の氣もなく力を入れましたけれども重い扉はガタとも致しませんでした。それでも私は歡樂のほとほりがまだ續いて居りましたので數回試みた後に平氣で裏口の方に廻つて見ました。所がそこもしつかりと閉つて居りました。つまり私はどうすればいゝのか分らなくなつて了つたのでございました。それから何處に行かうとて行く處もございません。時計は容赦なく動いて参ります。耳を澄ましてもたゞ寒さうな風の音だけしか聞えて参りません。二時間ほど前までの歡樂ももう何處へか飛んで行つて了ひたゞわけもなく立つて居りました。犬がウサン臭い奴と思つたのでございませ

う戸の内側に来て吠えはじめました。しかし犬に私だと申しましても通じませんし、また戸を開けて貰ふわけに行きませず、本當に途方に暮れて了ひました。遠くから夜廻りの拍子木の音が流れて参りました。それからでございます。何と云ふ大それたことをしたのでございませう。意を決して私は扉に手を掛けました。習ひ覚えしました機械體操で割合に樂に扉にのほりました。犬は益々吠えて、私の足が届く位になりました時には噛みつくやうでございました。犬も私だと知りました時大分温熱しくはなりましたが、あまりに吠えてましたのでぢいやがおきて参りました。そして女中を起こして私を暖い家の中に入れて呉れました。犬は外でまだ餘憤さらぬやうに呻つて居りました。其時女中が私に教へて呉れました。『奥様が十二時過まで戸を開けて待つておいででした』と。

私が最近御目にかゝりましたのはたしか今年の五月下旬であつたと記憶して居ります。あのいつもの應接室で久し振りで御目にかゝりまして、私の任官以來久しく放つておきました御挨拶を述べたり、四方山の御話を伺つたりしまして歸りましたその時はまた秋にもなりましたらと考へて居りましたのに今はそれも空しくなつて了ひ、またロマントイッシュな私が其時の御話などからいろ／＼想像して唯一人きめて居りました喜びももう今は全く夢となつて了ひました。

九月一日の地震はたゞ逃れられぬ運命と云つてあきらめて了ふにはあまりに大きな悲しみを私共に残して呉れました。まして當時すぐ傍に居られました御母堂や己代子さん、また遠くに居られました御主人や義次さん方のその御心の中を御察し申して何とも御慰め申す言葉も見出すことが出来ないでございます。人一倍御丈夫のやうに思つて居りましたのに、また人一倍よい人であられよい母君であられましたのに、御一家も此から彌榮えられるのでございましたせうに、しかしたゞ一つの心遣りはあの一番ひどかつた本牧で平生から非常に孝養を盡して居られました御母堂と恐らくは一番氣遣つて居られました小さい己代子さんが健全に歸京せられたことでございます。



私が二日に長者丸の御家に伺ひました時、本牧には御三人だけがおいででと聞きまして蔭ながら御無事を祈つて居りました。道を歩いて居りましたが『横濱は……』と云ふ人のございます時は何時も聴き耳を立て、また時には進んで『本牧は？』と聞いたりして居りましたが、そのしらせは何れも悲しみを増すばかりでございました。多忙に動いて居りました身の特におたづねする暇もなく、再び御伺ひしました時にはもう『とんだことで』と申し上げるより他なかつたのでございました。しかしその御迎の自動車が出て行くのを送りました時にも私にはどうしてもさうとは思はれませんでした。それから三月なる今日ですらいつものやうに出て來られました。また四方山の御話をして下さるやうに思はれてなりません。どうしてもこのまゝ御目にかゝれないのだとは思はれません。

しかし徒らな悲しみはお喜び下さらないのでございませう。美しく清らかな御靈は愛せられました義郎さんの側にあつて残られました御一家の方々を永へに護られ、導かれるのでございませう。また私の中なる年餘の賜こそは永久に私を育て、ひいては私の周囲の人々にその餘榮の及ぶことであらうと信じて居ります。年餘の御教はあまりに尊くありがたく、恐らくはこの拙い筆を以ては感謝の萬一もあらはずことは出来ないとは思つて居りますが、たゞ昔ながらの寛仁を以て赦し導かれんことを祈つてやまないでございます。(大正十二年十一月下旬)

偲記

(鐵原) 大野孝太郎

私は永年膝下に御愛顧を受けましたので、此度の御不幸には一層悲哀が多いのです、何か御偲をと筆を握りましたが難感交々起りまして唯茫然として幾回となく此記稿をやめた譯であります。

回想すれば御假住居であつた御生涯中私がとりわけ御世話を忝ふした處は秋田、麻布永坂、本郷四片町、京城と今の本住居とであります。其間の御動靜に對しては私の様なものが申上ぐるは恐懼で又愚かであります。先づ終始一貫常に御孝心深く將來の御希望をお娛しみに内助の功を樹てられある以外に何物もなかつた様に感じました。殊に私が敬慕して止まない點は、御寛大なる御襟度でありました。又御夫人として實に御修養の圓滿なお方で嚴格なる内にも極めて温情の厚いところは浮薄なる御夫人の多い現代に於て、斯かるお方を失うたのは國家の大損失と感じます。

其御圓滿なる御性格を申上ぐれば、京城、東京に於ける御官職時代の御家庭としては随分部下の御夫人方も多く見受けましたが其皆さんが異口同音に其御徳に感じられないお方は無かつたのであります。又御召使人の平素感激しある御徳としては過失に對する御寛大なる御態度であつたのであります。

其御一例として、私が京城時代に漢江の舟遊びに御伴した時の事でありましたが其御歸途の際、私がお預りの器具類を手して歩行中迂つかりして地上に墜落したため破碎したのであります。當時私も餘り御大事の器具なりしを想ひ、其處置に途惑したのであります。其折りにも何等の御糺向もなく御笑顔にて四力の御話し杯を遊ばされ一向お氣に留められぬ御襟度の其瞬間には私は宛かも崇高なる一光明に感電した心地をいたしました。

斯の様な御徳を偲び御話を申上ぐれば澤山御座いますが、それは今後更に申上度いと存じます。此筆の終はらんとする刹那、嗚呼過ぎし横濱への御旅行は何んと悲しい、又いぢらしい愁哀!! と仰いで天を大喝するのであります。



亡き叔母君へ

(東帝大) 坂口 忠男

叔母様。私には、どうしても叔母様がお亡くなりになつたとは思へません。東京へ行つて、大崎のお宅に伺へば、またあの明るい、お離座敷で、お祖母様と御一緒に、己代ちゃんを相手に、お話をしたり、繪本を讀んだりしてゐらつしやる有様にお目にかゝれるやうな氣がしてならないのです。でも、叔母様は、ほんたうにお亡くなり遊ばしたので御座いますね。あの御丈夫でゐらした叔母様がお亡くなりになつたとは、ほんとに夢の様で御座います。九月一日の大地震さへなかつたら、地震はあつても、東京にさへゐらしたならば、私ばかりではなく、皆様がどんなにか、残念に思召してゐらつしやることで御座いませう。殊に御父様のお話によれば、その前々日東京へお歸りになつて、本牧へはもう行きたくない。とおつしやつてゐた相で御座いますね。そして、その翌日は、東京へ、お引き揚げなさる筈でしたとか。僅か一日のことで、あんな、無残な、御最後をお遂けになつたとは、叔母様の御心中、お察し申上けるのも、涙で御座います。

叔母様。生者必滅と釋迦は説いてをります。誠に、それは眞理でせう。生ある人間として、誰でもが、一度は、必ず死の手に迎へられることで御座いませうけれど、叔母様の死はあまりに早過ぎました。あまりに突然でした。そして、あまりに、惨めでした。お亡くなり遊ばした、叔母様の御無念は、申すに及ばず、後にお残りになつた叔父様やお祖母様、義次様や己代子様の御悲しみと、御嘆きとは、涙なくして、お察し申上ぐることは出来ません。あの九月一日正午の出来事が、數萬の人々と一緒に、私共の叔母様を、私共から永久に奪ひ去つたと思ふと、心ない自然に對してすら、呪ひの想ひを抱かすにはゐられません。

叔母様、七月二十七日、八日の頃だつたでせうか。私が叔母様に最後のお別れを申上げましたのは。今こそ、最後と申しますけれど、其の時、それが最後のお別れだなどと、どうして、思ひませう。丁度それは、私が病氣以來初めてお宅をお訪ねした時で御座いました。その日は珍らしく、久し振りに、お宅で泊めて頂いて、翌日午後義次様と一緒に銀座へ出掛ける時、玄關まで送つて頂いたのですが、私は歸郷前に、も一度お訪ねしようと思つてをりましたので、その時は、碌に御挨拶も申上げずにお別れましたのに、それが、今生の永久のお別れになるとは。今更ながら人生の無常を痛感せずにはゐられません。

叔母様。筑紫野の冬の夜は、靜かに更けてゆきます。かうして、靜かに夜の靜寂に對してゐますと、御在世中の叔母様の面影が——殊に、私を病院にお見舞下さつた時のお姿は、最近のことなので、尙一層はつきりと、頭に浮んで、私に話かけてゐるらつしやるやうな氣が致します。でも、これは私の心が見る幻影で、本當の叔母様にはもう永久に、お目にかゝることが出来ないのだと思ふと、悲しさで一杯で御座います。

叔母様。私は、今この叔母様への最後のお手紙を書くに當つて、永い間、かはらない温い御心で私をお導き下さいましたことを、厚く御禮申上度う御座います。どうぞ私の心からの感謝をおうけ下さいませ。

叔母様。これで、お別れ致します。御心安らかに、永久の眠におつきになるやうお祈りして筆を擱きます。

(一九三三、一一、二五。)

奥様に就て思ひ出すことども

(遞信省) 高尾 卯平

火災には勿論安全地域であることが分りましたので先づ地震丈けなら御屋敷に限つて又皆様にも別異は無からうと思惟し



つゝも尙不安に驅られながら御宅を御伺ひしたのが四日の日の午後でありました。そして偶然奥様の横濱での御不幸を知りました時私の期待は裏切られて暫くは眞夢のやうでありました。誠に思掛けない奥様の御罹災それは何といふ傷ましいそして悲しいことでありませう。永い間御世話を頂いて慈母の如く敬慕してをつた奥様を失つた私は恰も遽に魂を奪はれたやうで痛恨と落膽と一種の淋しさを感ぜずにはをられませんでした。去年の暮から今年にかけて數度御宅へ御伺ひした時奥様には生憎旅行中で御目に掛かることが出来なかつた。丁度去年正月御目に掛かつたのが最後で之が永久の御別れにならうとは誠に神ならぬ身の知る由もありませんでした。私は其の時ボリーナスで拵へた羽織袴の禮服で参りました。旦那様も御在宅で丁度御暇を告げて立上ると奥様は「これ拵へたの」と仰しやつて私自身の力で一通りの服裝が出来たことを如何にも悦ばしげに手にとつて見られなりました。その時の有様は今尙眼前に髣髴致します。

抑々私が始めて田中家の書生にはひつたのが大正二年十月で田舎の中學を出たばかりの初の上京であるなら奥様の御前でも言葉遣ひなどのことで屢々喜劇を演じました。その頃の御住宅は芝の白金今里町で只今の邸宅へは翌年春に移轉されたが愈々家族の一員となつて旦那様や奥様の種々御懇篤なる訓を受け何呉れと御心配を頂いたので大正五年夏學校の都合で外に下宿する迄は朝な夕なに御人格に接して居ました。御屋敷を出てからは終始御伺ひして御手傳ひなど致しました。奥様は實に良妻賢母の典型で極めて御聰明な確乎した人でありました。御家庭の切廻しは勿論のこと旦那様の御出先の事まで細心の御注意を拂はれて些も遺漏の點がなかつたやうに御見受け致しました。それに女性通有な輕薄らしい虚榮的な點は毫頭ない質素で謙讓でそして仲々氣の勝つた男優りの所もお有りのやうでありました。旦那様に代つて訪客の應接をなされる時などの態度は實に立派なものであるやうに拜見致しました。奥様は且つ極めて規律的で嚴格でありました。旦那様の御宴會や或は來客でどんなに御休みの遅い時でも御起床時間は定まつて早くありました。私などは毎つもそれから起き出るので恥し

い次第でありました。私は朝起きてより食事までの間に玄關と應接間の掃除を仰せ付かつて居りました。時偶寢過ごして周章て書生部屋を飛び出るともう客室の掃除が綺麗に済んで居たりして面喰つたこともありました。勿論坊ちゃん方にも嚴格で我儘な事は仲々聽かれなかつた。殊に教育や健康や修養の方面には非常に心を用ゐられたやうに思ひます。私は坊ちゃん御伴で小學校の運動會へ参つたことがありました。或は天氣の良い暖い日曜日などに荻窪の別荘に遊びに行つたことも屢々ありました。その時は純朴な田舎の情景に恰も歸省の感が致しました。或は害の無い演劇を有樂座に見に行つたこともありました。又旦那様の御名代で縣人會へ行つて大隅さんや本野さんの演説を聞いたこともありました。そんな時は何時も晚餐團樂の席でその日の模様を語らせて御両親と打興ぜられて居ました。就中修養としては靜坐を奨められました。私も坊ちゃん方と一緒に高輪の養眞會へ参つて藤田靈齋氏より腹式呼吸法を習ひました。一時坊ちゃん方には毎晩御就寢前に勵行されてをりました。坊ちゃん方が晝間の御疲れでお眠い時など奥様は無理にも茶の間の卓前に坐らして一定時分丈け濟まさせば休ませられませんでした。奥様は又頭腦の働のデリケートな記憶の良い方でありました。福地君が來るとよく二人で奥様の御指圖を受けて倉の中の掃除を致しましたが奥様は凡ての品物の所在を一々暗記してをられたのには驚かされました。そして此んな時にはよく佐賀言葉など挿んで笑はせられました。小包や小荷物の開装を言ひ付けられる時など糸や針を粗末にせぬやうに注意せられ面倒臭いのでナイフで切らうとして叱られることなどもありました。新聞の整理も厳しい方でありましたが斯うした例は取りも直さず私達にとつて不言の教訓でありました。奥様は又極めて行き届いた思遣りの深い方でそれが何より私達には幸福でありました。私は毎月の小使を奥様の御手から頂戴致しました。御屋敷を出てからも學資の不足を頂戴に参りました。或時小使を使ひ過ごして奥様に申出で兼ね誰やらから借りたことがあつた時など將來をたしなめられ早速金若干を遣されました。日曜日などで使に出される時など別に電車切符と辨當代を渡されました。私の辨當のおそさい



も一々奥様の御指圖でよく手づから卵焼きなどして入れて頂いたこともありましたが、病氣の時には直ぐ醫者に診せ又病院へも通して頂きました。或は芝の傳研に入院中態々病狀を尋ねに見えられたこともありましたが、御屋敷を出て間もなくの事小池氏の家に寄寓中脚氣で醫者に轉地を奨められた時は早速荻窪にやつて頂いたが其處がよく身體に適つて一寸の間に回復致しました。御禮に上ると新鮮な玉子を頂戴致しました。思出は仲々盡き相にもありませんが斯うしたお情けの數々は固より且那様の思召しにも相違ございませんが痒い所に手の届くやうな細かい御撈りは又奥様の御はからへでもありまして物體ないが「育ての親」といふ感が致しますのも蓋し偶然處ではないのでございます。

私が漸く一家を持つやうになりましたからもお情けの程は一層深きものがありました。大正九年横濱に居る頃家内への御葉書に

御手紙拜見致候この程の風にも別段御さはりなき由何より存候當方も無事に相すみ申候御申越の事は先き頃より心にかゝり一二度見に参り候も思はしからず其のまゝに相成居候誠に申わけ御座なく候やうく買求め置き候も鐵道便に托し送らんかと存候も萬一損じ候時はと心配致し居候就ては高尾殿序の折來宅下されまじくや手にさけ持ち歸りもらへば一番安神に御座候電車賃位は當方にて支出致すべく候申後れ候が妊娠致され候由何より存候何卒折角大切に無理をせぬ様され度候山田の奥様も同様の由に御座候先は右通知旁御わび迄一同よりよろしく早々 十月四日夜  
之も横濱で長男が生れて間もない頃妻は未だ産褥に在るに突然兄の不幸の報に接しましたので私は遽かに田舎に歸るべく餘儀なくされました。その時は恰も且那様が御病氣で入院された所で御取込中にも拘らず留守中を非常に心配せられ現金一封を價格表記で送られてありました。それには次の御手紙が添へてありました。  
光づは安産ことに男子の由よろこばしく存候其後順に御肥立に候や早速御よろこび申す筈の處かれこれ取まぎれ御無沙

汰致候別紙誠に輕少なながら御見舞として送附致候間玉子又は牛乳にかへ御用ひ被下度候赤チャンの産衣にてもと存居候へ共取込の爲外出も出來かね候故又後より何とか致すべく候先は取あへず右まで折角御身大切になされ度候早々  
間もなく兒供の爲に結構な衣物が白木屋より送つてきました。次で私は東京轉勤となつて池上に住居することになりましたが最近此處で長女が生まれた時も美事な衣物を頂戴致しました。

其の後は御無沙汰致候先き頃は御安産の由御目度く存上候其の後順當に御肥立に候や早速二人の子持ちとなられ中々の骨折とお察し致候本日粗品御祝の印迄に小包にて差出置き候まゝ御受取下され度鹽鮭は新潟の方より到來致候故御移し致候早速御よろこびをと存じながらこれ取まぎれ延引致候度々雪ふり寒さも中々去りかね子持ちにはお天氣のわるきと寒が一番こたへ候故御困りと存候折角用心なされ度小供達に風など引かせぬ様御注意なされ度候まづは右迄かしこ  
二月二十一日  
末ながら高尾殿へよろしく一同よりくれぐれも宜敷申付候

御便りは之が最後のものので繰り返し熟讀する毎に憐憫の御情盡きざるものあるを窺はれて思はず感激の涙にくるることがございませう頂戴の品は何れも今は尙ほ奥様の忘れがたみとして大切に於てをる次第でございます  
(震災の年將に暮れんとする日)

奥様の在りし日を忍びて

(富士膝下横川畔) 福地 愛吉

私は一度突如御永眠被遊し田中先生奥様の亡き御靈を衷心より御慕ひ申すものであります思へば東京を離れて此の富士山



の膝下に水力電氣建の業務に來たのも三年前でそれから今日までの間に實に恐しい天災に遭遇致しましたそれは本春幾年來とか富士山の大雪崩と今度の大地震でありましたそして今度の大地震は上は皇族の宮三殿下を始め奉り幾十萬の方々が痛しく此の世を去られました而して長き間お慕ひ申せし田中先生の奥様も又今度歸らぬ旅路に向はれました

思へば佐世保に在りし大正六年五月十一日奥様より音信の一節に「さて義郎之弔文御多忙中早速御送附被下有難くおかけ誌上賑しく相成り先づは右御禮まで」と認めて送り被下しつゝ此の間の様な心地致しますそれに今其の奥様の在りし日を御追悼申すとは轉た感慨無量筆執る事だに嘆しくてなりませぬ

嗚呼回顧致しますれば大正元年秋の暮歳齒も行かぬ十九郷里佐賀より白金三光町の御假寓に御伺してより十二ヶ年間文目も明らぬ私に眞の親にも優る御綿道を一一細々と或は在學上に或は在營上に或は奉職上にいと御懇切に給はり其の蒙りし御高恩や山よりも高く海よりも尙深し然して今度奥様御逝去の報に接し直ちに上京し御伺するや奥様には最早佛壇の方と代らせられ……暫し私は涙に覆はれ頭だに上ぐる事は出来ませんでした

先生が今日郷黨の駿傑として國家の重きに又實業界の双壁として世に輝かされしは一つは奥様多年の内助の功に依る所甚だ多かりし事と思はれますそして奥様には何時もでつぶり肥つたおちつきのあるしつかりした方で時たま「お變りはありませんか」と御尋ねすれば何時も此の通りですと笑つてゐらつしましたそして私の知つた十一、二年間の内には御病氣とてもなされず極く達者な方でした

それから日曜日等に山内さん(帝大) 光石さん(美術) 田川さん(遞練) 副島さん(遞練) 私等がお邸にて一所になれば今日は書生さんが多勢見えたがお晝には何しませうなんか言つて色々御馳走して珍しく皆なの御給仕どもして笑はしてゐらつしやいましたそして己代子さんが皆さんカクレンボーしませうよとおつしやれば奥様も混つてあの廣いお邸も足らぬ様よく騒いでゐらつしやいましたそれから義次さんの學期始め等になればたくさんの洗濯物をお揃へになつて「兄さんはでよいでせう」と言つて柳行李に詰められ學習院第一寮などと荷札をつけてゐらつしやいました

それから時折用達なんぞ手傳して次の日曜日等に御伺ひすると何より先に「此の間は御世話様でした」と必ず御禮いつてゐらつしやつた之には誠に痛入る次第でした

次に先生が大正十年チブスの爲め臺町の傳染病研究所へ長く御入院なさいました其の際奥様にはどんな日でも毎日午前中は家の用を爲され午後は病院へ通つて先生の御病氣を専心御看護被遊何時も夕暮遅くお歸りなすつてゐらつしやいましたそして休る暇だに無く直に明日病院へ持つて行くものや其の仕度等をして夕飯も大變おくれゐらつしやつた

其の内私は山梨に行かねばならぬ事になり只管奥様の御心勞を深く御忍び申して居りました其の後先生の長の御病氣も奥様始め皆さまの心盡しの甲斐ありて美事に全快致されましたそれから平和博覽會のありし昨年五月一週間程上京して何くれとなく御取持に預り尙本春東京で私の結婚式の時先生始め御隠居様己代子様と打揃つて御一所にお出被下され何時にもなき御機嫌で終りまで面白き話や私の褒め言葉等致され大變喜こんで戴きましたそれが奥様との最後の御別れだつたかと思へば返す返すも残念でなりませぬ

(一一一一一一)

## 思ひ出

(松山の里にて) 一一神クニ子

大正十二年九月一日は何といふ恐ろしい日で御座いましたでせう私が杖とも柱とも頼んで居りましたお姉様は此日に此恐ろしい天災の爲にお仆れ遊しました餘りに悲しい出來事に私は何と言つてよいか嘆の言葉さへ知りません唯々涙に咽ぶのみ



で御座います。

お姉様は御郷里は宇和島で御座いますけれ共叔父様のお務の都合で宇和島にお住居遊しました事はほんの一時であつた様に思ひます。

それは今から三十年近くも前の事でお姉様が女學校を御卒業後間のない時で御座いました私は常々母から田中の叔父様御一家の事を聞かされて居りましたけれ共未だ物心を辨へぬ私にはえらい叔父様で何んなお方だらうと思ひますばかりでした始めて叔父様にも叔母様にもお姉様にもお目にかゝつてそれはく嬉しかつたのです廣いお家にたつた三人しかも大人の方ばかりでしたけれ共私はお姉様にお目にかかりたくて度々お邪魔に出ました當時田舎では女の子は小學校でも卒業しますればそれはく偉くなつた様に言つて居りましたから申す迄もなく女學校などはありませんお姉様は幼い時から都會でお暮しになつて居ります殊に女學校までは卒業になつて居りましたけれども田舎へお歸りになりますればやはり田舎者とよくお親しみ下さいました。叔父様や叔母様のお言ひつけをよくお守りになつて居りましたそして不平がましいお顔の見えた事はありませんでした。私が行きますと笑つてお迎へして下さいますのはお姉様でした。可愛いお人形を下さつたりお人形に着物を着せて下さつたり袋や巾着を縫つて下さつたりして大變お優美しくして下さいました。これは私が七歳位の時の事で御座います其時代の記憶を少しも残して居りません私に此事ばかりは一生忘れる事の出来ない深いく印象となつて居りますお姉様を思ひますと直ぐにこれを連想致しますそれも其管で御座います私の敬愛して居りますお姉様にお目にかかります之れが最後の日であつたのです。何といふ悲しい廻り合せて御座いませうあまりに敢果ないお別では御座いませんか。かうした楽しい日は一年も續きませんでしたお姉様達は又都の人とおなりなさいました其後は母から色々とお噂を承りまして日にく御出世遊しました事をおよろこび申して居りましたお姉様は美しいお心を立派にお培かひ遊しまして實に現代の女子として充分な修養をお積みになつてお出なさいました。先年母を失ひました時のお優美しみ且又毎年の忌日をお忘れもなく懇にお弔ひ下さいました御心と私共をまで御見捨なくお導下さいました慈愛と親切な御心、確い信念をお持ちになりながら人と争ひがましき事等遊す事のなかつた御氣立まことに主婦として母として立派な徳をおそなへになつてお出なさいました。

こんなにお美しいお姉様はわづかひと時の災厄の爲にかはる世の人とおなりなさいまして今は冷い土の下に安らげくお眠り遊しますとは思へば一々涙の種で御座います。今はたゞ深き情と高き徳をお慕ひして日頃のお心にそはん事に努めますのみで御座います御片身として残させ給ひし己代子様何うかお父様の御手によつて立派に御生長遊ませ之によつてお姉様は永へに楽しくお眠り遊す事で御座いませう。

弔文

(長崎醫專學士)

平田驅馬尾

御地大震災の悲報を新紙に見るや直に貴兄等の上に思浮みて毎日御消息如何に幸に無事であれかしと祈り居り候處終に意外なる御報に依り筆取る氣にさへ成り不申候又罹災地に向けての書狀は受付けぬとの事で今日明日と打過けて只貴兄の御心情を思ひ心苦しき時日を過し候噫残念の事であつた君に對する永い間の勞苦を想へば涙なくして書くを得ず君は當世に於ける達人なるも彼は實に貞淑なる賢夫人であつた而して能く君を知るものであつた誠に惜しき事をした余は今一度遇つて君の變遷の経過を楽しく語らんと期せしに空となれり今更那んほ悔んでも返らぬ事となれり而して君又人生最大不幸の一を重ねたり長子を死して永き病終に此一大災厄に遇ふ實に不幸なる身である乍併仕方なし身心未だ壯健なれば義



理ある田中家に對しても沮喪すべきにあらず一難一艱をけみし去りて大成すべしだ  
御母上によりしく申上被下御負傷の経過は宜しく候哉

公私の事務で御多忙にて候はんも可成自愛御節養せられよ路も遠く職業意に任せず一寸走りて見舞も不出來残念な次第に  
て候幸に拙家は無事に打過居り候愚妻よりも呉れども御悔申上候 草々頓首

九月 十六 日

慈愛への感謝震災前後

(逓信省技手)

田川 亨

大きい慘禍を残して大正十二年も過ぎゆかうとしてゐます、霜夜の静けさをやぶつて響いて來る除夜の鐘を聞きながら四  
ヶ月前の出來事を考へて見ますと何とも云へない感情に襲はれます、私が伯母上にお目にかゝつた最後は八月二十九日であ  
りました、九月二日には本牧を引き上げられる豫定で留守居をしてゐた私に二日には自動車をもつて迎へに來る様にといろ  
いろ御注意があつて夕方本牧へ行かれました、それが最後の拜眉にならうとは誰が想像し得たでせう。

九月一日の地震當時に京橋の勤務先にあつた私は本邸の事が氣になつて晝食もとらずに乗り物の絶無になつた騒亂の街を  
長者丸へ急ぎました、本邸へ歸り着いたのは午後二時頃でしたがすぐ前の衛生材料廠が火事で周圍は混雜を極めて居まし  
た、ともすれば火が擴がつて來さうになるのでそれを心配し乍ら夜を迎へました、本牧の方は氣になりながらもそのまゝ本  
邸を後にして出かける事も出來ず不安の夜の過ぎ行くのを家に入つたり外に出たりして待つてゐました、屢々襲ふ餘震にお  
びえながら暗黒の外に出ました時に下町の空は眞紅に燃えて物凄い爆音が絶え間なく聞かれるのでした。

かうして不安の夜は明けて二日になりました、本所から命からがら逃れ來た運轉手が運轉する自動車中の人となつたのは  
正午頃でありましたが大森迄行つた時自動車は止められそれから先きは歩かなければならなくなりました、往く者來る者で  
道路は混雜を極めて歩行もなかなか思ふ様にははかどりません、鶴見の邊では鮮人で騒いでゐましたが人々の心はまあ何と  
云ふ逆上の仕方でしたらう、後から追つかけて來た家僕と出あつてからも足の續く限り歩みを早めました、それでも東神奈  
川へ入つた時にはもう日が全く暮れて昨夜あたり焼けたらしい此邊一體は異臭で満ちてゐました、横濱の街の入口では自警  
團の人々につかまつて危く鷲口か日本刀でやられる所でした、横濱驛から櫻木町驛までの電車通りは片側が未だ焼けてゐる  
所もあつてその火あかりで歩きよかつたのですが櫻木町驛から先きは暗黒で方向も立たず行きあふ人もないので進む事も困  
難になりました、頂度その時食料品を運搬する青年會の數人が來たので共につれて行つてもらうことにして疲れた足を引ず  
つてそれ等の人の後について進みましたが焼け落ちた電線が縦横にからみ合つて道をふさいでゐて歩きにくい事は一通りで  
ありません、幾度か首をひつかけさうになりました、その上度々道の真中にころがつてゐる大きい何ものかにつまづきまし  
たがその時には眞暗で何だかわからずに行き過ぎて翌日歸途によく見れば焼死體だつたのです、本牧の手前の川には橋がな  
く杭の上に焼け落ちた木がのつかつてゐるのをあぶない足つきで渡つてやつと坂の所まで來ました、此處で青年會の人々に  
別れて坂をのほつて行きますとその先の山の中から小銃の音が響いて來ます、その坂の上に巡查と自警團の人々が居て親  
切に道を教へてくれましたので教へられた通りに坂を下つて反對側の電車線に沿うて前進しました、所々で線路の真中に焚  
火して自警團の若者が竹槍や小銃を持つて夜をいましめてゐる誰何せられ山川の合言葉や云はせられたりしました、やつと  
箕輪下の邊までたどりつきましたがもう夜もふけてゐますしそれに此邊の家は皆倒れた上に躑けてゐるので祖母上初め皆様  
は何處に避難して居られるのか別りません、その邊の人々に聞いてもその見當すらもつきませんので仕方なくある焚火の横



の草むらで一夜を明かす事にきめてそのまゝ横になり二本のバナ、を夕食の代りにして少しまどろんだ頃頭が冷かになりましたので眼をさしますと雨がポツポツと降つてゐます、横の方の屋根か何かの崩れた隙き間に腹這ひになつて野良犬の様に夜のあけるのを待ちました、夜明けになつて雨はやみました、睡眠不足の眼をこすり乍ら所々の避難所を探しましたがなかなか見當りませんでした、歩いてゐる中にとある田舎家に祖母上と己代子様の居られるのを発見しましたが伯母上の御姿が見えませんが、私がお尋ねする前に祖母上は伯母上の御逝去を語られました、その時まで皆様の御無事を祈り乍ら求めて来た私の心は一時に弛んだのですが徒らに嘆いて居る時でありませぬので、すぐ潰れた家の跡へ行つて見ました、その邊は皆焼けてゐました、その時私の眼に寫つたのは變られた伯母上の御姿——これがあの慈愛に満ちた伯母上の御最期であるとはあまりに酷な運命の悪戯です、私は拂つても拂つても出て来る涙を如何ともする事が出来ませんでした、頂度其處へ宮野氏が來られて共に合掌してお骨を拾つて入れるものもないのです、思ひましたが紙に包んでそれを更に風呂敷に包んで私の脊にしかと結びつけ再び前の田舎家へ行きました、祖母上も己代子様も怪我をして居られるので一先づ少し離れた宮野氏宅に居ていたゞく事として私と家僕とは東京へ向ひました、曇つてゐた空は細い雨を降らし初めましたが道を急ぐ私等は横濱を通りぬけて歩みを進め川崎あたりへ來たに時雨は車軸を流す様に降つて來ましたので油紙を買つて風呂敷の上を洋服の上衣で包み更に油紙で包んで濡れるのを防ぎ三日の夜遅く東京の本邸にお骨を無事安置する事を得ました。

數日前にはなつかしみのあるお聲と慈愛に満ちた眼の主であられた伯母上をかうしてお骨にして持ち歸らうとは何と云ふ哀しい事でせう、現實に動いてゐる自分と自分を幾度か疑ひ現實が夢である様にと願つて見ましたがそれは愚かな人間の願にすぎませんでした、寤ぐるしい夜の夢に幾度か伯母上の御姿を見ましたが醒めれば淋しい思ひを増すに過ぎません、秋は冬になり呪はしい年は逝かうとしても私の悲しみはそして淋しさは薄らいではくれないのです、私の出京後八年の間育まれ

た慈愛の深さは限られた紙に拙い筆では書き盡すことが出来ません、大正五年六年頃は邸に御厄介になつて夜學へ通はせて頂いてゐました、歸るのは大低夜の十時過ぎになりましたが女中さん達を寢せても伯母上はお茶の間に起きて居て下さいました上に牛乳をあたま呑ませていたゞいたのでした、そしてともすれば怠り勝ちの自分を勵まして下さいました、その後大正九年から十年にかけて一年志願兵として電信隊に軍隊生活をしてゐた頃にも日曜日や休みには大崎の邸に歸つて疲れた私を慰めていたゞくのを何よりの楽しみにしてゐました、それはもう秋の冷かさが身に染みる頃ある演習の後の慰勞休暇を何時もの様に大崎の邸にかへつて軍服のまゝ二階に寢ころんでゐると何時か寢こんだものとみえて、眼をさますと布團がかけられてありました、風邪をひかぬ様にとの厚い伯母上のお心づくしからなりました、除隊後も貧弱な私の給料では食べる事がやつとで着るものなど何も出来ませんので頭の方から足の先まで御厄介になりました。

記憶に最も新しい樂しかつた一日は大正十二年の春も逝かうとする五月の或日曜日で暖い太陽が葉櫻を照してゐました、何時も御忙しい伯母上が己代子様と私を連れられて玉川の遊園地へ行かれたのでした、澁谷から新緑の郊外を心地よく滑つてゆく電車の中でいろんなお話をしていたゞき終點の一つ前の停留場で下車して遊園地までの田舎道を微かに吹く風の氣持よさにゆるゆると歩きました、眼にうつるすべての緑が太陽の光りをうけて美しく輝いて散歩する人々も相當に多い遊園地を一周してがら小高い所にある演藝場に入りましたが頂度喜劇が初まつてゐました、その道化者の云ひ振りや身振りがをかしかつたので家にかへつてからも幾度か眞似をしては皆の者を笑はせられたのでした。

演藝場を出て歸途につきましたが玉川電車の終點乗場までの道の片側にあつたけん畑で己代子様のためにけん花を摘んで花束を作られました、三つか四つの花束を手にして軽い疲れをおほえながら歸つたのは夕靄の中に淡い燈の浮かんで見える時でありました、この樂しかつた散歩は己代子様の幼いお心にもはつきり残つて居られるだらうと思ひます、次から次



へ慈愛の思ひ出は湧いて來ます、出京後の私を今日まで育て下さった大きい慈愛の御心は私の此の世にある間私の心を光明の方へ導かれる事でございます、盡きぬ思ひ出の絲も拙い筆では美しく飾ることを得ませんがあの寛大な御靈は貧しいけれども心からの感謝の言葉をおうけ下さるでございます。

□哀悼歌十首□

□ たらちねの母とも思ひ慕ひてし

伯母君まさぬ秋そ哀しき

□ 庭萩の亂れ咲きつゝ秋たけぬ

うつろの心慰まぬかな

□ 夢に見し御姿胸に描きつゝ

勤めに出れば空高晴れぬ

□ 葉櫻に風わたりゆくおそ春の

野遊ひのこと思ひ出てける

□ 幾度かおのか瞳を疑ひて

變りし御姿見つめたりけり

□ 以下三日横濱にて

□ 重なりし瓦の下に身を半

しかれて黒き御姿なりしか

□ 胸のうちに合掌しつゝ木ぎれなど

集めて御骨焼けるひとゝき







榮えてそ靈も榮ゆるなりけり

○形見の品を拜して

老か身の杖柱ともたのみてし

君のかたみを今日うけんとは

戦慄すへき九月朔日!!

田中義直

瞬く間に都は一面の焦土と化しかの大震災に恵み深く渡らせし伯母上を本牧の里に亡ひ悲限りなし

○淋しき折にふれて

去年の秋かりの宿の本牧に

散らせ給ふと誰か思はむ

○告別式の折

夢にだに思はさりけり花と香を

君か御靈に捧くへしとは

又伯母上は殊の外忍耐力と記憶力に富ませられて常に吾等の手本と仰きたり英靈! とこしへに極樂浄土にて成佛し給へかし

(柳黛) 多田 正雄

白梅の散にし後や香はしき

尊さや西に入りぬる月の色

故貞代夫人を追悼して

(元遞信技師) 菊地 元一

嗚呼我が敬愛する田中夫人貞代の君よ君は今いづくへ安眠し給ふやらん當時のことは思ひ返すも涙の種ですから申さぬ方がましてせう夫人は故父君の天にも地にも只一人の愛嬢でありまして幼き頃より蝶よ花よと愛られ給ひ教の道も数々と其奥祕を極められ日本婦人のあらゆる美點を備へられ天晴れ堅忍貞淑なる賢夫人となられ給ひて帝大稀に見る天才におはします背の君に仕へ給ふこと二十有五年内助の功も空しからず御家運益々彌榮え此世ならがの極樂と人皆羨む程でありましたのに此秋長月初の日に思はぬ天魔の襲ひ来て未だ春秋に富む君を惜まぬ人はありませぬ背の君に於せられては先には愛子義郎君

追悼の手紙並文



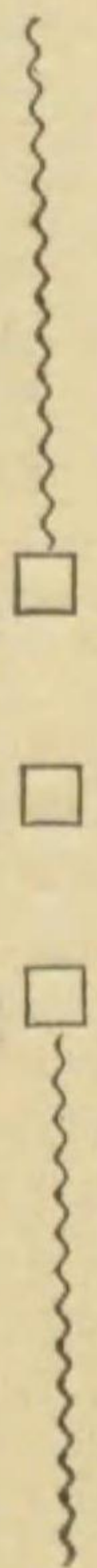
を失ひ給ひ今又最愛の令室を失ひ給ひ其悲みや如何ならんと誠に同情に堪へませぬ  
ア、浮世は全く夢です未だ萬歳の生を受けしことを聞きませぬ朝に紅顔ありて夕に白骨となるのも皆前世の因縁と諦むる  
外はありませぬ今頃は定めし極樂淨土の蓮のうてなにて父君の膝にもたれ給ひ義郎君を抱きつゝ末の末迄田中家の御盛運を  
祈り居らるゝことゝ存じますさはさりながら昨秋の震災があつた様に烈しくなかりしなれどせめて枯葉を散らす風の程度で濟  
みしなれば斯様の悲しきこともなかりしものと今更ながら愚痴の出るのも老の身にのみではありません今胸に浮びたる儘  
君の芳名を読み込みたるもの外一首をしるし聊を追悼の意と致します

さだめある代とは知りつゝ恨むなり

青葉散りにし去年の嵐を

惜みてもはてしもあらし銀婚の

式の間際に散りし君かも



### 幼き折の思出

菊池 セツ

私は叔母と呼ばれる身でした叔母と申しても僅か年が三つしか違ひませんでした貞代様の御父様が早くから官途に就かれ旅  
に出で居られし爲め私が初めて御目に懸つたのが丁度私の兄が丸龜へ轉住する時私も連れられました折貞代様の御父様も觀音  
寺へ轉任になり丸龜へ立寄られた時でした私は十二歳貞代様は九歳で色白で丁度齒の抜替の時で前齒の二つ抜けて居られる

御口元など得も云れぬ可愛らしい御嬢様でした當時は御祖母様御在世で祖母様は私の實の伯母様なので私のことをセツセツ  
よと申されますと貞代様も同じ様にセツよくと申され皆大笑ひを致しました其後觀音寺と丸龜とは僅か七里計の隔りで  
したので絶えず往復して遊で居りました誠に頓智がよくて或時は話家の眞似などしてよく笑せられました暫くすると私の一  
家も高松へ轉住致し又貞代様御一家も高松へ御住ひになる様になり同じ高等小學校へ通學する身となり朝に夕に手を引き合  
ひ遊び暮しました或夜貞代様の御内へ宿り同じ部屋へ一緒に寝ました朝目を覺ますと枕元へお皿にお菓子を入れ置いてあり  
ました私かなぜでせうかと申しますと貞代様はお目ざよ召上れとて御自分は召上りました私は何だかを可笑しくもあり耻  
かしくもありましたが同じ様に頂きました貞代様は性質至つて恰憫で極く明るい頭を持つて居られ其上誠に従順で事に當つ  
て少しも動じない落附いた御方でしたから學業も何時も優等でした當時茶の湯琴のお稽古など又手を携へて參りました物覺  
え至つて早く私の習ふ琴など側で見て居て直ぐ覺えると云ふ程で實に感心して居ました小學卒業後は京都の高等女學校へ御  
入學になり折々の御休に御歸りに成るのを樂しみにして居ました其頃私は東京へ嫁する様になり暫く御目に懸らず私が長男  
を出産する節御上京になり色々とお世話になり其後貞代様も御成婚以來東京へ御住ひになり又々同じ土地に住ひ合ひ喜ぶ間  
もなく私は廣島へ轉任する事になり惜しき御別れを致しました時が明治三十三年五月にて其以來は御互に遠く離れて私の長  
女結婚に就ては又親身も及ばぬ御世話を受け實に能く何事にも行届いた御方でした御家庭の人としては多くを存じませんけ  
れども幼時よりの御性質を思ひますと定めし貞淑の夫人として御良人へ御満足と與へられし事と存じます其後私共も大正十  
二年四月東京へ居を移し以來御互に昔を語り今を聞き非常に楽しく心強く思ひ居ましたのにマー何と云ふ悲しき日の來まし  
た事よ私の最も親愛する貞代様はたうとう大正十二年九月一日あの恐ろしい大地震の爲に未だ光輝ある年月を残して天上さ  
れました今猶御面影を浮びまして全く夢の心地です昨年のお正月は熱海にて同じ宿に遊びしなど思ひはそれからそれへと盡



きず目黒の御宅へ上つても最早お叔母様入らつしやいと出迎へて下さる貞代様の口聲は永久に聞く事は出来ません誠に〜  
限なく悲しき事よ

まがつひのなき代なりせは美しき

君の姿は今も消えまし

御伯母様を憶ふ

(姪) 池田萬龜代

三百里を隔てて居るとは申しながら九月一日は東都及同附近に一大事變があつたとは夢とも知らず過して居りました二日の午後になつて東京は大地震よと人の話を聞いてびつくりしながら一刻も速く詳しい新聞を見んといつも夕刻に来る新聞をまちにまつて居りましたが其日に限り参りませんでしたやう〜三日の夕刻配達いたしました新聞にて東京近傍大震災及び横濱は殆ど全滅との誠に悲惨極まる記事に驚き皆様の御身の上が氣づかかれて殊にかねて横濱へ御避暑中で或は九月初めまで御滞在遊ばします様承つて居りましたのに横濱の全滅の文字を見ては愈々皆様の御安否が氣づかかれあ如何遊ばしてやと飛んで行つて見たくて心のみあせりながら乳呑み子をか〜へしこの身とて自由ならず様發信は申上しものの届かうとも思はれませす唯々日々御噂さのみして何卒御無事なよき御便りをとまちにまつて居りましたのはからずも十一日に思ひがけなき御伯母君の御不幸の悲報を拜しまして夢かとばかりに打ち驚きました あゝ何たる天の災よ唯東の間に無慘にも御伯母君には御壓死遊ばして如何ばかりか御無念に御思召されし事でせうと御察し申ましてはせきくる涙も止めどもなくなんとも言へぬ悲しみの感にうたれました御伯母君の御事や御後の御方々の御なけきましていまだ幼なき己代ちやんの事な

と思ひましては遠きこの地に在るのがまどろしく感ぜられさりとて残念ながら自由ならぬ身とてせめて主人丈なりが上京いたしてくれとて直ちに用意にか〜り翌日まづ〜吉富の宅まで共に歸郷いたしいよ〜出立の手續どもいたして居りましたら御伯父上様よりの詳しき二度目の御手紙を拜しまして上京見合せよとの御事にて一先づ思ひ止りせめて陰供養なりとて母と共に今山のお寺へ参り御寫眞にて回向いたしました 思ひかへせば私は佐賀の學校を出るや否や御伯母君の御膝下に御厄介に上りましたまだ右も左もわからぬ田舎者の私を御懇に御育て頂き長年の間御面倒をわづらはせし事今思つても御氣の毒に存ぜられます私が今日小さいながらも一家の人として過せるも全く御伯母様の御陰でございます あゝ一昨年十一月に御別れ申上たのが今は永久の御別れになりしとは今更夢心地して御伯母君の御聲は残り御姿はあり〜として忘れる事が出来ません長年の間私の一身上につきましては此上もない御懇切なる御心配にあづかり實に親にもまさる御心づくしの數々誠に〜感謝にたえぬ次第でございます御高恩の萬分の一だに報恩奉らすかへすがへすも残念に存じて居りますまた遠くこの地に隔りてからもいつも〜御こま〜なる御心ごもりの御玉章を頂き殊に横濱よりも三度の御便りの中に最後の御手紙には夏冬とも黒の喪服を仕立てて置く様にとの御認め草あ〜どこ〜までも私の事を御氣づかひ下される御やさしき御心うれしく拜して居りました今から思ひますれば御伯母君がかく御亡くなり遊ばしては喪服など仰せられしが誠に不思議に感ぜられます今は亡き御伯母君の御水莖の跡を拜しましていと悼はしく御なつかしう存ぜられます明年あたりは上京いたし久し振りに御目にかからんものと先きより樂して居りましたに今は早や御伯母君の御やさしき御顔に接して其御言葉さへ聞く事も出来せんかれやこれやを思ひましては唯涙にむせびて認める事も出来ませんさき頃主人丈は五十日祭になりとて上京いたしました私心ならずたうとう同道も叶ひませんでした然し何れ遠からず上京墓参なりとせひいたし度いと思つて居りますまはらぬ筆にて御伯母君を憶ふま〜に



弔文

(在北米) 田中 哲

拜啓待ちに待ちたる御手紙本日漸く落手仕候處實に意外の御慘狀に只々打驚き早速申上くべ御言葉も出でず 其當時の模様を想像すれば實に戰慄致し候前便に依り御家族の本牧に御避暑中と承知致し居りしも多分八月末迄には學校の關係上東京に歸られしならんかとも想像致し居りしも只一日の差にて此の大慘禍に出會せられて伯母様の一人は實にいたまじき無慘の御最後を遂げられしとは返すもも残念に御氣の毒のことに有之候只だ己代子様等の助かりしは全く神の御助けに外ならざりしと存じ候之で伯母様も漸く地下に冥せられしこと、存じ候然し又伯父様及義次さんが當時本牧に居られず方向を轉じて輕井澤に居られ此の慘禍を免れし事も實に御幸運と申度斯くの如く巧妙に惡魔の運命の手より逃れしは全く神業に外ならずと存じ候何事も好き方に考へ直して好く思ひ切らねば人の元氣は次第に衰ひ遂に活力を失ふに立ち至るものと存じ候然るに伯父上の如きは先年義郎さんを失はれ今又伯母様に死別され幼き己代子さんを抱へられたる御心中は仲々に我々の推察に餘りあり御家庭に斯の如き大悲劇ありても一言も御悲歎の御言葉もなく反て大なる御決心にて社會奉仕に御盡力せらるゝとは實に〴〵泣き度き程感じ入り候目下如何にあせるとも御慰むる言葉もなく只残られし方々の御健康と將來の御幸福とを祈る次第に御座候小生も斯る時こそ日頃の御恩報じの機と存じ候へどもあまり遠く離れ居り夫もかなはず只々將來に待つ外仕方無之候今後益伯父上を手本として奮闘の覺悟を始め居り候先日義次さんより御手紙を頂き面白く拜見仕り候返事延引致し居り候次回には必ず差上候間何卒宜敷御傳へ置き被下度候小生母無事のことを聞き長澤氏非常に喜ばれ申候長澤氏も年の爲か近來非常に弱くなられしも未だ心配する程の事もなからんと存ず居り候最近の皆々様の御寫眞を拜見致度希望仕り候

十月十日

勿々頓首

叔母上様の靈に捧げ奉る

(逓信局) 副島 萬

人類が此の地殻上に存續する限り決して忘れられないであらう大正十二年九月一日の大地震には、文化の先驅と云はるゝ通信機關交通機關を始め、すべての運行は中絶され、横濱輕井澤はおろか、東京市内でさへ、お互は全く暗中を彷徨して居ました。あゝ午前十一時五十八分!!! 震天動地一度到るや死の豫感に怯へながら、私が机の下に小さくなつて居た時、叔母上様には、あはれはかなくも幽明界を異にせられたとは神ならぬ身の何うして知る由がありません。八月以來御目にかゝらずに居りましたし、それに、その時の御様子は、只、想像申し上げるだけで拜見して居たわけでもありませんでしたので、九月三日に叔母上様の御不幸を聞きました時、私には、それが何うしても眞實とは思へませんでした。あゝ、しかし、悲しくも、事實は、やつぱり事實でありました。

お怪我は、なされましたが、靜さんの、けなけな働きで、祖母上様も、己代子様も御丈夫でした。勿論、叔父上様も、義次様にも、何のお障りもありませんでした。又外の皆の者も無事でありましたのに。

四日に、祖母上様が、やつと御歸京なされて、叔母上様の御死去も涙ながらに、物語り遊ばさらねばならなかつた祖母上様のお苦しい御胸中………それから、當時の慘狀をまのあたり聞き召され、さうして己代子様の、いたいけな御姿を御覽になつた叔父上様や、義次様の御いたましい御心は………只もう、お察しするさへ涙の種であります。

義次様も、己代子様も、あんなに御成長なされて、叔母上様のおたのしみも、これからでありましたのに。さぞ〴〵無念



でございます。残念でございます。運命とは申しながら、あまりに、なまけなう存じます。

義郎様、御他界の折、私が上京致しましてからこゝに、幾歳の永き間、姉は又つとそれ以前から、私達姉弟が享けた、それこそ、言葉にも、筆にも表はすことの出来ない叔母上様の御高恩を、又何くれとなく副島家の面倒を見てくださった叔母上様の御親切を私達は何うしたらよいのでせう？ 勿論、叔母上様が、たとへ御長命であらせられても到底御高恩の幾百分の一をも酬ゆることは出来ないばかりでなく、かへつて御心配をかけたに違ひありませんか、せめて己代子様の御成長までの御存命が願はしう存じました。

あゝ、何と云ふ御不幸な運命をお持ちだつたこととせう。しかしながら、運命なるものは、全く未知であります。従て運命を開拓することも出来ません。又追ふことも出来ません。只従ふべきのみと私は信じます。家を飛び出して死んだ人もありませう、又飛び出た爲に助かつた者もありませう。生きんが爲には、最前の方法と信じて、その方法を選んだ爲に死んだ人もありませう。中には、機智の爲に命を拾うた者もありませうが、而し、其の機智なるものが、すでに運命の幸な爲であつたかも知れません。全く運であり、命であります。何うすることも出来ません。

天の悪戯は震災のみに止りませんでした。其の直後所々に起つた火焰は、一夜にして、横濱を覆ひ、東京の過半を甜めて幾百億の財貨を焼き盡し、同胞幾十萬の生靈を呑んで、全く此の世ながらの生地獄でありました。

幸ひにして、お家の方は、只、右手の石垣が崩れただけで、別に、大したこともありませんでしたが、前の陸軍衛生材料廠と共に、附近の人家が數十軒炎焼致しました時は、よく、まあ、類焼せなかつたと今以て不思議な位であります。

叔母上様、其の後の様子を、もつと詳しく申し上げたう存じます。又叔母上様の御生前のことども偲び参らせて、心ゆくまでお話致したう存じますが、最早、聲咳にも接することが出来ないのだと思ひますと、只心も打ちみだれて筆もたちかね

ます。

希はくは叔母上様、數々の御高恩に全く酬ゆるこの出来なかつた私の罪をお許し下さいまし。さらば叔母上様御心安らかに瞑せられませ。

二五八四、一、二二、

弔文

(同級) 伊藤 絹枝

(省前) 學校時代の御手紙だの何かおかきになつたものもある筈と心當りをさがしましたが何分二昔三昔も古い事ですからさがし得られません、私は丁度三年前小松様の御宅で同級會のありました時に久しぶりにお目にかゝりました其が永別となるとは夢にだも豫期せざる事で御ざいます同じ窓に机をならべて寄宿舎生活も四年のおきふしを共に致しました事ですからいろ／＼と記憶も呼び起します貞代様は御氣前のよいお方でいつもわからぬ事などお尋すると誰彼の差別なく心よく教へて下さつたものですから皆の人が田中さん之はどうなのあれはなどと田中さん／＼と引張りて聞いたものですから皆が佛様の様な方だと云ふ感念を持つて居ましたそれやこれやをつつて申上たいと存じますが何ら私は文章だの歌ななどと申事は日家事の内外におはれて考へる様の事も御座いませんしまごとおはづかしい次第で御ざいますけれども心のまゝをつつてみましたから歌の良否にかゝはらずたゞ姉君を忍ぶ意だけをおくみとり下さいます様に左に

はふりおつる涙はらく／＼つきせぬは

なるにはてにし君かおもかけ



ぬは玉のつゆのうき世とおもへとも

ちらしゝ風のうらめしきかな

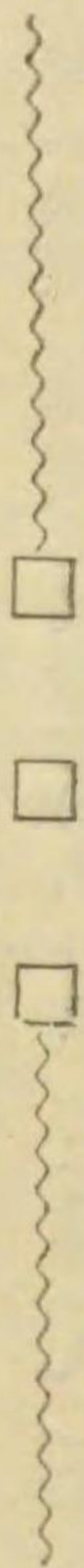
なてし子の花のさかりも背の君も

みすてゝ君はいつこいにけむ

とりいてゝみれば悲しさまさりけり

かたみになれる去年のうつしゑ

一月十七日



悔 状

(同級) 戸田 絹枝

御手紙拜見致候承れば奥様には九月一日の大震災の節横濱にて御逝去被遊候由誠に〜おどろき申候あなた様は申すに及はず御老母様御嬢様の御なさけ如何計と御心中御察し申上候奥様は御心やさしきお方にて寄宿舎時代より誠に親密にお願ひお世話様に相成り候に卒業後は遠方に立ち別れ一度も拜顔せず永久にお別れ致候事返す〜も残念に存候昨年は寫眞帖製作に付一方ならぬ御世話様に相成り候に今はおかたみとなり日々寫眞お取出し涙にくれ居候追々お寒に相成候に奥様俄におかくれにて衣類などの御調製にも如何計ぞ不都合かと存候今迄家事一切をきりまはし被遊候お方のおかくれにて萬事に付け

御心勞の程お察し申上候近い所ならば早速參上致し佛前に參拜もししむ〜お慰もいたし候に遠方にて其さへかなはず残念に候私方に九歳の女兒ありてお嬢様のお身の上一しほ御同情申上候されど餘り御落膽被遊候ては御身體にさはり候間御心丈夫にお持ち被遊お子様方御愛育の程蔭ながらお祈り申上候末筆ながら御老母様へも宜しくお傳被下度候實は早速お悔申上べくの處本月五日より風邪にて引こもり居候間延引の段惡らすお思召下され度候

十月十六日



語らひし昨日や現今日やゆめ

思ひさだめぬ世にもある哉

千 蔭



跋

本書を出版すべく企て諸方面の先輩舊友親戚に其趣を通じて遺文を蒐め詩歌弔文を貰受けしもの集りて机上にうづ高し即ち鉛板に刻して冊子となせり寄稿諸賢の芳志只管感謝に堪へず歌文は寄するの違もなく筆もなけれど年來の交際はより以上なりとて綿々の情を述べられて書信をよせられし方も尠らず森本つちの夫人の如き實に然り數十年來亡妻との親交ありしは親しく敬服したる處なりよし弔歌弔文なくとも積年の御志は必ずや地下に徹し居るべく其他此る例少らず深く其厚意に對して謝意を表す。又亡妻追悼の爲に牧瀬孝子は態々本牧の震火災の跡を親く弔はれ手向せられしと云ふ其御志深く拜謝する處なり。葬儀に付ては藤田四郎内藤久寛松本重敏諸氏の外福田、橋本、津下、中野、下岡、山口、青木、井上、馬渡、夏秋、小橋、添田、岡等の御夫婦、牧瀬、那波、鶴飼、舟津、木部、小松其他諸婦人の御盡力を得たる事を茲に深謝す。尙各方面より寄せられし香典多額に上りしが之は故人の志を酌み時節柄左の通り夫々寄贈して答禮に返へたる事と尙儀式當日は五百に近き朝野名士淑女の參拜を得たる事を衷心より感謝して止まず。

寄贈せる金額

其先

金千五百圓

震災善後會

金五百圓

東京市養育院

金五百圓

日本石油共濟會

金百圓

京都鴨沂會

跋



金百 金百 金百 金百 跋

圓 圓 圓 圓

承 教 寺  
妙 典 寺  
聖 心 女 子 學 院  
其 他

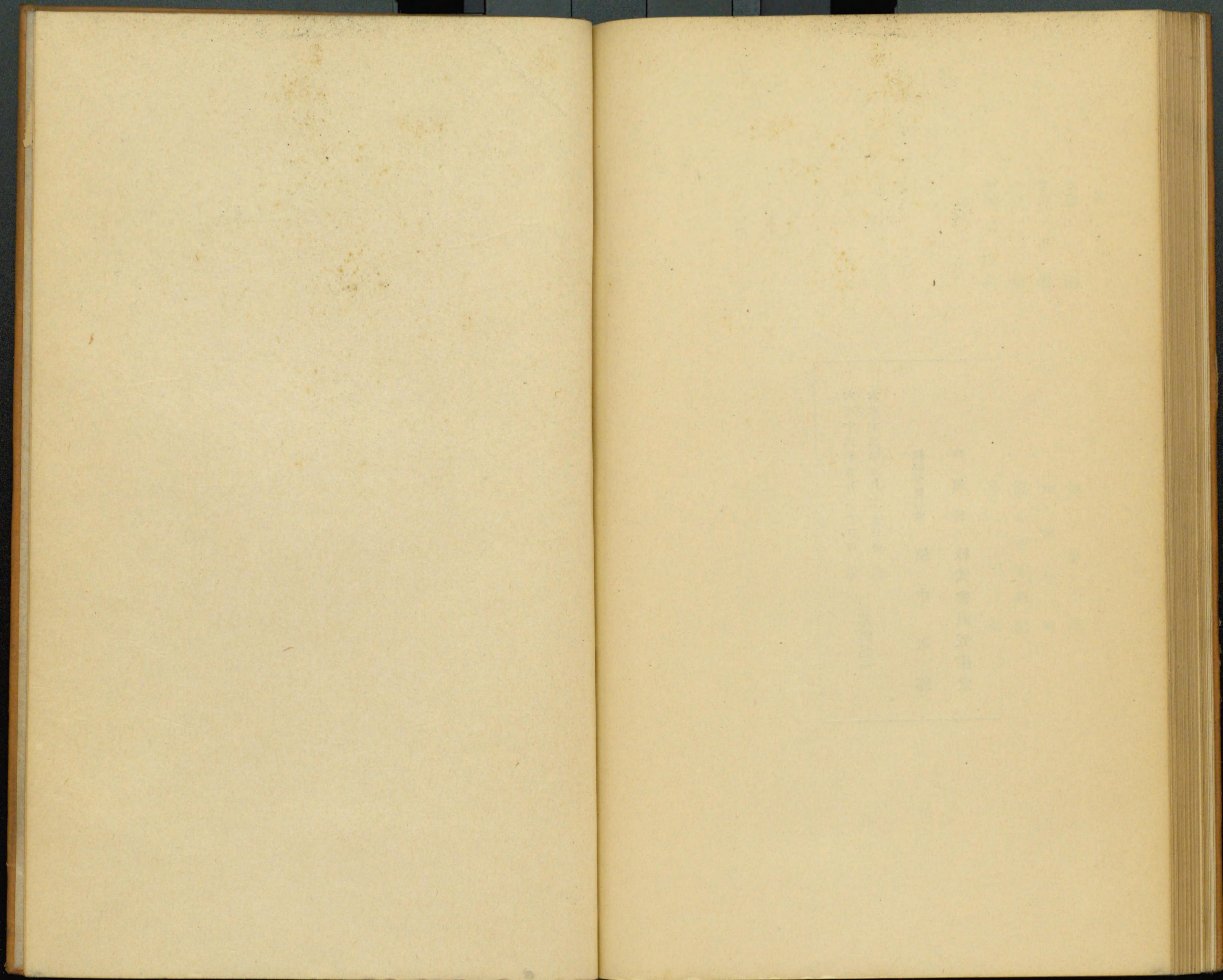
大正十三年五月二十日印刷  
大正十三年五月二十五日發行

(非賣品)

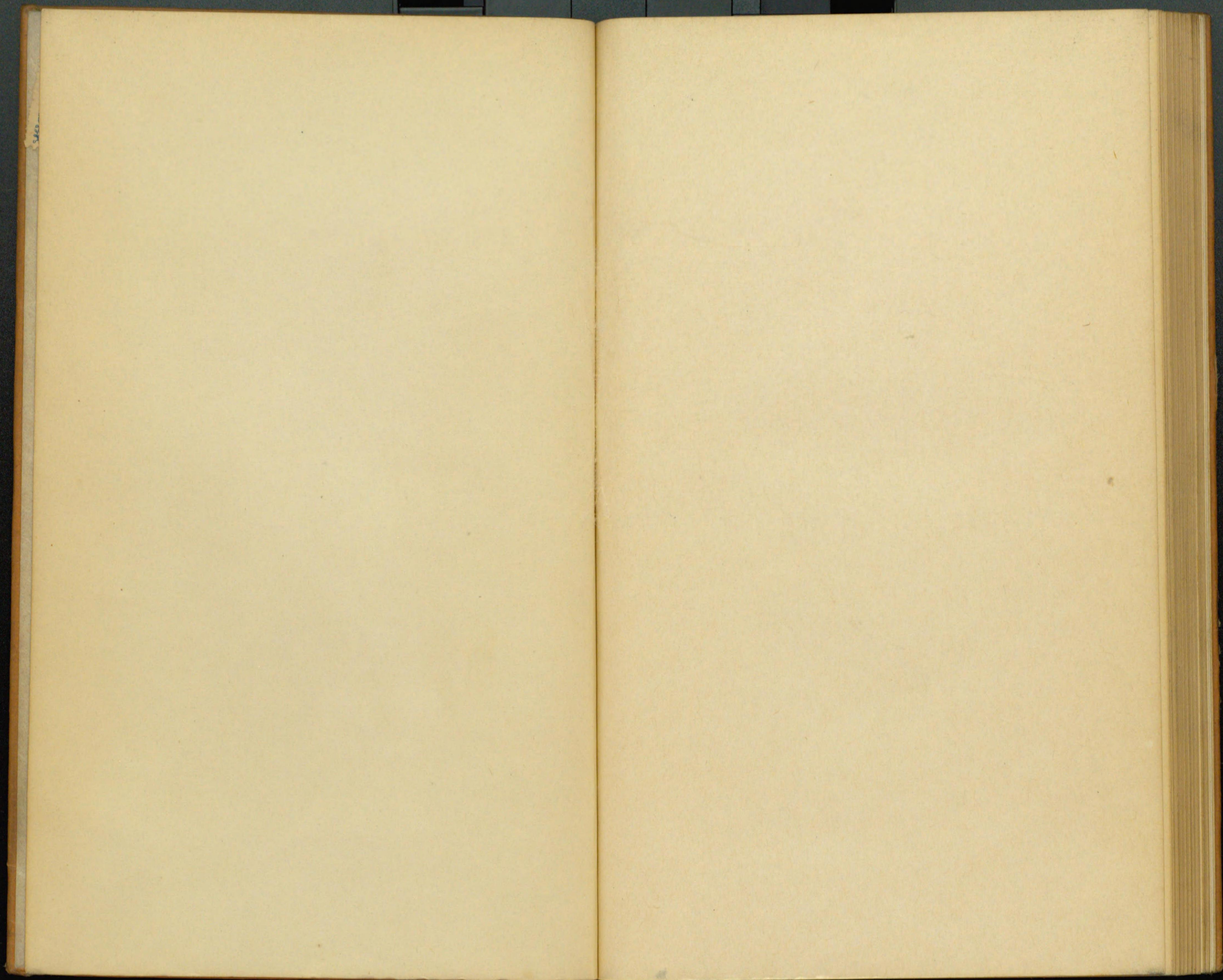
編輯兼發行者 田 中 次 郎

印刷所 株式會社五庄堂











160  
198

